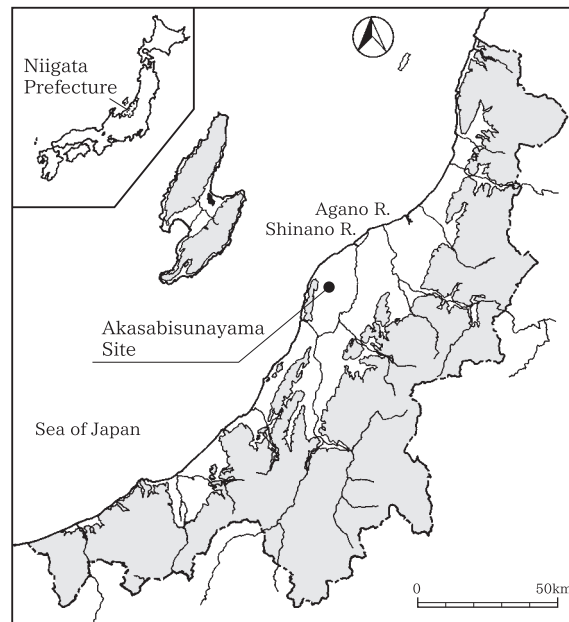


あか さび すな やま
赤縮砂山遺跡 第5次調査

— 商業施設建設に伴う赤縮砂山遺跡第3次発掘調査報告書 —



2019

新潟市教育委員会

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区赤あかさび字すなやま砂山 331-3 番地ほかに所在する赤あかさび砂山遺跡（新潟市遺跡番号 778）第 5 次調査の発掘調査記録である。赤あかさび砂山遺跡第 5 次調査は平成 29 年度に実施した。
- 2 調査は商業施設建設に伴い、株式会社原信から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成 29（2017）年度に発掘調査と整理作業、平成 30（2018）年度に整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 出土遺物および調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集・執筆は立木宏明・澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター）が行った。遺構図版の作成は澤野・立木が行った。遺物図版の作成は奈良・立木が行い、遺構・遺物写真図版の作成は澤野・奈良が行った。執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ章、第Ⅱ章第 1・3 節、第Ⅲ章第 2・3 節、第Ⅴ章第 4 節 A、第Ⅶ章第 3 節を立木、第Ⅱ章第 2 節、第Ⅲ章第 1 節、第Ⅳ章、第Ⅵ章第 1 節、第Ⅶ章第 1 節を澤野、第Ⅴ章第 1～3 節・第 4 節 B、第Ⅶ章第 2 節を奈良が行った。
なお、第Ⅵ章第 2～4 節は株式会社古環境研究所、第Ⅶ章第 5 節は株式会社加速器分析研究所による分析報告を編集して掲載した。
- 6 本書に掲載した写真の撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3・8-4・17-2・19-3 が株式会社オリス、それ以外の遺構写真は立木・澤野、遺物写真は株式会社シン技術コンサルである。
- 7 遺物実測図のデジタルトレースおよび DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 8 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（平成 29 年 7 月 16 日）や平成 29 年度新潟市遺跡発掘調査速報会〔澤野 2018〕で発表されている。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。
伊藤秀和・小熊博史・春日真実・亀井 功・桑原正史・小林昌二・土橋由理子・中島栄一
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社原信

（所属・敬称略、五十音順）

例 言

- 1 本書は新潟県新潟市西蒲区赤舘^{あかさび すなやま}字砂山 331-3 番地ほかに所在する赤舘^{あかさびすなやま}砂山遺跡（新潟市遺跡番号 778）第 5 次調査の発掘調査記録である。赤舘砂山遺跡第 5 次調査は平成 29 年度に実施した。
- 2 調査は商業施設建設に伴い、株式会社原信から新潟市が受託した。調査は新潟市教育委員会（以下、市教委という）が調査主体となり、新潟市文化スポーツ部文化財センター（以下、市文化財センターという）が補助執行した。
- 3 平成 29（2017）年度に発掘調査と整理作業、平成 30（2018）年度に整理作業と報告書刊行を行った。発掘調査と整理作業の体制は第Ⅲ章に記した。
- 4 出土遺物および調査・整理作業に係る記録類は、一括して市文化財センターが保管・管理している。
- 5 本書の編集・執筆は立木宏明・澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター）が行った。遺構図版の作成は澤野・立木が行った。遺物図版の作成は奈良・立木が行い、遺構・遺物写真図版の作成は澤野・奈良が行った。執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ、第Ⅱ章第 1・3 節、第Ⅲ章第 2・3 節、第Ⅴ章第 4 節 A、第Ⅶ章第 3 節を立木、第Ⅱ章第 2 節、第Ⅲ章第 1 節、第Ⅳ章、第Ⅵ章第 1 節、第Ⅶ章第 1 節を澤野、第Ⅴ章第 1～3 節・第 4 節 B、第Ⅶ章第 2 節を奈良が行った。
なお、第Ⅵ章第 2～4 節は株式会社古環境研究所、第Ⅵ章第 5 節は株式会社加速器分析研究所による分析報告を編集して掲載した。
- 6 本書に掲載した写真の撮影者は、写真図版 1 が米軍（国土地理院発行）、写真図版 2・3・8-4・17-2・19-3 が株式会社オリス、それ以外の遺構写真は立木・澤野、遺物写真は株式会社シン技術コンサルである。
- 7 遺物実測図のデジタルトレースおよび DTP ソフトによる各種版下の作成は有限会社不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿した。
- 8 今回の調査成果については、これまで現地説明会資料（平成 29 年 7 月 16 日）や平成 29 年度新潟市遺跡発掘調査速報会〔澤野 2018〕で発表されている。報告書と齟齬のある場合は、本報告書をもって正とする。
- 9 調査から本書の作成に至るまで下記の方々・機関より御指導・御協力を賜った。ここに記して厚く御礼申し上げる。
伊藤秀和・小熊博史・春日真実・亀井 功・桑原正史・小林昌二・土橋由理子・中島栄一
新潟県教育庁文化行政課・（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社原信

（所属・敬称略、五十音順）

凡 例

- 1 本書は本文・引用参考文献一覧・別表と巻末図版（図面図版・写真図版）からなる。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。磁北は真北から西偏約8度である。
- 3 掲載図面のうち、既存の地形図などを使用したものは、原図の作成者・作成年を示した。
- 4 本文中の挿図に用いた地形図、遺構・遺物図の縮尺は各図に示した。
- 5 本文中の注は各節の末尾に記した。引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕中に示し、巻末に一括して掲載した（但し、第VI章は同章の中で一括し、引用・参考文献一覧の末尾に記した）。
- 6 遺構番号は現場で付したものをを用いた。番号は区ごとに分け、遺構の種別ごとに付さず、通し番号とした。遺構種別は、以下の略称を用いて表した。
井戸（SE） 土坑（SK） 性格不明遺構（SX） 溝（SD） 畑（SN） ピット（Pit、P） 掘立柱建物（SB）
- 7 土層の土色および遺物の色調観察は『新版 標準土色帖』（小山・竹原 1967）を用いた。
- 8 遺物の注記の際は遺跡名を「赤館砂山」とし、出土地点や層位を続けて記した。第5次調査出土遺物は遺跡名の前に調査年度（西暦）の後半数字の「17」を付した。
- 9 遺構の記述は、区ごとに、井戸（SE）、土坑（SK）、性格不明遺構（SX）、溝（SD）、畑（SN）、ピット（Pit）、掘立柱建物（SB）の順に記し、同一調査区内の同種遺構については、想定時期の別にかかわらず、概ね番号順に記した。この順番は遺物の記述、別表、図面図版、写真図版に掲載した遺構・遺物の順番と概ね対応する。
- 10 遺物番号は土器・陶磁器はまとめて通し番号とし、石製品・木製品については種別ごとに1から番号を付し、その番号を本文および観察表・図面図版・写真図版に共通して用いた。
- 11 遺構計測表における（ ）付きの値は残存値を意味し、遺物観察表中における（ ）付きの値は、推定値を意味する。
- 12 遺構計測表では、遺構の新旧関係を表現する際に「<」や「>」を用いた。例えば、SK1<SK2となる場合はSK1が古く、SK2が新しいことを示す。
- 13 遺構平面図での切り合い関係のある遺構の上端・下端の表現について、切られている遺構の場合、上端の復元が可能ならば破線、下端は切っている遺構よりも深度が深ければ実線、浅くても復元可能であれば破線で示した。
- 14 土器実測図の断面は、須恵器を黒塗り、それ以外を白抜きとした。土器・石製品・木製品の実測図で使用したスクリーントーンについては、その都度図版中に凡例を示した。
- 15 土器実測図で全周の1/12以下のような遺存率の低いものについては、誤差があるため中軸線の両端に空白を設けた。

目 次

第Ⅰ章 序 章	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	10
第1節 試掘・確認調査	10
第2節 本発掘調査	10
A 調査方法	10
B 調査経過	12
C 調査体制	13
第3節 整理作業	13
A 整理方法	13
B 整理経過	13
C 整理体制	13
第Ⅳ章 遺 跡	14
第1節 概 要	14
第2節 層 序	14
第3節 遺 構	14
A 1区の遺構	15
B 2区の遺構	21
第Ⅴ章 遺 物	22
第1節 概 要	22
第2節 古代の土器	22
A 土器の記述と分類	22
B 出土土器各説	25
第3節 中世以降の陶磁器	29
A 中世の陶器	29
B 近世・近代の陶磁器	30

第4節 石製品・木製品	30
A 石製品	30
B 木製品	31
 第VI章 自然科学分析	 32
第1節 概要	32
第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	33
A はじめに	33
B 試料	33
C 方法	33
D 結果	33
E 考察	34
F まとめ	35
第3節 花粉分析	35
A はじめに	35
B 試料	35
C 方法	35
D 結果	36
E 花粉分析から推定される植生と環境	38
F まとめ	38
第4節 樹種同定	39
A はじめに	39
B 試料と方法	39
C 結果	39
D 所見	40
第5節 放射性炭素年代（AMS測定）	40
A 測定対象試料	40
B 化学処理工程	40
C 測定方法	40
D 算出方法	40
E 測定結果	41
 第VII章 総括	 42
第1節 赤鎔砂山遺跡の遺構について	42
第2節 赤鎔砂山遺跡出土の古代土器について	43
第3節 赤鎔砂山遺跡の様相について	44
 引用・参考文献	 46
別表	50
報告書抄録・奥付	巻末

挿図目次

第 1 図 赤鎔砂山遺跡周辺の地形分類図……………4	第 7 図 赤鎔砂山遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)……………35
第 2 図 赤鎔砂山遺跡周辺の古代遺跡分布図……………6	第 8 図 赤鎔砂山遺跡の花粉ダイアグラム……………37
第 3 図 試掘・確認調査トレンチ位置図、土層柱状図……………11	第 9 図 赤鎔砂山遺跡の花粉・孢子……………38
第 4 図 古代土器分類図……………24	第 10 図 赤鎔砂山遺跡の木材……………39
第 5 図 赤鎔砂山遺跡自然科学分析サンプル採取地点……………32	第 11 図 赤鎔砂山遺跡における暦年較正年代グラフ (参考)……………41
第 6 図 赤鎔砂山遺跡の植物珪酸体分析結果……………34	

表目次

第 1 表 赤鎔砂山遺跡調査履歴……………2	第 6 表 赤鎔砂山遺跡における木材同定結果……………39
第 2 表 赤鎔砂山遺跡周辺の古代遺跡一覧表……………7	第 7 表 赤鎔砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 (δ ¹³ C 補正值)……………41
第 3 表 赤鎔砂山遺跡自然科学分析一覧表……………32	第 8 表 赤鎔砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 (δ ¹³ C 未補正值、暦年較正用 ¹⁴ C年代、較正年代)……………41
第 4 表 赤鎔砂山遺跡の植物珪酸体分析結果……………34	
第 5 表 赤鎔砂山遺跡における花粉分析結果……………37	

別表目次

別表 1 遺構計測表……………50	別表 4 石製品観察表……………54
別表 2 掘立柱建物計測表……………50	別表 5 木製品観察表……………54
別表 3 土器・陶磁器観察表……………51	

図版目次

図版 1 周辺の旧地形図 (1/50,000)	図版 16 1区 基本層序、SE1、Pit47 実測図 (1/40)
図版 2 赤鎔砂山遺跡位置図 (1/25,000)	図版 17 1区 SK4・49・50、SX2、SD37、Pit20・36 実測図 (1/40)
図版 3 赤鎔砂山遺跡周辺の地形分類図と古代の遺跡	図版 18 1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18)、Pit7～9・14・21～26 実測図 (1/40)
図版 4 赤鎔砂山遺跡と周辺の遺跡 (1/10,000)	図版 19 1区 Pit27～29・31～35・38～46・48・51～54 実測図 (1/40)
図版 5 赤鎔砂山遺跡調査区 (1/10,000)	図版 20 1区 SB56 (Pit10・13・19・30) 実測図 (1/40)
図版 6 赤鎔砂山遺跡調査区 (1/5,000)	図版 21 2区 基本層序、SX1、Pit2 実測図 (1/40)
図版 7 赤鎔砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (1) (1/10,000)	図版 22 出土遺物 1 土器・陶磁器 1
図版 8 赤鎔砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (2) (1/5,000)	図版 23 出土遺物 2 土器・陶磁器 2
図版 9 赤鎔砂山遺跡調査区とグリッド設定図 (3) (1/2,500)	図版 24 出土遺物 3 土器・陶磁器 3
図版 10 遺構全体図 (1/400)	図版 25 出土遺物 4 土器・陶磁器 4
図版 11 遺構全体図 (1/250)	図版 26 出土遺物 5 土器・陶磁器 5
図版 12 遺構平面部分図 1 (1/80)	図版 27 出土遺物 6 石製品 1
図版 13 遺構平面部分図 2 (1/80)	図版 28 出土遺物 7 石製品 2・木製品
図版 14 遺構平面部分図 3 (1/80)	
図版 15 遺構平面部分図 4 (1/80)、小グリッド別包含層出土土器重量分布図 (1/400)	

写真図版目次

写真図版 1	赤縮砂山遺跡周辺空中写真	1 区 SD37 完掘状況 (南東から)
写真図版 2	赤縮砂山遺跡遠景 (東から)	1 区 SB56 完掘状況 (北東から)
	1・2 区 空中写真 1 (北東から)	写真図版 9
写真図版 3	1・2 区 空中写真 2 (北西から)	1 区 Pit10 (SB56) 完掘状況 (北西から)
	1・2 区 空中写真 3 (南から)	1 区 Pit13 (SB56) 土層断面 (南東から)
写真図版 4	1 区 調査前現況 (西から)	1 区 Pit13 (SB56) 完掘状況 (南東から)
	1 区 調査前現況 (東から)	1 区 Pit19 (SB56) 土層断面 (北西から)
	1 区 基本層序 A (東から)	1 区 Pit19 (SB56) 完掘状況 (北西から)
	1 区 基本層序 B (南から)	1 区 Pit30 (SB56) 完掘状況 (南東から)
	1 区 基本層序 C (南から)	1 区 Pit7 土層断面 (北西から)
	1 区 基本層序 D (南から)	1 区 Pit7 完掘状況 (北西から)
	1 区 基本層序 E (南から)	写真図版 10
	1 区 基本層序 F (南から)	1 区 Pit8 土層断面 (北東から)
写真図版 5	1 区 基本層序 G (南から)	1 区 Pit8 完掘状況 (北東から)
	1 区 基本層序 H (南から)	1 区 Pit9 土層断面 (北から)
	1 区 SE1 土層断面 (西から)	1 区 Pit9 完掘状況 (北から)
	1 区 SE1 完掘状況 (西から)	1 区 Pit14 土層断面 (西から)
	1 区 SK4 土層断面 (南東から)	1 区 Pit31 土層断面 (西から)
	1 区 SK4・Pit30 完掘状況 (南東から)	1 区 Pit32 土層断面 (西から)
	1 区 SK49 土層断面 (東から)	1 区 Pit14・31・32 完掘状況 (西から)
	1 区 SK49 完掘状況 (東から)	写真図版 11
写真図版 6	1 区 SK50 土層断面 (南から)	1 区 Pit21 土層断面 (北東から)
	1 区 SK50 完掘状況 (南から)	1 区 Pit21 完掘状況 (北東から)
	1 区 SX2・Pit20 土層断面 (東から)	1 区 Pit22 土層断面 (南東から)
	1 区 SX2・Pit36 土層断面・完掘状況 (南から)	1 区 Pit23 土層断面 (南東から)
	1 区 SX2・Pit20 完掘状況 (東から)	1 区 Pit22・23 完掘状況 (南から)
	1 区 SD3 土層断面 (北西から)	1 区 Pit24 土層断面 (北東から)
	1 区 SD16 土層断面 (北西から)	1 区 Pit24 完掘状況 (北東から)
	1 区 SD5・6 土層断面 (北西から)	1 区 Pit25・26 土層断面 (南東から)
写真図版 7	1 区 SD5・16 土層断面 (南から)	写真図版 12
	1 区 SD11 土層断面 (北西から)	1 区 Pit25・26 完掘状況 (南東から)
	1 区 SD6・11 土層断面 (南から)	1 区 Pit27・28 土層断面 (南東から)
	1 区 SD12 土層断面 (北西から)	1 区 Pit29 土層断面 (南東から)
	1 区 SD15 土層断面 (北西から)	1 区 Pit27～29 完掘状況 (南東から)
	1 区 SD12・15 土層断面 (南から)	1 区 Pit33 土層断面 (西から)
	1 区 SD17 土層断面 (北西から)	1 区 Pit33 完掘状況 (西から)
	1 区 SD18 土層断面 (北西から)	1 区 Pit34 土層断面 (東から)
写真図版 8	1 区 SD17・18 土層断面 (南から)	1 区 Pit34 完掘状況 (東から)
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況 (南西から)	写真図版 13
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況 (北西から)	1 区 Pit35 土層断面 (東から)
	1 区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況 (南から)	1 区 Pit35 完掘状況 (東から)
	1 区 SD37 土層断面 A (南から)	1 区 Pit38 土層断面 (東から)
	1 区 SD37 土層断面 B (南東から)	1 区 Pit38 完掘状況 (東から)
		1 区 Pit39 土層断面 (北から)
		1 区 Pit39 完掘状況 (北から)
		1 区 Pit40 土層断面 (東から)
		1 区 Pit40 完掘状況 (東から)
		写真図版 14
		1 区 Pit41 土層断面 (東から)
		1 区 Pit41 完掘状況 (東から)
		1 区 Pit42 土層断面 (東から)
		1 区 Pit42 完掘状況 (東から)
		1 区 Pit43 土層断面 (東から)

	1区 Pit43 完掘状況（東から）	2区 調査前現況（西から）
	1区 Pit44・45 土層断面（南東から）	2区 基本層序 A（南から）
	1区 Pit44・45 完掘状況（南東から）	2区 基本層序 B（東から）
写真図版 15	1区 Pit46 土層断面（東から）	2区 基本層序 C（西から）
	1区 Pit46 完掘状況（東から）	2区 SX1 土層断面（西から）
	1区 Pit47 土層断面・完掘状況（南から）	2区 SX1 土層断面（南から）
	1区 Pit48 土層断面（南から）	2区 SX1 完掘状況（南から）
	1区 Pit48 完掘状況（南から）	写真図版 19 2区 Pit2 土層断面（南から）
	1区 Pit51 土層断面（南から）	2区 Pit2 完掘状況（南から）
	1区 Pit51 完掘状況（南から）	2区 完掘状況（北から）
	1区 Pit52 柱根検出状況（北から）	2区 完掘状況（南西から）
写真図版 16	1区 Pit52 土層断面（北から）	2区 完掘状況（西から）
	1区 Pit52 完掘状況 1（北から）	写真図版 20 出土遺物 1 土器・陶磁器 1
	1区 Pit52 完掘状況 2（北から）	写真図版 21 出土遺物 2 土器・陶磁器 2
	1区 Pit53 土層断面（北から）	写真図版 22 出土遺物 3 土器・陶磁器 3
	1区 Pit53 完掘状況（北から）	写真図版 23 出土遺物 4 土器・陶磁器 4
	1区 Pit54 土層断面（南から）	写真図版 24 出土遺物 5 土器・陶磁器 5
	1区 Pit54 完掘状況（南から）	写真図版 25 出土遺物 6 土器・陶磁器 6
	1区 木製品出土状況（北から）	写真図版 26 出土遺物 7 土器・陶磁器 7
写真図版 17	1区 完掘状況（東から）	写真図版 27 出土遺物 8 土器・陶磁器 8、石製品 1
	1区 完掘状況（北が上）	写真図版 28 出土遺物 9 石製品 2
写真図版 18	2区 調査前現況（東から）	写真図版 29 出土遺物 10 木製品

第 I 章 序 章

第 1 節 遺 跡 概 観

赤縮砂山遺跡は、新潟市西蒲区（旧巻町）赤縮字砂山 331-3 番地ほかに所在する。平成 28 年度に新潟市教育委員会（新潟市歴史文化課（以下、市歴史文化課）が補助執行）が行った試掘調査により、古代の遺構・遺物が検出され遺跡として周知化された。

当該地は越後平野の西にあたり、西を西川、東側を旧鎧潟に流入する飛落川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に所在する。西にそびえる角田山東麓からは約 4km の距離にあり、遺跡範囲はおおよそ南北 100m、東西 250m に広がる。現地の標高は 4～5m で、現況は水田及び農道である。調査地の北東約 2km には、昭和 40 年代初頭まで鎧潟が広がっていた。鎧潟は、昭和 30 年に農林省金沢農地事務局干拓事業所が旧巻町に設置されて干拓事業に着手し、同 41 年に潟面干拓を終了して姿を消している。

周辺では近年、複数の発掘調査が行われており、8 世紀前半の新道遺跡（相田 2015）、9 世紀代の峰岡城山遺跡〔立木・伊比ほか 2013〕、8 世紀後半から 9 世紀前半の集落遺跡である峰岡上町遺跡〔前山ほか 2015〕、7 世紀後半から 8 世紀の島灘瀨遺跡〔遠藤・脇本ほか 2016〕、8 世紀前半と 9 世紀後半を主体とする集落跡とされる下新田遺跡〔龍田ほか 2015〕、平安時代の荘園関連と考えられる林付遺跡〔相田ほか 2012〕などの調査成果がある。また、旧鎧潟西岸に位置する大島橋遺跡〔山口・前山 1984〕では 7 世紀代の遺物が出土しており、飛鳥時代から平安時代にかけての遺跡が自然堤防上に点々と分布している。

第 2 節 発掘調査に至る経緯（第 1 表）

平成 27 年度に、新潟市西蒲区赤縮地内における商業施設建設（仮称 巻ショッピングセンター）の計画が株式会社原信より市歴史文化課に知らされた。市歴史文化課は株式会社原信と協議を重ね、現況が水田のため、平成 28 年度の水田稲刈後に約 2.6ha を対象とした試掘調査を行うことで合意した。試掘調査の依頼（平成 28 年 5 月 12 日付 新潟市収受平成 28 年 5 月 12 日付新歴 B 第 41 号）があり、それを受けて平成 28 年 9 月 26 日から 10 月 7 日まで試掘調査（着手届 平成 28 年 9 月 23 日付新歴 B 第 41 号の 2）を実施した（第 1 次調査）。調査の結果（終了報告 平成 28 年 11 月 2 日付新歴 B 第 41 号の 3）、36 か所のトレンチのうち 18 か所で土師器・須恵器・珠洲焼・石製品・骨片などの遺物が出土し、溝・井戸・ピット・性格不明遺構が検出された。この結果から、「赤縮砂山遺跡」として新遺跡の発見届を提出した（平成 28 年 11 月 2 日付新歴 B 第 41 号の 7）。

その後、今回の商業施設計画の隣地で開発計画があり、試掘・確認調査を実施した（第 2・3 次調査）。その結果、第 1 次調査区の西側に遺跡範囲が広がり、南北 100m、東西 250m にわたる遺跡範囲が現時点で確定した（遺跡範囲の変更 平成 28 年 12 月 28 日付新歴 B 第 225 号の 5）。

平成 29 年 2 月には商業施設建設に伴う工事のうち、集水柵を 2 か所に設置する工事内容が明らかになり、追加の確認調査（着手届 平成 29 年 2 月 27 日付新歴 B 第 41 号の 18）を行った（第 4 次調査）。その結果（終了報告 平成 29 年 3 月 21 日付新歴 B 第 41 号の 20）、2 か所のトレンチのうち 1 か所で古代の土師器が 1 点出土した。

本発掘調査は、第 1 次調査の結果を受け、平成 28 年 10 月～12 月に断続的に市歴史文化課と株式会社原信が協議を行い、平成 29 年度に調査を行うことが決定した。協議結果を基に株式会社原信より新潟市教育委員会教育長あてに、文化財保護法 93 条の届出（平成 28 年 12 月 16 日付）が提出された。これを受けて、新潟市教育

第2節 発掘調査に至る経緯

委員会教育長から株式会社原信あてに、①市道巻 1-307 号線拡幅部（含 用水路）②貯水槽設置部を「事前に記録保存のため本発掘調査を実施する」旨の文化財保護法 93 条の通知文（平成 29 年 1 月 4 日付新歴 B41 号の 12）が通知された。その他の工事部分については工事立会・慎重工事で対応するとした。平成 29 年 1 月 12 日付で株式会社原信より本発掘調査依頼が提出された。この段階で工事箇所・工程等の具体化が未定のため、本発掘調査面積は未定とした。平成 29 年度に入り工事計画の具体化に伴い、本発掘調査面積は、市道巻 1-307 号線拡幅部分と貯水槽設置部分の約 320m² と決定した。合意内容は「新潟市西蒲区赤鎗字砂山 331-3 ほか地内の店舗建設事業に伴う埋蔵文化財包蔵地（赤鎗砂山遺跡）の取扱いに関する協定書」として双方で締結（平成 29 年 5 月 8 日付）した。これらを受け、平成 29 年 6 月 1 日付新歴 F 第 10 号の 4 で新潟県教育委員会教育長あてに文化財保護法第 99 条の規定による埋蔵文化財の発掘通知を提出して本発掘調査を実施した（第 5 次調査）。

第 1 表 赤鎗砂山遺跡調査履歴

通算調査回数	商業施設建設に伴う発掘調査回数	調査年次	調査種別	調査原因	調査主体	担当	調査面積 () は対象面積	トレンチ No.	文献	新潟市 調査番号	備考
1	1	H28(2016)年 9.26～10.7	試掘調査	商業施設建設	新潟市	新潟市歴史文化課 諫山えりか	324m ² (26,336.28m ²)	1～36T		2016186	古代の遺跡である新道遺跡（新潟市遺跡番号756）の南側約800mにある。試掘調査の結果、古代・中世の遺構・遺物が検出され、新遺跡として登録された。
2		H28(2016)年 12.19～ 12.21	試掘調査	店舗建設	新潟市	新潟市歴史文化課 諫山えりか	49m ² (3,714m ²)	1～8T		2016216	第1次調査地に隣接する別店舗建設に伴い、旧国道116号線の西側で試掘調査を行った。その結果、調査区東側の4Tより性格不明遺構が確認された。これにより遺跡範囲が西側に拡大した。
3		H29(2017)年 1.25	確認調査	店舗建設	新潟市	新潟市歴史文化課 諫山えりか	4m ² (3,714m ²)	9T		2016240	第2次調査地4T西側に再確認のため9Tを設け、掘削した。その結果、遺構・遺物は検出されず、遺跡の範囲は拡大しないことが確認された。
4	2	H29(2017)年 2.28	確認調査	商業施設建設	新潟市	新潟市歴史文化課 諫山えりか	8m ² (26,336.28m ²)	追加 1・2T		2016254	第1次調査地の追加確認調査である。調査地の中心部に2か所のトレンチを設けた。結果、追加2Tから古代の土師器が出土した。
5	3	H29(2017)年 6.1～7.31	本発掘調査	商業施設建設	新潟市	新潟市文化財センター 立木宏明・遠藤恭雄	240.64m ² (26,336.28m ²)		[澤野2018] [本書]	2017001	



調査風景



現地説明会

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

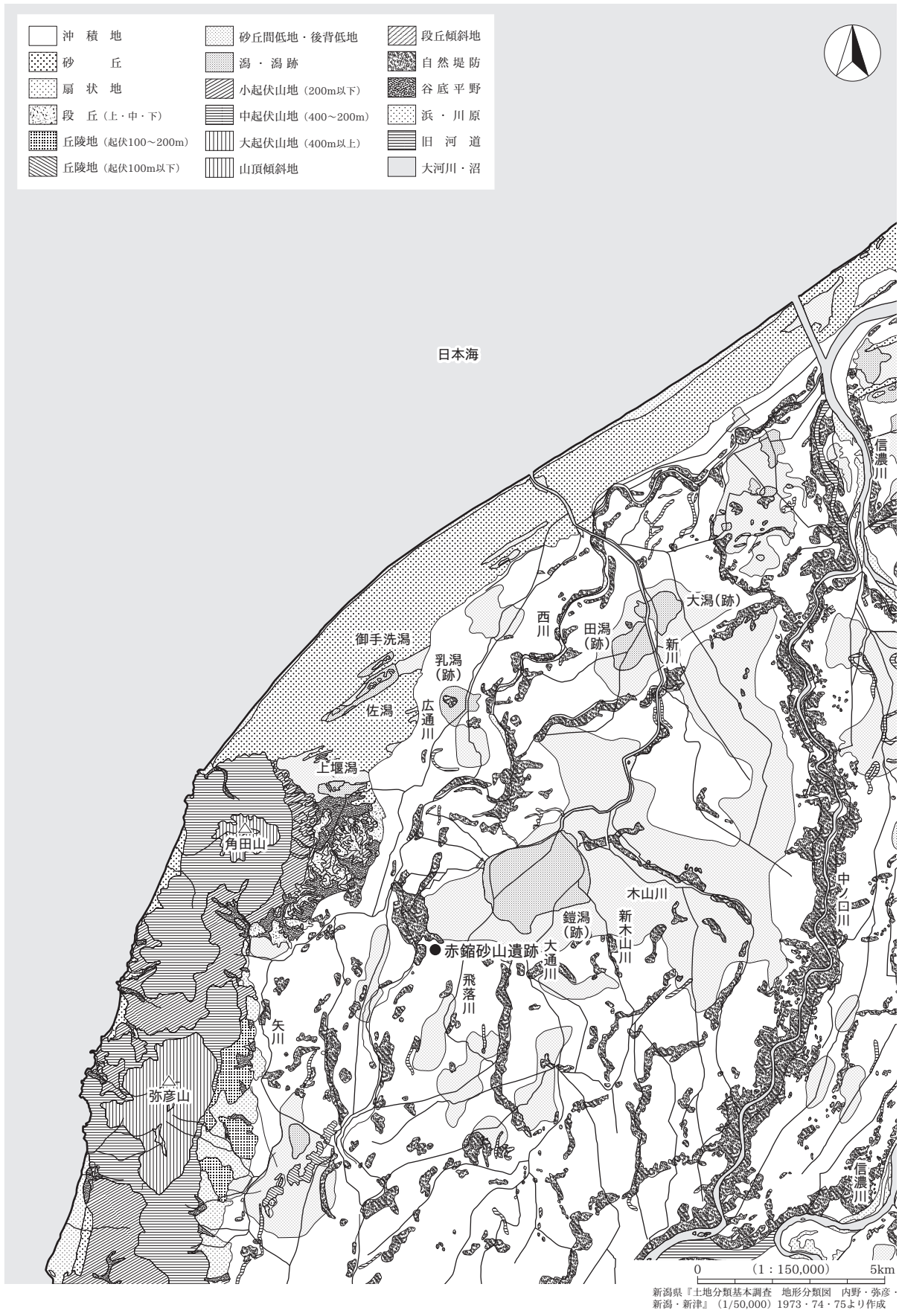
第1節 遺跡の位置と地理的環境（第1図、図版3）

新潟市は越後平野のほぼ中央に位置している。越後平野は海岸部の砂丘地帯、南西側の角田・弥彦山塊、南東側の新津丘陵に囲まれており、阿賀野川・信濃川などの大小の河川によって形成された沖積平野である。越後平野東側にある信濃川・阿賀野川の蛇行帯や、中央部にある信濃川支流の中之口川の蛇行帯には、自然堤防が発達しており、自然堤防に囲まれた後背湿地が広く分布する。これらの後背湿地には低い部分に湛水して大潟・田潟・鎧潟・田ノ潟・乳ノ潟・六字潟・佐潟・御手洗潟などの潟湖を形成した。内陸には日本海の砂丘列が沖積世以降に形成されており、内陸より新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに大別され、さらにそれぞれ4列・4列・2列に細分されている〔新潟古砂丘グループ1974〕。

今回調査した赤縮砂山遺跡は、越後平野中央部にある旧鎧潟の南西に広がる西川と飛落川の間形成された微高地に、島状に広がる自然堤防上に位置している。鎧潟は、干拓前の1960年代はおよそ南北2.4km、東西3km、面積は約270haであったが、流入する河川が飛落川・新木山川・大通川の三川で、流出する河川が新川のみであったため、大雨の度に湛水して周囲に水害をもたらしたといわれている。その起源としては、平安時代中期の康平三（1060）年に作られたといわれている『康平絵図』にすでに「寄み潟」として記されており、この名称が鎧潟の古名である可能性が指摘されている〔古俣1989〕。また、鎧潟という名称は、寛延三（1750）年の『鎧八幡宮御由緒調査書』によれば、平安時代中頃の康平五（1062）年に源義家が鎧を遺跡から約4km北東に所在する鎧八幡宮に奉納した、という伝説に由来するものである。旧西川町の大島橋遺跡〔山口・前山1984〕の土器が潟湖内より出土していることから、7世紀後半には潟が十分に成立していない可能性がある。また、文化十二（1815）年に阿賀野市水原町の小田島允武によって著わされた『越後野志』によれば、「巻ノ東ニ在、古ヘ萱野ナリシガ、文禄以前洪水ノ時、三方ヨリ河水流入テ潟トナル」とあり、文禄年間（1593～1596年）以前の洪水の際に三方から水が押し寄せて、一夜にして成立したという説が紹介されているが、詳細は不明である。このように、度々水害をもたらした鎧潟であったが、江戸時代後期の文政三（1820）年に、「三潟悪水抜き」といわれる大潟・田潟・鎧潟をつなぐ新川を開削して日本海に流す事業が行われ、これ以降水害は激減し周囲の新田開発が進んだといわれている〔斎藤1967・1968〕。また、鎧潟は昭和30年代から10年の歳月をかけて国営事業として干拓工事が行われ、現在は水田となっている。遺跡周辺の景観は、昭和20～30年代に行われた耕地整理事業によって形成されたものである。現在は一面の田として利用されているが、1948年の米軍の写真などから微高地上に点々と畑が確認できる。また、今回の調査区と東西に並行する市道巻1-307号線の旧道沿いには、デワノトネリコ等を樹種に用いた、秋に稲わらの乾燥を行う「はさ木並木」が確認できる。

第2節 周辺の遺跡（第2図、第2表、図版3・4）

新潟市で周知化されている遺跡の数は743か所である（平成29年3月31日現在）。時代別の遺跡の分布は、旧石器時代では丘陵部、縄文時代には丘陵と縁辺の段丘を中心に分布し、砂丘上・沖積地にも散見される。弥生時代の遺跡分布も縄文時代のあり方と類似し、丘陵部と砂丘部に集中する。古墳時代になると沖積地に遺跡が進出し始め、奈良・平安時代には沖積地の遺跡が激増する。これは、水田を初めとした開発が広く沖積地に及んだことの表れである。第2図には赤縮砂山遺跡周辺の古代遺跡の分布を示した。ここでは第2図の範囲を中心に、



第1図 赤縮砂山遺跡周辺の地形分類図

縄文時代からの遺跡分布状況などについて概観する。

旧石器・縄文時代は前述のように、角田・弥彦山麓を中心に砂丘列に沿って分布する。旧石器時代の遺跡としては角田山南麓に位置するケカチ堂遺跡（54）で尖頭器・石刃などが採集されている。縄文時代の遺跡の分布は弥彦・角田山麓に集中しており、縄文時代において活動領域の中心地であったことがうかがえる。丘陵上では草創期・早期から遺跡が確認されるが、前期には定住集落が成立し、南赤坂遺跡（47）・豊原遺跡（60）といった長期継続型集落が営まれるようになる。遺跡数は中期がピークで、以降減少傾向となる。砂丘地では前期の段階で角田山北東麓側の砂丘列上に布目遺跡等が点在し、中期には定口遺跡（25）・イタチパラ遺跡（27）などの小規模な遺跡が分布する。沖積地での遺跡の確認例はわずかではあるが、中ノ口川左岸沿いの味方排水機場遺跡では、排水機場建設工事の際に縄文時代後期の土器が地下約19m地点から出土しており、越後平野の地盤沈降を示す事例として注目されている〔寺崎・高濱ほか2000〕。

弥生時代の遺跡は少なく、縄文時代と同様に丘陵部と砂丘を中心に分布する。丘陵上では角田山東南麓の御井戸A・御井戸B遺跡（90・91）、北東麓の台地上に立地する大沢遺跡が確認され、砂丘上では四十石遺跡（2）・さかしの遺跡（38）などが分布する。このほか、第2図範囲外ではあるが、四十石遺跡の北東側に広がる内陸砂丘に立地する六地山遺跡、緒立遺跡なども主要な遺跡として挙げられる。

古墳時代には遺跡数はやや増加する。分布の中心は角田山麓丘陵地帯にあり、南麓の矢川流域に山谷古墳、東麓に菖蒲塚古墳が造営され、越後平野周辺における前期古墳の中核的な地域をなしている。集落遺跡としては丘陵部の御井戸A・御井戸B遺跡（90・91）・南赤坂遺跡（47）、砂丘地の四十石遺跡（2）・緒立遺跡が主要な遺跡である。沖積地では浦田遺跡（36）が確認できる。ただ、これらの遺跡はいずれも古墳時代前期が主体で、中期以降の古墳・群集墳は確認されていない。また、集落の動向も不明確な状況である。角田山麓に位置する御井戸B遺跡（91）でも古墳時代後期で集落が途絶える状況が推測されている〔前山・相田2004〕。

古代に入ると、遺跡の立地は丘陵部に須恵器窯跡や製鉄遺跡などの生産遺跡が集中し、砂丘上や沖積地に集落遺跡が広く分布するようになる。丘陵上の生産遺跡としては、須恵器窯跡の前平野須恵器窯跡（44）・重稲場窯跡（51）、製鉄遺跡の伏部道下遺跡（46）が確認されている。丘陵部には集落遺跡も分布しており、炉を持たない小規模な竪穴住居とともに煮炊具主体の土器群が出土した南赤坂遺跡（47）〔前山・相田2002〕や、3棟の掘立柱建物と複数の焼土遺構が確認された峰岡上町遺跡（58）〔前山ほか2015〕などがある。

砂丘地の遺跡としては四十石遺跡（2）が挙げられる。総柱建物を含む居住施設とともに帯留金具や「津」と記された墨書土器が出土し、内水面交通の要所として機能した拠点的な集落跡と考えられている〔渡邊・奈良ほか2012〕。また、四十石遺跡から北東約8kmにある的場遺跡・緒立C遺跡は官衙関連遺跡と位置付けられており、漁撈・水産加工基地とその管理・運営の場所と指摘されている〔坂井1996・2008ほか〕。

一方、赤縮砂山遺跡周辺の沖積地では、大島橋遺跡（79）や燕市大橋遺跡（122）などの遺跡で飛鳥時代の遺物が確認されており、早い段階からの低地利用が窺える。大島橋遺跡（79）は昭和35年の鰐淵干拓に伴う飛落川の付け替え工事の際に発見された遺跡で、地表面下約0.6mで須恵器・土師器、その下約1.3mで土師器のみが出土したと報告されており〔山口・前山1984〕、7世紀の飛鳥時代の集落と考えられる。奈良時代になると遺跡数は増加し、島灘瀬遺跡（82）や茶院A遺跡（86）・新道遺跡（94）などが出現する。島灘瀬遺跡は比較的安定した自然堤防上の沖積微高地に所在し、明確な住居跡等は検出されなかったが、8世紀の須恵器・土師器が出土した。確認面が0.2～0.3mと比較的浅く、遺跡形成時からの地形変化が少なかったことが窺える遺跡である〔遠藤・脇本ほか2016〕。新道遺跡は平成25年度の試掘調査で発見された遺跡で、地表下約2mで8世紀前半の土師器が一定量出土している〔相田2015〕。このほかの奈良時代の遺跡としては、第2図範囲外ではあるが、島灘瀬遺跡から南東約3kmの地点に下新田遺跡・仲歩切遺跡が分布している。下新田遺跡では奈良時代を主体とした土器のほか、円筒型土製品や『和名類聚抄』に記載された郷名と一致する「日置」と記された墨書土器が出土している〔龍田ほか2015〕。また、仲歩切遺跡は平成26年度に実施した確認調査で8世紀を主体とする土器のほか、



第2図 赤鎔砂山遺跡周辺の古代遺跡分布図

焼骨埋納土坑や柱根の残る柱穴が検出されている〔龍田 2016〕。平安時代には遺跡はさらに増加する。下新田遺跡のように奈良時代から継続する遺跡のほか、林付遺跡 (83)・高畑遺跡 (77)・長所天神遺跡 (98) や、燕市中組遺跡 (109)・江添 C 遺跡 (133) など、新たに成立する遺跡も多い。林付遺跡 (83) では、9 世紀を主体とする土器群に、石帯や権状錘、「川合 (川井)」・「館」などの墨書土器、2 間×6 間で 2 面廂を持つ大規模な掘立柱建物跡などが見つかっており、中核遺跡の一つであることが判明している〔相田ほか 2012〕。また、燕市に位置する中組遺跡 (109) では緑釉陶器や「池津」と記された墨書土器が出土しており、拠点的な集落であった可能性が高い〔春日 2000〕。平安時代の沖積地ではこのような中核遺跡の周辺に小規模な遺跡が点在している様相が想定される。

第2表 赤館砂山遺跡周辺の古代遺跡一覧表

No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	茨苜根	平～室	45	峰岡城山	縄・平・中世	89	下田東	縄・平	131	江添D	平～中世・近世
2	四十四	縄・弥・古墳・奈・平	46	伏部道下	平	90	御井戸A	縄・弥・古墳・古代・中世・近世	132	十二田	平・中世
3	木山	平・鎌	47	南赤坂	縄・古墳・奈・平				133	江添C	平～中世・近世
4	ツル子C	縄・平	48	越王	古墳・平	91	御井戸B	縄・弥・古墳・古代・中世・近世	134	小川	平
5	茶畑	縄・弥・平	49	昌浦塚古墳群跡	平	92	新谷	縄・弥・古墳・平	135	五人割	平～中世・近世
6	屋敷添	弥・平	50	天神C	平	93	赤館砂山	奈・平・中世・近世	136	七嶋	平
7	前田	縄・古墳・奈～室・江	51	重稲場窯跡	奈・平	94	新道	奈	137	堅割	平
8	屋敷浦	弥・古代	52	ヤチ	飛・奈・鎌	95	湯前	奈・平	138	本町カシ田	平
9	ツル子A	平	53	大間潟	古代	96	漆山上田	奈・平	139	池田	平
10	ツル子B	平	54	ケカチ堂	旧石器・平	97	家掛	奈・平・中世	140	弥五郎屋敷A	平・室
11	吹荒地	平	55	板本	縄・古墳・平	98	長所天神	平・鎌	141	熊ノ田	平
12	荒所B	平	56	舟山神社B	平	99	浦田乙	平・鎌	142	西ノ神	平
13	赤塚神明社	平	57	香場西	平	100	居畑	平	143	鴻野渠大坪	平・中世
14	病院脇	平	58	峰岡上町	縄・古代	101	浦田川東	平・鎌	144	三方口	平
15	上谷内B	平	59	七十刈	縄・平	102	西橋	奈・平・中世	145	江添F	平～中世・近世
16	上谷内A	平	60	豊原	縄・平	103	助次郎	奈・平・中世	146	新保A	平
17	沼	平	61	板田	平	104	古辻	奈・平	147	大保	平
18	大藪	縄・古墳・古代・中世	62	猿田今山宮	平	105	横地	平	148	新保境	平・中世
19	北浦原B	平・中世	63	本村	平	106	川下B	平	149	松田	平
20	北浦原A	縄・平	64	高屋	縄・平	107	川下A	平	150	仲沖	平
21	南浦原	縄・平～江	65	番羽入	古代	108	野神屋敷	平・室・江	151	野沖	平・中世
22	原付	平	66	寛越	平	109	中組	平	152	花見	平
23	清水上	平	67	郷屋	平	110	川上	平	153	金蔵屋敷	古代・近世
24	銭原	奈・平・室	68	大縄	平	111	香譜田	平	154	中沢屋敷	平～室
25	定口	縄・平	69	狐塚	平	112	上徳	平・鎌	155	前畑	平～室
26	長道	平	70	長島天神	平	113	桑橋	平・鎌	156	野沖田	平
27	イタチバラ	縄・平	71	岩室首根	平	114	諏訪ノ木	平・鎌・南・室	157	谷内A	古代
28	権作	縄・平	72	ハガヤバ	平	115	ヤケ屋敷	平・鎌・南・室	158	下町	平
29	代官屋敷	平	73	おおやさま屋敷	平	116	万福寺	平・鎌・南・室	159	中築地	平・中世
30	下稲場	平	74	住吉神社脇	平	117	松橋	平	160	平野	平
31	山田屋敷	平・鎌	75	馬堀荒田	平	118	斉藤屋敷	平・鎌	161	田中新田	平
32	大原	平	76	地蔵腰	平	119	長渡	平	162	夷塚B	平
33	坂田	平・中世	77	高畑	平	120	三角田	奈・平	163	柿の浦	平
34	三町歩	平	78	なえびき橋	平	121	稲葉	平	164	矢作	平
35	中才	平	79	大島橋	飛・奈	122	大橋	古墳・飛～平・中世	165	中築地	平
36	浦田	古墳・平	80	四ッ割	平	123	庚塚E	古代	166	清石工門新田	古代
37	漕上り	平	81	沼下	平	124	銭淵	古墳・奈・平	167	中人溝	平・中世
38	さかしの	弥・平	82	島灘瀬	古墳・奈・平	125	庚塚A	平	168	上段	平・中世
39	タテ	縄・平	83	林付	平・中世・近世	126	小諏訪前B	平～中世・近世	169	登生寺	古代
40	上塚湯B	縄・平	84	堤	平	127	小諏訪前	奈・平	170	御天山	古代
41	上塚湯A	平	85	高六	平・鎌	128	花立	平	171	桜井神社	縄・古代・中世・近世
42	赤坂	平	86	茶院A	奈～江	129	北小脇	平～中世・近世			
43	五ヶ浜	平	87	羽黒西	平	130	江添E	平～中世・近世			
44	前平野須恵器窯跡	平	88	姥島	平・江						

赤館砂山遺跡周辺の沖積地では、近年、調査例が増加し、越後平野において確認例が乏しい飛鳥時代から奈良時代の遺跡が比較的多く分布することがわかってきた。遺跡の多くは埋没した自然堤防上に立地しており、未発見の遺跡が地中深くに存在する可能性は高く、今後、新たな遺跡の発見が期待される。

中世の遺跡は山麓の台地、砂丘上、沖積平野の微高地に分布しており、集落跡や城館跡、塚や墳墓跡などが確認されている。砂丘上の遺跡としては前田遺跡(7)・大藪遺跡(18)がある。大藪遺跡(18)では12世紀末から16世紀末までの遺物が出土しているほか、墓域が確認されている。丘陵上には山城が主に分布しており、角田山東麓支丘陵端部に上城跡と下城跡がある。また、峰岡城山遺跡(45)が下城跡と同一丘陵にあり、中世の遺物が微量であるが出土している〔立木・伊比ほか2013〕。一方、沖積地の自然堤防上には集落跡や城館跡が分布している。赤館砂山遺跡周辺では館ノ腰遺跡や和納館跡等がみられる。また、燕市(旧吉田町)の米納津地区周辺では天神堂城跡や小諏訪前B遺跡(126)など、多くの遺跡が分布している。沖積地に立地する城館跡は前述の山城と連携していたものと思われる。

第3節 歴史的環境

律令以前、日本海側の地域は広く越国と称されていた。大化三(647)年に淳足柵、翌年に磐舟柵が相次いで設置され、漸次北方の整備が図られていたと考えられる。越後国は、当初これら二柵の位置する阿賀野川以北の沼垂郡・岩船郡より北を指していたようである。越後国の領域の確定は、大宝二(702)年に越中国4郡(頸城・古志・魚沼・蒲原)を割いて越後国に編入〔『続日本紀』〕し、和銅五(712)年にそれまで越後国に属していた出羽郡を分割して出羽国を建国したことによる。その後、天平十五(743)年に佐渡国を越後国に合併し、ほぼ現在の新潟県と同一の領域となった。しかし、天平勝宝四(752)年には、渤海朝貢使節の来島により、朝廷による直接把握を目的として佐渡国は復置されている。天平宝字五(761)年に造営が始まった佐渡国分寺には、小泊

窯で製作された瓦が大量に運ばれており、古代越後国に膨大な須恵器の供給をもたらす小泊窯操業の契機としてとらえられよう。

角田山麓を含む地域は、古代の蒲原郡に属していた。現在の北蒲原郡を除いた三条市から阿賀野川までの範囲に比定される古代の蒲原郡には、承平年間（931～938）に撰進された『和名類聚抄』に桜井・勇礼・青海・小伏・日置の5郷が見られる。角田山麓は日置郷と推定されている説がある〔桑原1994〕。本遺跡から南東に6.5kmに所在する下新田遺跡〔龍田ほか2015〕から「日置」と書かれた墨書土器が出土しており、日置郷がこの周辺にあった可能性がある。

古代の蒲原郡には、宝亀十一（780）年の『西大寺資財流記帳』によって、鶉橋荘・槐田荘という荘園が施入されていた事が知られている。これらの西大寺領荘園は、神護景雲三（769）年の『越後国水田并墾田地帳』などから、8世紀中葉以降には確実に成立していたと考えられる。西大寺領荘園は早くに衰退したと推定されている。その理由として、東大寺領荘園に比べ野地の確保が遅れたために、開発や経営が困難な地域に占地せざるをえず、さらには支援者であった道鏡が失脚したためとの指摘がある〔桑原前掲〕。

角田山東麓の低台地上では須恵器生産が行われていた。重稲場窯跡と前平野窯跡があり、両窯跡とも鍍漚干拓に伴う採土工事により壊滅している。採集された遺物から操業期間は8世紀後半から9世紀前半であり、窯の規模も小規模であったと考えられている〔春日2000〕。そのため生産量が少なく西蒲原全域に多くは供給されず、代わりに同じ蒲原郡に属する新津丘陵窯跡群と古志郡に属する西古志窯跡群からの流通が凌駕していたようである。しかしながらこれらの窯は佐渡小泊窯跡群からの供給量の激増により生産が衰退して行く。

前述の初期荘園は10世紀中頃には衰退し、中世においては、角田山麓一帯は寄進地系荘園である弥彦荘に含まれていたようである。弥彦荘の成立時期は明確ではないが、11世紀後半～12世紀後半に至る院政期であり、その期間内において初見資料の『大方広仏華嚴經』の奥書巻16と巻19に「大治四年」・「弥彦御部下条」と記されており、弥彦荘が1129年（大治四年）以前に成立していた可能性が指摘されている。さらに「下条」が旧巻町付近との考察がなされている〔桑原前掲〕。

南北朝時代では、刈羽郡小国保から天神山城（旧岩室村）に本拠を移していた、南朝方の小国政光の支配下にあった。東麓の支丘陵先端部に位置する下城（竹野町）は、出土遺物から、隣接する上城とともに南北朝期の戦の砦であった可能性が高く、小国氏との関連性も示唆されているが〔桑原前掲〕、詳細は不明である。

14世紀前半の南北朝の動乱に際しては、弥彦荘付近での動向は不明であるが、蒲原津を軍事的に占拠し中・下越地方を制圧しようとした南朝軍と、阿賀野川を挟んで対峙した北朝軍との、蒲原津から新津丘陵周辺での攻防が『羽黒義成軍忠状写』に記されており、小国氏の活躍もみられる。この動乱を経て、越後国は守護上杉氏・守護代長尾氏により、室町幕府の統治下によって領国支配が推進されることとなる。

15世紀の弥彦荘についてはいくつかの史料が残る。『毛利安田氏文書』では、応永三三（1426）年守護上杉房朝より長尾性景（邦景）に対し、弥彦荘の下条（旧巻町）と船越条（旧岩室村）を栗田の替地として、刈羽郡安田（柏崎市）を本拠とする毛利道元に打渡すことが命じられている。また、『蜷川家古文書』の長禄三（1459）年12月の「高師長本領注文案」には、弥彦荘は高氏の本領であったが、実際は二本松（福島県）の畠山氏が支配していたとの記載がある。当時の蒲原郡代は山吉氏であり、さらに地元の小国氏の勢力下の可能性も考えられ、弥彦荘は様々な支配下に置かれていたと考えられる〔桑原前掲、吉田町2000〕。

16世紀になると守護上杉氏と守護代長尾氏の対立が激化し、越後国内での内乱が勃発するようになる。永正の乱では、永正四（1507）年9月7日に猿ヶ馬場（弥彦村）にて、永正六（1509）年6月2日には黒滝城（弥彦村）にて戦があり、弥彦・角田山塊周辺も戦場と化したようである〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

「享禄・天文の乱」期（1530～1551）の当地の様相は明確でない。天文十九（1550）年には、蒲原郡などの国人たちを帰順させていた長尾景虎（上杉謙信）が越後国主となったが、天正六（1578）年3月、上杉謙信が急逝すると、養子である景勝・景虎の間で後継地位をめぐる「御館の乱」がおこり、国内領主層の分裂をもたらした。

弥彦・角田山塊周辺は、景勝の阿賀野川以南制圧にとって重要な地となっていたようである。黒滝城（弥彦村）の山岸氏、天神山城（旧岩室村）の小国氏、木場城（旧黒崎町）の山吉氏らが景勝方につき、和納館（旧岩室村）等の景虎方の砦を落とし、天正八（1580）年三条城神余氏の落城を最後として景勝方が勝利した。この際、上城・下城（竹野町）が落城したという伝説が残っており、両城が当期まで存続し、しかも景虎方の砦であった可能性を示唆しているが、詳細は不明である〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

御館の乱鎮定後、新発田重家が織田氏と組んで景勝と対抗する「新発田の乱」が起きる。その際、三条城主甘糟長重が景勝の側近である泉沢久秀にあてた書状（天正十二年3月16日）の中に、「真木之地」として旧巻町の地名が登場し、小国氏の支配下であったことが記されている〔『越佐史料』巻六〕。寛政元（1789）年5月の『御巡見様御案内手控帳』にも、巻館は小国氏家臣の西山庄左衛門が城主として居住していたという記載がある。慶長五（1600）年の『巻村内検地帳』によれば、館に接して町場が形成されており、館を中心として発展していたようである。天正十五（1587）年には羽柴氏と手を結んだ景勝は重家を討ち滅ぼした。新発田の乱平定後、景勝の命により小国実頼は大国と改め、『文禄三（1594）年定納員数目録』によれば、景勝家臣団の最上士層である「侍中」に大国氏と黒滝城の山岸氏の名が見られ、その功績が窺える。しかし、慶長三（1598）年に豊臣秀吉の命により越後国主上杉景勝が会津へ国替えさせられることとなり、譜代の家臣から地下の土豪まで随従し、故郷の地を離れることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

景勝の移封に伴い、堀秀治と配下の村上勝頼・溝口秀勝が入封した。秀治自身は春日山城を居城とし、村上頼勝を岩船郡本庄（村上市）に、溝口秀勝を新発田に置き下越後を統治させた。旧巻町周辺の統治は、上述の『巻村内検地帳』の検地が三条城に置かれた堀監物直政の配下の者により行われており、堀氏の統治下にあったことが分かる。関ヶ原の戦いの際に会津国境付近より起きた「越後一揆」が画期となり、堀氏は支配を確立し、兵農分離が推進されることとなった〔桑原前掲、吉田町前掲〕。

その後、旧巻町周辺は長岡藩に編入される。牧野忠成から明治廃藩まで存続する牧野氏長岡藩体制下においては、中世まで遅れていた治水事業・新田開発に力が注がれ、藩領の開発が進められた。特に鎧潟・田潟・大潟の治水による新川掘割工事は領内の庄屋等の力により推進され〔桑原前掲〕、現在でもその恩恵を授かっている。遺跡周辺の現景観の基礎はこの時期に固まったものと推察できるが、治水が推進されても洪水などの水害は繰り返されており、その後の度重なる復旧を経て現景観が形成されたと考察されよう。

本遺跡の所属する赤館は、元和四（1618）年の長岡藩知行目録に「あかさひ村」とみえ、高491石9斗余りとある。安政五（1858）年の旧長岡城主牧野家領地七ヶ組村名・反別・個数一覧表に戸数75戸で長岡藩領とされることから、近世を通じて一貫して長岡藩領の村である。近代に入り、明治22（1889）年までは赤館村、同年の町村制施行により同村と近隣の瀧頭村・河井村・柿島村・山島村新田が合併し瀧南村となった。明治34（1901）年に赤館が含まれる瀧南村と馬堀村、佐渡山村の一部と漆山村が合併し、戸数781戸、人口5,276人の漆山村となった。現代に入り、昭和24（1949）年に巻村が町制を施行し巻町になった際に、漆山村の赤館を編入した。昭和30（1955）年には巻町が周辺の峰岡村、角田村、漆山村、松野尾村、浦浜村と合併した。巻町はその後、平成17（2005）年10月10日に新潟市に編入し、新潟市西区の一地域となり、現在にいたる。

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 試掘・確認調査（第3図、第1表、図版25・26・28）

当該地では商業施設建設に伴う試掘・確認調査を2回実施した（第1表 調査番号2016186・2016254）。トレンチ配置図・土層柱状図は第3図に示した。調査はバックホウで表土から徐々に掘削した後、人力による精査を行い、遺構・遺物の有無と土層堆積状況を記録した。トレンチの大きさは概ね2.5×3.0～4.0mである。

第1次調査は平成28年9月26日から10月7日の実質9日間行った。対象面積は約2.6haで、トレンチは36か所設定した。調査の結果、現地表面下0.5～1.7mで黒褐色粘土層の遺物包含層相当層（Ⅵ層）が確認され、調査対象範囲の南側17か所のトレンチで遺物が出土した。第3図には各トレンチ出土の遺物を一覧にして示した。古代の土師器・須恵器を中心に、中世の珠洲焼や砥石などが出土している。主体となるのは8世紀の土師器煮炊具である。主な遺物については第Ⅴ章第2節に詳細を記した。このほかに、3・13・20・24・29Tで出土した近世陶磁器についても参考資料として記載している（第Ⅴ章第3節）。遺構は6か所のトレンチで検出した。現地表面下0.8～1.3mのⅥ層下で確認されており、遺構確認面の標高は調査範囲の南西側で最も高くなっている。検出した遺構は井戸1基、溝状遺構1条、性格不明遺構2基、ピット2基である。以上の結果から、調査対象地の南側を新たに赤館砂山遺跡として周知化した。

第2次調査は第1次調査の追加調査として、平成29年2月28日に行った。集水桝設置予定地の2か所にトレンチを設定した（第3図「追加1T」・「追加2T」）。調査の結果、遺物包含層相当層（Ⅵ層）の残存が認められ、追加2Tでは現地表面下1.45mのⅥ層で古代の土師器が1点出土した。

以上の調査結果を踏まえ協議を行ったところ、当該地の南側に設置される貯水槽部分について本発掘調査を行い、それ以外の部分については工事立会・慎重工事に対応することとなった。また、当該地の開発に伴って市道の拡幅工事が行われることになっており、それが赤館砂山遺跡の範囲内であることから、この道路拡幅部分について、貯水槽範囲と合わせて記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

第2節 本発掘調査

A 調査方法

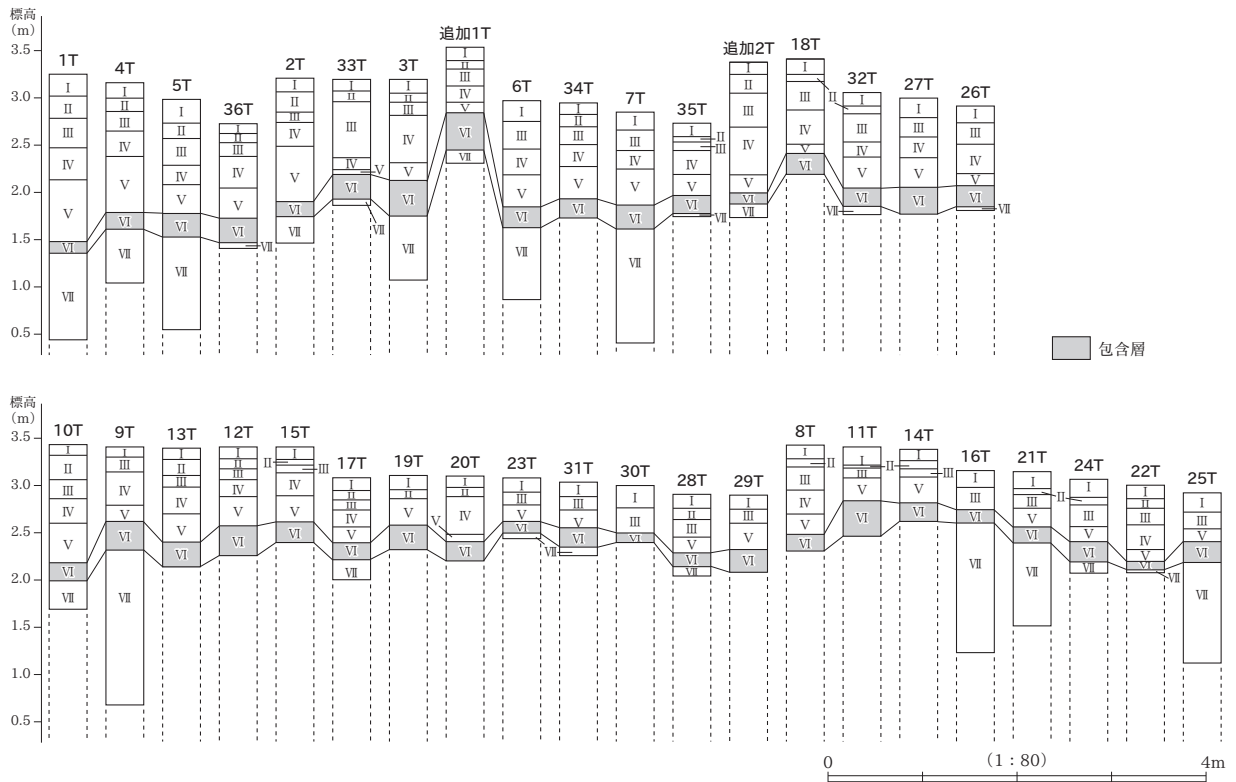
1) 調査前の状況

調査範囲の大半は、水田耕作地中の農道として利用されていた。農道は、昭和23年の米軍撮影写真（写真図版1）によれば水田耕作地として利用されていた。現標高は4～5mである。

2) グリッドの設定（図版7～9）

グリッドを設定するにあたっては、今後の赤館砂山遺跡周辺の開発事業の展開に備えて、今回の調査地点の約260m北西を調査基準点として1A-1A杭とした。1A-1A杭は、X座標：194,600.000、Y座標：34,400.000、緯度：北緯37°45′11.1102″、経度：東経138°55′09.0546″（測地成果2011）である。また、基準点に対して国土地理院の第Ⅷ系座標軸を用いて100mの方眼を組み、これを大々グリッドとした。

大々グリッドの名称は北西隅の1A-1A杭を起点として南北方向をアラビア数字、東西方向をアルファベットとし、この組み合わせによって表示した。この大々グリッドに10mの方眼を組み、これを大グリッドとした。大グリッドも大々グリッド同様の表示方法とした。大グリッドは、さらに2m方眼に区分して1から25の小グ



第3図 試掘・確認調査トレンチ位置図、土層柱状図

リッドに分割し、「3B-2H1」のように呼称・表示した。基準杭の打設は測量業者に委託した。

発掘調査区の座標は次のとおりである。

1区

3B-2H (X座標：194,390.000、Y座標：34,570.000、緯度：37° 45′ 04.2215″、経度：138° 53′ 32.3052″)

3B-2H 杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対して0度14分25秒東偏し、磁北は真北に対し8度10分西偏する。

2区

3C-2D (X座標：194,390.000、Y座標：34,630.000、緯度：37° 45′ 04.2134″、経度：138° 53′ 34.7563″)

3C-2D 杭で長軸方向を座標北の0度0分0秒とし、座標北は真北に対して0度14分26秒東偏し、磁北は真北に対し8度10分西偏する。

3) 調査方法

①表土掘削：これまでの試掘・確認調査の成果から、遺構形成面がVI層以下にあることが判明していたため、I層(旧水田表土)・II層(水田耕作層)・III～V層(漸移層等)まで重機(バックホウ)により除去した。排土は調査区南側の農道の上に仮置きした。また、湛水防止のため、表土掘削と並行して調査区の西壁から20cmほど離して幅20cm程度の土側溝を掘削し、2吋のポンプで強制排水を行った。

②包含層掘削・遺構検出・発掘：重機で表土除去の後、ジョレン等を用いて人力で精査を行い、包含層(VI層)の掘削・遺構の検出にあたった。排土は人力で調査区外に搬出した。

③実測・写真：実測図は断面図を1/20で作成した。平面図や各種測量点は測量業者に委託してトータルステーションを用いて作成し、あわせて俯瞰写真を撮影した。写真撮影は35mm版、6×7版のフィルムカメラおよびデジタル一眼レフカメラを用い、白黒フィルム・カラーポジフィルムを適宜併用した。

④遺物取り上げ：包含層出土遺物は小グリッドを単位として取り上げた。遺構出土遺物は点数が少ない地点が多く、層位ごとに一括で取り上げた。また、遺物密集地点や重要遺物についてはトータルステーションを併用して点取りした。

⑤自然科学分析：植物珪酸体分析・花粉分析・樹種同定・放射性炭素年代測定(AMS法)の科学分析を行った。

B 調査経過

平成29年5月30日から諸準備を開始した。同日に遠景・近景写真を撮影し、6月1日から準備工を開始し、敷鉄板の搬入・設置、プレハブ・機材倉庫・トイレを搬入・設置、重機・クローラードンプ搬入等を行い、6月13日に現地事務所に調査担当・調査員が移動し諸準備を行った。

6月15日から重機によって表土を除去する作業を1区調査区西側より開始し、基本層序を確定した。調査区東端までを6月19日までに行った。2区は同日に表土掘削を終了した。重機掘削と並行して、作業員約6名で排水路掘削、法面仕上げおよび遺構検出準備作業を開始した。6月20日より、調査区北側から包含層掘削および遺構検出作業を開始した。遺構の掘削・写真撮影・計測は6月22日より開始した。

7月6日までにほぼ遺構の精査を終了し、ローリングタワーによる撮影および空撮に備えた清掃作業を同日行い、7月7日にローリングタワーによる撮影、7月9日にラジコンヘリコプターによる調査区全体の撮影を行った。全景撮影後は、7月13・18日に下層確認のための深掘り等、調査の補足・測量調査を行った。7月16日に地元対象の現地説明会を行い、116名の参加があった。7月31日までに機材等の撤収作業を行った。

最終的な発掘調査面積は、1区上端面積212.88m²、下端面積176.23m²、2区上端面積27.76m²、下端面積18.74m²、合計面積は上端面積240.64m²、下端面積194.97m²である。

C 調査体制

平成 29 年度 赤縮砂山遺跡第 5 次調査本発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査・整理期間	平成 29 年 6 月 1 日～平成 29 年 7 月 31 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：藤井希伊子 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部文化財センター （所長：外山孝幸 所長補佐：渡邊朋和 福地康郎 主幹：遠藤恭雄）
調査担当	立木宏明（市文化財センター 主査）平成 29 年 6 月 1 日～平成 29 年 7 月 16 日 遠藤恭雄（市文化財センター 主幹）平成 29 年 7 月 17 日～平成 29 年 7 月 31 日
調査員	澤野慶子（市文化財センター非常勤嘱託）

第 3 節 整理作業

A 整理方法

1) 遺物

遺物量はコンテナ（内径 54.5×33.6×10.0cm）にして 10 箱である。奈良・平安時代の土器・石製品などの遺物がある。

遺物の整理作業は次の手順で行った。①洗浄 ②注記 ③包含層：種別ごとグリッド別に重量計測 ④遺構：遺物の器種別の重量・個体数計測 ⑤接合 ⑥報告書掲載遺物の抽出 ⑦実測図・観察表作成 ⑧トレース図作成 ⑨仮割付作成 ⑩版下作製。このうち⑧と⑩は業者に委託してデジタル編集をした。

2) 遺構

平面図を作成するにあたっては、まず測量業者に委託した 1/20 の遺構平面図と手取り断面図との校正作業を行った。報告書の 1/80 と 1/40 の遺構平面図は測量業者が作成し、デジタルデータとした。

B 整理経過

発掘調査と並行して整理作業を行った。出土遺物の水洗・注記・計測・接合・実測作業と写真・図面整理を行い、併せて測量業者に委託した遺構平面図の校正作業を行った。遺構平面図は測量業者作成のデジタルデータを用いた。整理担当および調査員は、遺物写真の撮影、図版のレイアウト、報告書の執筆・編集にあたり、平成 30 年度に報告書を刊行した。

C 整理体制

平成 30 年度 赤縮砂山遺跡第 5 次調査整理作業の体制は以下のとおりである。

調査・整理期間	平成 30 年 5 月 1 日～平成 31 年 3 月 29 日
調査主体	新潟市教育委員会（教育長 前田秀子）
所管課・事務局	新潟市文化スポーツ部歴史文化課 （課長：小沢昌己 課長補佐：廣野耕造 埋蔵文化財担当係長：朝岡政康） 新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター （所長：渡邊朋和 主幹：天野泰伸 遠藤恭雄）
整理担当	立木宏明（市文化財センター 主査）
調査員	澤野慶子・奈良佳子（市文化財センター非常勤嘱託）

第Ⅳ章 遺 跡

第 1 節 概 要

赤縮砂山遺跡は、西を西川、東側を飛落川に挟まれた沖積地内の自然堤防上に立地する。現在の遺跡全体の標高は現水田面で 3.4 ～ 2.9m を測り、西から東にかけて緩やかに下がっていく。今回の調査地点は赤縮砂山遺跡の南西側に位置する。現地表面から遺構確認面までの深さは東側が浅く、西側が深くなっており、現況とは逆に東から西に向かい下がっている。遺構確認面の標高は 2.6 ～ 2.2m を測る。本発掘調査地は道路拡幅部分と貯水槽部分に分かれており、それぞれを 1 区、2 区とした。

出土遺物は発掘調査終了時でコンテナ(内寸 54.5×33.6×10.0cm)換算で 10 箱となる。内訳は古代の土器 7 箱、石製品 1 箱、木製品 2 箱である。

第 2 節 層 序 (図版 16・21、写真図版 4・5・18)

基本層序についてはⅠ～Ⅶ層に大別した。調査区は東西に長く、また、1 区と 2 区に分かれており色調に若干の相違が生じているが、共通認識のもとに分層した。Ⅰ層は現水田耕作土、Ⅱ層が現水田床土である。Ⅲ～Ⅴ層は旧耕作土、洪水堆積層、漸移層等と考えられる。Ⅵ層は古代の包含層で、奈良・平安時代の遺物が出土した。Ⅶ層はいわゆる地山である。Ⅶ層については、遺構調査終了後に 3B-2G11 付近の北壁を標高 1.9m まで掘り下げたが、土層の変化はなかった。遺構確認面までの深度は、最も浅い 2 区東側で現地表面から下 0.4m、最も深い 1 区西側で現地表面下 1.1m である。

- Ⅰ層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト 粘性ややあり、しまりあり。黄褐色粒子混じる。基本的に現代の水田耕作土で、層厚は 5 ～ 12cm である。
- Ⅱ層 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘性ややあり、しまり強い。茶褐色粒子混じる。現代の水田床土で、層厚は 4 ～ 10cm である。
- Ⅲ層 黒褐色 (10YR3/2) シルト 粘性ややあり、しまりあり。褐色シルト混じる。層厚は 8 ～ 40cm である。
- Ⅳ層 灰色 (5Y4/1) シルト 粘性ややあり、しまりあり。茶褐色粒子混じる。層厚は 10 ～ 34cm で、2 区では検出しなかった。
- Ⅴ層 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト 粘性あり、しまりややあり。層厚は 10 ～ 36cm で、2 区では検出しなかった。
- Ⅵ層 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト 粘性あり、しまりあり。φ1 ～ 2mm の炭化物少量混じる。遺構の主な埋土及び古代の遺物包含層で、層厚は 7 ～ 28cm である。
- Ⅶ層 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘性あり、しまり強い。暗灰色シルトがブロック状に少量混じる。基盤層。分層はしていないが、下層に行くと砂質が強くなる。

第 3 節 遺 構

遺構の番号は調査区ごとに遺構の種別に関わらず通し番号を付した。記述は調査区で分け、1 区、2 区の順に行う。遺構の平面形態及び断面形態、堆積状況については和泉 A 遺跡での分類〔加藤・荒川 1999〕を参考にして

いる。遺構平面形は円形・楕円形・方形・長方形・不整形に分類し、断面形状は台形状・箱状・弧状・半円状・U字状・V字状・階段状とした。埋土堆積状況については確認できたものを本文に示した。調査区が狭小のため遺構全体を調査できず、一部の調査に限られているものが多い。

A 1 区 の 遺 構

1区は長さ約60m、幅約4mで、西から42.2m付近で窄まる。遺構確認面は東側から中央部までほぼ平坦な地形で、標高は2.4mを測る。3B-2G14付近から徐々に下がっており、基本層序Dより西側は標高2.2mで、ふたたび平坦な地形となる。検出された遺構数は掘立柱建物(SB)1棟、井戸(SE)1基、土坑(SK)3基、性格不明遺構(SX)1基、溝(SD)10条、ピット(Pit)39基である。調査区東側で検出された溝状遺構群9条を畑跡(SN)とした。遺物を伴う遺構が少なく、所属時期を確定する資料には乏しいが、包含層からは古代の遺物のみが出土していることから、遺構も概ね古代に比定されると考える。詳しい遺構の計測値等は別表1・2に示した。遺構の分布としては調査区中央から東側に集中する。一方、調査区西側は標高が低く、遺構は確認されていない。以下、種別ごとに遺構の概要について記す。

1) 井 戸 (SE)

SE1 (図版13・16、写真図版5)

3B-2H14・15・19・20に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。南側半分が調査区外へ伸びているが、平面形は楕円形と推定される。調査区南壁に接しており、深く掘削すると調査区の壁が崩落する危険があると判断されたため完掘は行わなかったが、深さ0.25mまで掘り進め、4層の埋土を確認した。主軸方向はN-81°-Wである。規模は長軸2.42m、短軸は現存部で1.23mを測る。遺物は出土していない。

2) 土坑 (SK)・性格不明遺構 (SX)

SK4 (図版14・17、写真図版5)

3B-2I8に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。SD16、SB56を構成するPit30を切る。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-36°-Eである。規模は長軸0.80m、短軸0.59m、深さ0.11mを測る。遺物は出土していない。

SK49 (図版13・17、写真図版5)

3B-2H16に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。排水用の土側溝で南側が壊されているが、平面形は楕円形、断面は弧状と推定される。埋土は単層で、主軸方向はN-88°-Eである。規模は現存部で長軸1.04m、短軸0.55m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していない。

SK50 (図版13・17、写真図版6)

3B-2G14に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。北側半分が調査区外へ伸びているが、平面形は楕円形と推定される。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-84°-Eである。規模は現存部で長軸1.08m、短軸0.28m、深さ0.16mを測る。黒色土器無台碗、土師器長甕が出土した。

SX2 (図版13・17、写真図版6)

3B-2I6～8・11・12に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。SD3、Pit20・36を切る。北側が調査区外へ広がるため、全体の様相は不明である。平面形は不整形とした。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-49°-Wである。規模は現存部で長軸3.25m、短軸2.75m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

3) 溝 状 遺 構 (SD)

SD3 (図版13・14、写真図版6)

3B-2I7・8・13に位置する古代の遺構である。Ⅵ層下面で検出した。北西側をSX2に切られ、南東側は調査区外へ伸びる。また、SB56を構成するPit19を切る。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-42°-W

である。検出した範囲での規模は長さ 2.10m、幅 0.40m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝で、SD3 はその西端に位置する。

SD5 (図版 14・18、写真図版 6・7)

3B-2I9・14・15 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SB56 を構成する Pit10 を切っており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-35° -W である。検出した範囲での規模は長さ 3.37m、幅 0.49m、深さ 0.25m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD6 (図版 14・18、写真図版 6・7)

3B-2I10・15、2J6・11 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SB56 を構成する Pit13 を切っており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-40° -W である。検出した範囲での規模は長さ 3.41m、幅 0.50m、深さ 0.18m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD11 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2I10、2J6・7・11・12 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-45° -W である。検出した範囲での規模は長さ 3.30m、幅 0.52m、深さ 0.26m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD12 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2J7・12・13 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-37° -W である。検出した範囲での規模は長さ 2.47m、幅 0.50m、深さ 0.20m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝として、土壌の自然科学分析を行った(第 VI 章第 2・3 節参照)。

SD15 (図版 14・18、写真図版 7)

3B-2J7・8・13 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-35° -W である。検出した範囲での規模は長さ 1.96m、幅 0.44m、深さ 0.20m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD16 (図版 14・18、写真図版 6)

3B-2I8・13・14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。SK4 に切られており、両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-38° -W である。検出した範囲での規模は長さ 3.46m、幅 0.33m、深さ 0.14m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD17 (図版 14・18、写真図版 7・8)

3B-2J8・9・14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-24° -W である。検出した範囲での規模は長さ 1.37m、幅 0.67m、深さ 0.18m を測る。土師器長甕が出土した。SN55 を構成する畝間の溝である。

SD18 (図版 14・18、写真図版 7・8)

3B-2J9・10 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出した。両端は調査区外へ伸びる。断面は弧状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-27° -W である。検出した範囲での規模は長さ 1.16m、幅 0.36m、深さ 0.22m を測る。遺物は出土していない。SN55 を構成する畝間の溝で、SD18 はその東端に位置しているが、SN55 はさらに調査区外に広がっている可能性もある。

SD37 (図版 13・17、写真図版 8)

3B-2I7・8・13 に位置する遺構で、北西側は調査区外へ伸びる。断面は半円状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-50° -W である。検出した範囲での規模は長さ 0.90m、幅 0.30m、深さ 0.31m を測る。調査区北

壁で層序を確認したところ、遺構確認面はVI層上面であった。このため他の遺構より新しいと考えられるが、遺物が出土していないことから時期は不明である。

4) 畑 跡 (SN)

SN55 (図版 14・18、写真図版 8)

3B-2I7 ~ 10・13 ~ 15、2J6 ~ 14 に位置する古代の遺構である。VI層下面で検出しており、SB56 を切る。畝と畝間の溝 (SD3・5・6・11・12・15・16・17・18) によって構成される。畝の上面を平面的に検出することはできなかったが、調査区壁面で溝の間に高さ 0.08 ~ 0.14m、幅 0.8 ~ 1.2m の畝状の高まりが7か所確認された。主軸方向は N-45° -W で、検出した範囲での規模は幅 13.72m を測る。SN55 を構成する SD17 からは土師器長甕が出土している。土壌の自然科学分析を行ったところ、アブラナ科の栽培や、陸稲による稲作が行われていた可能性が指摘されている (第VI章第2・3節参照)。

5) ピ ッ ト (Pit)

1区では39基のピットが確認された。中央部分に多く分布する。これらは主に掘立柱建物や柵、柱列を構成するものと推察されるが、実際には掘立柱建物が1棟確認できたのみで、ピットで構成されるほかの遺構は検出できなかった。

Pit7 (図版 13・18、写真図版 9)

3B-2H12 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は円形、断面は階段状を呈し、埋土は2層に分かれる。主軸方向は N-29° -E である。規模は長軸 0.29m、短軸 0.26m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

Pit8 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H12 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は長方形、断面は階段状を呈し、埋土は2層に分かれる。主軸方向は N-72° -W である。規模は長軸 0.34m、短軸 0.22m、深さ 0.30m を測る。遺物は出土していない。

Pit9 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H17 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-7° -E である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.21m、深さ 0.10m を測る。遺物は出土していない。

Pit10 (図版 14・20、写真図版 9)

3B-2I14・15 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD5 に切られる。平面形は円形、断面はU字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-48° -W である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.26m、深さ 0.22m を測る。土師器無台碗が出土した。

Pit13 (図版 14・20、写真図版 9)

3B-2I10 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD6 に切られる。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-60° -E である。規模は長軸 0.27m、短軸 0.20m、深さ 0.10m を測る。遺物は出土していない。

Pit14 (図版 13・18、写真図版 10)

3B-2H13 に位置する古代の遺構である。VII層上面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため北側は遺存していないが、平面形は楕円形と推定される。断面はU字状を呈し、埋土は2層に分かれる。主軸方向は N-20° -E である。規模は現存部で長軸 0.27m、短軸 0.23m、深さ 0.24m を測る。遺物は出土していない。

Pit19 (図版 13・14・20、写真図版 9)

3B-2I13 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、VII層上面で検出した。SD3 に切られる。平面形は円形、断面はU字状を呈し、埋土は2層に分かれる。主軸方向は N-5° -W である。規模は長軸 0.25m、

短軸 0.23m、深さ 0.26m を測る。遺物は出土していない。

Pit20 (図版 13・17、写真図版 6)

3B-2I7 に位置する古代の遺構である。SX2 の底面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため東側は遺存していないが、平面形は円形と推定される。断面は半円状を呈し、埋土は3層に分かれる。主軸方向はN-52° -W である。規模は現存部で長軸 0.25m、短軸 0.24m、深さ 0.15m を測る。遺物は出土していない。

Pit21 (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H25 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-22° -W である。規模は長軸 0.21m、短軸 0.18m、深さ 0.03m を測る。遺物は出土していない。

Pit22 (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面はU字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-23° -W である。規模は径 0.14m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

Pit23 (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15、2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-25° -W である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

Pit24 (図版 13・18、写真図版 11)

3B-2H15、2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-65° -W である。規模は長軸 0.25m、短軸 0.23m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

Pit25 (図版 13・18、写真図版 11・12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。Pit26 を切る。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-29° -W である。規模は長軸 0.21m、短軸 0.20m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

Pit26 (図版 13・18、写真図版 11・12)

3B-2I6・11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。Pit25 に切られる。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-77° -E である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.17m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

Pit27 (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。Pit28 を切る。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-56° -E である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.18m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

Pit28 (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。Pit27 に切られる。平面形は楕円形、断面は半円状を呈し、埋土は2層に分かれる。主軸方向はN-9° -E である。規模は長軸 0.30m、短軸 0.23m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

Pit29 (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2I11 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-10° -W である。規模は長軸 0.18m、短軸 0.17m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

Pit30 (図版 14・20、写真図版 5・9)

3B-2I8 に位置する古代の遺構である。SB56 を構成するピットで、SK4 を完掘した際に遺構底面で検出した。平面形は円形、断面は U 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-66° -W である。規模は径 0.22m、深さ 0.28m を測る。遺物は出土していない。

Pit31 (図版 13・19、写真図版 10)

3B-2H13 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は台形状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-15° -W である。規模は長軸 0.18m、短軸 0.16m、深さ 0.09m を測る。遺物は出土していない。

Pit32 (図版 13・19、写真図版 10)

3B-2H14 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は楕円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-67° -E である。規模は長軸 0.20m、短軸 0.17m、深さ 0.04m を測る。遺物は出土していない。

Pit33 (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2H14 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は V 字状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-11° -W である。規模は長軸 0.23m、短軸 0.21m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

Pit34 (図版 13・19、写真図版 12)

3B-2H16 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-49° -W である。規模は長軸 0.17m、短軸 0.15m、深さ 0.12m を測る。遺物は出土していない。

Pit35 (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2H17 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-6° -W である。規模は径 0.20m、深さ 0.11m を測る。遺物は出土していない。

Pit36 (図版 13・17、写真図版 6)

3B-2I6 に位置する古代の遺構である。SX2 を完掘した際に、底面で検出した。北側が調査区外へ伸びており、平面形は円形と推定される。断面は箱状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-4° -W である。規模は現存部で長軸方向 0.16m、短軸方向 0.24m、深さ 0.15m を測る。遺物は出土していない。

Pit38 (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G13 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。排水用の土側溝で壊されているため北側は遺存しないが、平面形は楕円形と推定される。断面は U 字状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-48° -W である。規模は現存部で長軸 0.32m、短軸 0.25m、深さ 0.38m を測る。遺物は出土していない。

Pit39 (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G14・19 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-10° -E である。規模は径 0.22m、深さ 0.10m を測る。土師器長甕が出土した。

Pit40 (図版 13・19、写真図版 13)

3B-2G19 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-9° -W である。規模は長軸 0.14m、短軸 0.13m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

Pit41 (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G19・20 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-85° -W である。規模は長軸 0.22m、短軸 0.20m、深さ 0.10m を測る。遺物は

出土していない。

Pit42 (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G15 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-4° -W である。規模は長軸 0.10m、短軸 0.09m、深さ 0.09m を測る。遺物は出土していない。

Pit43 (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-50° -E である。規模は長軸 0.15m、短軸 0.14m、深さ 0.05m を測る。遺物は出土していない。

Pit44 (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-38° -E である。規模は長軸 0.15m、短軸 0.13m、深さ 0.04m を測る。遺物は出土していない。

Pit45 (図版 13・19、写真図版 14)

3B-2G20 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-60° -W である。規模は長軸 0.16m、短軸 0.15m、深さ 0.03m を測る。遺物は出土していない。

Pit46 (図版 13・19、写真図版 15)

3B-2G15 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は長方形、断面は半円状を呈し、埋土は 2 層に分かれる。主軸方向は N-1° -E である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.22m、深さ 0.18m を測る。遺物は出土していない。

Pit47 (図版 13・16、写真図版 15)

3B-2H10 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。北側が調査区外に伸びており、平面形は円形と推定される。断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-7° -W である。規模は現存部で長軸 0.16m、短軸 0.21m、深さ 0.13m を測る。遺物は出土していない。

Pit48 (図版 14・19、写真図版 15)

3B-2I8・9 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は方形、断面は半円状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-3° -E である。規模は長軸 0.24m、短軸 0.20m、深さ 0.08m を測る。遺物は出土していない。

Pit51 (図版 12・19、写真図版 15)

3B-2G12 に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は階段状を呈し、埋土は単層である。主軸方向は N-23° -W である。規模は長軸 0.31m、短軸 0.28m、深さ 0.11m を測る。石製品(台石)が出土した。

Pit52 (図版 13・19、写真図版 15・16)

3B-2G19 に位置する遺構である。包含層(Ⅵ層)掘削時に柱根の上部を検出したため、柱根を中心に周辺 70cm 程度の範囲をⅥ層ごとに残した。島状に残した上面を精査したがピットの平面形が不明瞭であったため、北側に幅 1m のトレンチを設定し、掘り下げた。断面を確認したところ、Pit52 はⅥ層にも掘り込まれており、確認面はⅥ層よりさらに上層である可能性もある。平面形は楕円形と推定され、断面は U 字状、埋土は現存部で 2 層に分かれる。主軸方向は N-10° -W である。規模は現存部で長軸 0.41m、短軸 0.32m、深さ 0.30m を測る。柱根の樹種同定を行ったところ、ヤナギ属であることが判明した。新潟県内では律令期以降に柱などの建築部材としてのヤナギ属の利用は少ないとされる(第Ⅵ章第 4 節参照)。また、放射性炭素年代測定(AMS 測定)を行っ

たところ、15世紀後半～17世紀前半(1488～1626calAD)の年代が示された(第VI章第5節参照)。試掘調査でも中世から近世以降の遺物が出土していることから(第V章参照)、赤縮砂山遺跡の存続時期を考える上で重要な資料である。柱根のほかに土師器無台椀・長甕が出土している。

Pit53 (図版13・19、写真図版16)

3B-2G18に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-51°-Wである。規模は長軸0.20m、短軸0.19m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

Pit54 (図版13・14・19、写真図版16)

3B-2I12に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-12°-Wである。規模は長軸0.26m、短軸0.24m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していない。

6) 掘立柱建物(SB)

SB56 (図版14・20、写真図版8・9)

3B-2I8～10・13～15に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。主軸方向はN-25°-Eである。調査区が狭小のため全体像は確認できなかったが、現存部で梁間1間(2.70m)×桁行2間(3.64m)、床面積は9.83㎡である。柱穴の規模は径0.22～0.31mで、深さ0.10～0.28mを測る。柱間間隔は梁間2.70m、桁行1.67～2.11mである。柱根は検出しなかった。SB56を構成するPit10からは土師器無台椀が出土している。切り合い関係は、SK4、SD3・5・6に切られている。このうちSD3・5・6はSN55を構成していることから、SB56の廃絶後に、SN55が構築されたと考える。

B 2 区 の 遺 構

2区は1区から北東方向に約20mの位置にあり、長さ約9.8m、幅約2.9mの範囲である。遺構確認面はほぼ平坦で、西側は標高2.5m、東側で標高2.6mを測る。性格不明遺構(SX)1基、ピット(Pit)1基を検出した。遺物を伴う遺構はなく、1区同様、所属時期を確定する資料には乏しいが、包含層からは古代の遺物のみが出土していることから、遺構も概ね古代に比定されたと考える。詳しい遺構の計測値等は別表1に示した。

1) 性格不明遺構(SX)

SX1 (図版15・21、写真図版18)

3C-1C6～9・11～13に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。北側が調査区外に伸びており、平面形は不整形とした。断面は弧状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-85°-Eである。規模は現存部で長軸5.33m、短軸0.88m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

2) ピット(Pit)

Pit2 (図版15・21、写真図版19)

3B-1C11に位置する古代の遺構である。Ⅶ層上面で検出した。平面形は円形、断面は台形状を呈し、埋土は単層である。主軸方向はN-10°-Wである。規模は長軸0.17m、短軸0.16m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

第V章 遺 物

第1節 概 要

本発掘調査では土器・石製品・木製品が出土した。終了報告時の総量はコンテナ（内寸54.5×33.6×10.0cm）で10箱、内訳は古代の土器7箱、石製品1箱、木製品2箱である。試掘・確認調査では古代・中世・近世の遺物が出土した（第III章第1節参照）が、本発掘調査地点では土器については古代のもののみであった。

以下では種別ごとに全体的出土状況、抽出・図化した個々の遺物について詳細を述べる。また、試掘・確認調査の出土遺物の主要なものについても合わせて報告する。

第2節 古代の土器（図版22～26 写真図版20～27）

小片が多く完形を知り得るものは少ないが、土師器にはロクロを使用していないハケメ調整が主のもの、ロクロを使用するものがあり、量的には前者が多く多様性がある。黒色土器はロクロ使用のもののみである。

個々の遺物の詳細な観察内容は別表3に示した。

A 土器の記述と分類

土師器については器形の全体を知り得るものは多くないが、口縁部形態が明らかなものは比較的多かった。分類をおこなった場合、形態・手法による分類はアルファベット大文字を用い、細分する場合はアルファベット小文字・算用数字の順に用いた。分量による分類はローマ数字を用いて大きい方からⅠ・Ⅱ…としている。また、成形・調整の表現は『細池寺道上遺跡Ⅵ・Ⅶ』〔立木・奈良ほか2017、同2018〕にならい以下のようにした。

1. ロクロ回転を利用したナデを「ロクロナデ」、そのほかのものは「ナデ」とした。
2. ロクロ回転を利用したケズリを「ロクロケズリ」、利用しないものは「ケズリ」とした。
3. ロクロ回転を利用した刷毛目を「カキメ」、利用しないものは「ハケメ」とした。
4. 黒色土器無台椀・土師器無台椀などにみられるへら磨きは「ミガキ」とした。
5. 須恵器甕・横瓶、土師器長甕・鍋などの外面にみられる叩き具を用いた成（整）形痕を「タタキメ」とし、対応して内面に当てられた当て具の痕跡を「当て具痕」とした。

叩き具・当て具の文様については、細池寺道上遺跡での分類〔立木・奈良ほか2017、同2018〕に準じ、平行線文をH類、同心円文をD類、格子文をK類、放射状文をS類、扇形文をC類とし、無文のものがあるのでそれをN類とする。平行線文タタキメは、刻まれた線に対する木目の現れ方で3種類に分けている（直交：Ha類、右上がり斜交：Hb類、左上がり斜交：Hc類）。今回出土の須恵器では外面Ha類またはHc類で内面D類のもの、外面K類で内面はD類にH類が加わるもの、外面Hc類で内面N類のものがある。土師器鍋に外面H類内面H類のものが1点ある。

須恵器の胎土については『山三賀Ⅱ遺跡』〔坂井ほか1989a〕、『越後阿賀北地域の古代土器様相』〔春日ほか2004〕で提示されている分類を参考に以下のように分類した。

A群 胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・雲母を多く含む。器面はざらついたものが一般的で、小礫が露出する。阿賀北地方の窯跡の須恵器と推定される一群である。

B群 胎土そのものが精良で、白色粒子を多く含む。器面に黒色の斑点、吹き出しがみられる。佐渡の小泊窯

跡群の須恵器と推定される一群である。

C群 胎土そのものは比較的精良であり、石英・長石の小粒子を少量含む。器面は滑らかである。新津丘陵窯跡群の須恵器と推定される。

D群 A～C類ではないもの。

1) 須 恵 器

食膳具（無台杯、有台杯、杯蓋）、貯蔵具（壺・瓶類、甕）がある。

無 台 杯 厚手で丸底のもの（2）と薄手平底で体部が直線的に開くもの（69～71・75）がある。

有 台 杯 口縁不明だが平底で断面方形の大ぶりの高台が底部周縁に張り付けられるもの（5）と、外端接地の断面方形の高台が平底の周縁より中心よりに貼り付けられる深いものがある（6）。

杯 蓋 直径の半分ほどの天井部からなだらかに口縁部に至り、明瞭な稜を形成して端部を下方に折り曲げるもので、擬宝珠形のつまみをもつものが1点出土している（8）。

壺・瓶類 肩の張る体部の小片（22）と長頸になるか短頸になるか不明の底部がある（81）。

甕 叩き成形による体部があるが、それらの口縁部とみられるものは認められなかった。

2) 土 師 器

食膳具（無台杯、無台碗、鉢）、煮炊具（長甕、小甕、鍋、甑？）がある。

無 台 杯 完形品がなくあまり判然としないものが多いが、ロクロ不使用で、3類に分けた。

A類 口縁端部に水平な平坦面をもつもの（9）

B類 丸底風のもの（10）

C類 直線的に外傾して開くもの（11～15）。口径大小あるようである。

無 台 碗 ロクロ使用で、口縁部が玉縁風になるものが1点ある（52）ほかは、口縁部不明の糸切りの底部がある。（53・54・76）

大型の杯または鉢または壺？ ロクロ不使用のもので、直線的に外傾して大きく開くもの（16）、外反して開くものでやや深い器形になると推定されるもの（17・18）があり、杯または鉢、甑などである可能性があるか。

長 甕 ロクロ不使用のもの、ロクロ使用のものがある。ロクロ不使用のものは、2種に分類した。

A類 体部からくの字形に屈曲して外反する口縁部をもち底部は尖り気味の丸底となるもの（30）。口縁端部は丸くおさめられる。

B類 体部からなだらかに外反する口縁部をもつもの（28）。口縁端部は断面方形に近いものや丸くおさめるものなどがある。

体部片の多くは体部中位に最大径をもつと推定されるもので、底部片は平底ばかりなので、B類は平底のものが主であると考えられる。

ロクロ使用のものについては口縁部形態で以下のように分類した。

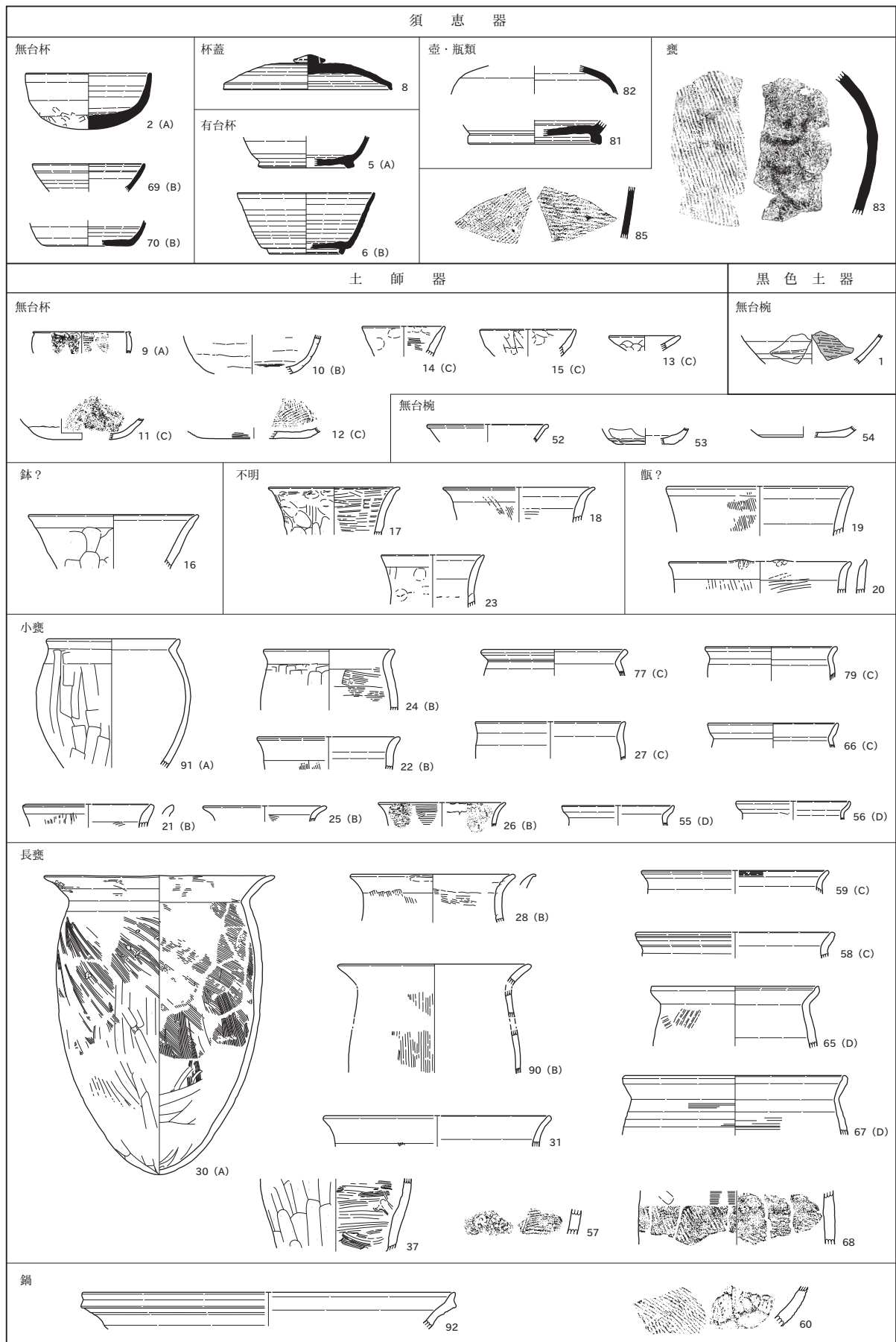
C類 体部からなだらかに屈曲して口縁部が外反して短く開く（58・59）。

D類 体部から「く」字状に屈曲して直線的に口縁部がのび、断面三角形の端部は上方につまみだす（65・67）。

小 甕 口径15cm程度になると推定されるもの。ロクロ不使用のものでは、中位のふくらみが大きい体部からくの字形に屈曲して直線的に開く口縁部をもつもの（91）と、なだらかに外反する口縁部のものがある。ロクロを使用するものでは、直線的に外傾する口縁部をもつもの（66・67・79）と受け口状に開き端部を小さく上方につまみだすものがある。

鍋 ロクロ使用で、断面三角形の口縁端部が上方に大きくつまみだされるもの（92）、叩き技法による丸底の底部（60）が各1点ある。

甑？ 体部にくびれや屈曲がなく直立する口縁部のものや大きく開く鉢形のものなかには甑が含まれる



第4図 古代土器分類図 (S=1/6)

かもしれない。

3) 黒色土器

無台碗の小片が1片出土した。

無台碗 体部の小片のため、口縁部形態や口径・底径などは不明であるが、内面を磨いて黒色処理したものである。

B 出土土器各説

1) 本発掘調査出土土器

a 遺構出土土器

1区 SK50 から黒色土器無台碗が1点出土している。1は体部のみの小片であるが、内面ミガキ黒色処理。

b 包含層出土土器

2は須恵器無台杯で1区 3B-2G18 出土。丸底で口縁部が直立する厚手のものである。底部は手持ちヘラケズリにより調整されている。古墳時代の蓋杯の蓋にも似ているが、口径、深さがあり厚手であることなどから金属器模倣の流れにある無台杯の一種と考えておきたい。白色に近い色調で、焼成は甘く軟質である。内面見込みは磨滅が認められる。産地はよくわからない。

3は須恵器無台杯で1区 13B-2H12 と 3B-2H16 から同一個体が出土した。厚みのある口縁部で、白色を呈し焼成は甘く粉をふいたようになっている。焼成や色調は2に近い印象だが、底部への屈曲が認められるので丸底にはならないと考えられる。新津産か。

4は須恵器無台杯で1区 3B-2G17 出土。3よりは薄い厚手の口縁部小片で、焼成は甘くやや軟質である。内面が淡い橙色、外面は灰色を呈しており、内面が完全に還元されていない。内面下端にわずかな屈曲が認められることから、すぐに底部に移行する浅い器形となるか、途中で稜を形成する器形である可能性もある。佐渡小泊窯産とは異なるように思われる。

5・6は須恵器有台杯で、5は1区 3B-2F19・3B-2F20 出土のものが接合し、ほかに同一個体が2F19 から2片出土している。底部がやや丸みをもち幅広の高台が底部周縁近くに張り付けられる。内面は全体に降灰しており部分的に緑色の自然釉に近いものもみられる。外面体部から高台の外面～底面は残存部分でみる限り、降灰はあるものの内面ほどではなく、光沢のある暗色を呈する。高台内の底部のみ光沢も降灰もない状況である。このことから少なくとも正位で置かれて上に覆うものがなく、底部は隠されるが高台底面まで降灰が及ぶような台にのせられていたという焼成方法が想定される。

6は1区 3B-2G18・3B-2G19 出土のものが接合し、ほかに同一個体3片が両グリッドから出土した。口縁部片と体～底部片を合成して図示している。平底で深いタイプのものである。5に比べて薄手で軽い焼成である。体部は口縁端部にむかって先細りになっていく。断面方形の高台は外端で接地する。外面全体に降灰がみられ光沢があるが、内面には一切降灰がないことから、逆位で重ねて焼成されたものと考えられる。微細な白色粒を多量に含む佐渡小泊窯産であろう。

7は須恵器甕体部片で1区 3B-2G16 出土。外面平行線文タタキメ（木目左上がり斜交）、内面同心円文（木目円周方向）当て具痕を残す。小粒の石英や長石などを多く含む薄手で堅緻な焼成であり、小泊窯とは異なる産地か。

8は須恵器杯蓋で1区 3B-2E25 出土。口縁端部はわずかしかないが、全体の4分の1ほどが残る。口縁端部はシャープに角をつけて折り曲げられ、やや外側に向く。焼成は堅緻である。擬宝珠形のつまみは周縁部が細かく打ち欠かされている。また口縁端部も細かく打ち欠かれているように見える。外面は全体に降灰して暗い色調で、内面口縁端部から1cmほど中心側まで外面と同様の色調を呈することから、身と重ねて正位で焼成されたもので、身の口径が蓋より2cm程度小さかったことを示すのであろう。つまみの打ち欠かれた部分をみると鐔状の部分の中に調整が施されているようであり、天井部をヘラケズリする際に中央を低い円柱状に削り残した上にか

ぶせるようにしてつまみを作っている可能性がある。また、つまみ下端部は半径の3分の1ほど内側まで細い工具で調整されていて、山形の円盤が浮いているように見えるのも特徴的であり、生産地を考える手がかりになると思われる。

9は土師器無台杯であろうか。1区3B-2E25出土。体部は内湾し、端部には水平な平坦面が作り出されている。ロクロ不使用で、内外面ヨコハケ調整である。

10は土師器で、平底から丸みをもって立ち上がる無台杯になるものと思われる。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で外面はナデ、内面は残りが悪いがヨコハケがみられる。薄手で成形時の粘土の継ぎ目がならされずに残る。

11は土師器で、平底から丸みをもって立ち上がり体部が外傾する無台杯と思われる。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、内面は(ヨコ?)ハケメ調整がみられる。外面には粘土の継ぎ目が残る。

12は土師器で、平底から外傾して立ち上がる無台杯か。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、外面にはわずかにヨコハケが残り、内面は目の粗いハケメが不定方向に施されている。底部にはハケメと木葉痕のような痕跡がある。

13は土師器で、大きく外傾して開く浅い器形の無台杯か高杯になるものであろうか。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用で、外面はケズリ?・ヨコナデ、内面はヨコナデである。

14は土師器で、小型で直線的に外傾して開く深さのある無台杯の口縁部と思われる。1区3B-2F22出土。ロクロ不使用で、内外面ともヨコナデと指頭圧痕が認められる。

15は土師器で、口縁端部が断面方形を呈し、体部には稜をもつ無台杯。1区3B-2F16出土。ロクロ不使用で、外面ヨコナデとヘラケズリ、内面は指頭圧痕とヨコナデである。

16は土師器で、大きく開く無台杯あるいは鉢というべきかもしれない。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、外面ヘラケズリとヨコナデ、内面はヨコナデである。

17は土師器で、直立気味の体部から緩やかに開いて口縁部は小さく外反する小甕か甔の可能性も考えられる。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、外面は指頭圧痕、タテやナナメのハケメ、内面は口縁端部近くまでヨコハケが施されている。

18は土師器で、直立ぎみの体部から小さく外反する口縁部はヨコナデで先細りになる。小甕か。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、外面ナナメハケ、内面ヨコハケである。

19は土師器で、厚手で直線的な体部から口縁端部は丸くおさめられている。甔か。1区3B-2E20・3B-2E25出土。ロクロ不使用で、外面はタテ・ナナメのハケメ、内面はヨコナデである。

20は土師器で、直立する体部から口縁部は小さく外反する甔か。1区3B-2F16出土。ロクロ不使用で、体部は外面タテハケと指頭圧痕、内面ヨコ・ナナメハケである。

21は土師器小甕か。やや外反する口縁部で、端部内側に角をもつ部分もある。1区3B-2G16出土。ロクロ不使用で、外面タテハケ、内面ナナメハケである。

22は土師器小甕か。厚みのある直立する体部から口縁部が小さく外反する。1区3B-2E25出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ、内面ヨコハケである。

23は土師器(小)甕か。なだらかに外反して口縁端部に至るもので、ややくびれた壺のような形になるか。1区3B-2E24出土。ロクロ不使用で、体部外面は指頭圧痕とヘラケズリ、ナデが認められ、内面はヨコナデである。

24は土師器小甕。体部中位に最大径をもって口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。1区3B-2G15出土。ロクロ不使用で、体部は外面タテ方向のケズリ、内面はヨコハケである。

25は土師器で、大きく外反して開く小甕口縁部とみられる。1区3B-2E20出土。ロクロ不使用で、内面にはヨコナデの前にナナメハケが施されている。

26は土師器で、やや薄手でなだらかに外反する口縁部。23に近い形の小甕になるか。1区3B-2E25出土。

ロクロ不使用で、外面はヨコハケ、内面はヨコナデか、粘土の継ぎ目が残る。

27 は土師器小甕か。ややふくらみのある体部から内面に明確な稜を形成して口縁部となり、口縁部は外反しない。1区 3B-2E20 出土。内外面とも横方向にナデられていると思われるが、ロクロ使用か不使用か判然としない。

28 は土師器長甕で、あまりふくらみのない体部から口縁部が比較的大きく外反して開く。1区 3B-2F19 出土。ロクロ不使用で、体部外面はナナメハケ、内面はヨコハケである。口縁部内面には粘土の継ぎ目が残る。

29 は土師器小甕か。大きく外反する口縁部である。1区 3B-2G17 出土。ロクロ不使用で、体部はハケメ調整かと思われる。

30 は土師器長甕で、本発掘調査で出土したなかでは最も残存率が高く、ほぼ完全な形をうかがい知ることのできる唯一の個体である。1区 3B-2G15・3B-2G14 からすべての破片がまとまって出土した。底部の先端までは接合しなかったが、底部に相当するとみなせる破片の形状から、やや尖りぎみの丸底になると考えられる。ロクロ不使用で、体部内外面とも上半は特徴のある明瞭なハケメが左上がりの斜め方向に長い単位で施され、下半はタテまたはナナメのケズリ、またはナデによって尖り気味の丸底が作り出されている。体部内面にはくびれ部のやや下から体部の高さ約4分の3に及ぶ縦長の明瞭な黒斑が認められる。

31 は土師器長甕口縁部片で、外反して口縁端部はつまみ出すというほどではないが、やや方形に近い断面形を呈する。1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、体部外面はヨコまたはナナメハケ、内面はナナメハケが施される。

32 は土師器長甕か。体部から口縁部へ移行する部分で大きく屈曲する。1区 3B-2G1 出土。ロクロ不使用で、体部外面はナナメハケ、内面はヨコハケである。

33 は土師器長甕体部で、体部中位に最大径がある形になると思われる。1区 3B-2F20 出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ・ケズリ、内面はヨコハケ。内面には粘土の継ぎ目が残っている。内面にオコゲあり？

34 は土師器小甕体部で、1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテハケ、内面はヨコナデである。内面には粘土の継ぎ目が残っている。

35 は土師器長甕体部で、あまり大きいふくらみはもたないようである。1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、外面タテハケ、内面ヨコナデである。

36 は土師器小甕体部で、35よりはふくらみが大きく薄手である。1区 3B-2G16 出土。ロクロ不使用で、外面ヘラケズリ、内面ヨコナデである。

37 は土師器長甕体部で、体部中位に最大径をもつ器形になると思われる。1区 3B-2E24 出土。ロクロ不使用で、外面はタテ方向のヘラケズリ、内面ヨコハケである。

38 は土師器長甕体部で、体部中～上位に最大径をもつ器形であろう。1区 3B-2F18 出土。ロクロ不使用で、外面はケズリか、内面はヨコハケ・ナデである。

39 は土師器長甕体部で、1区 3B-2G17 出土。ロクロ不使用で、外面はタテ・ナナメのケズリ、内面はタテ方向を基調とするハケメが明瞭に残り、部分的にナデが施される。

40 は土師器長甕体部で、1区 3B-2G17 出土。ロクロ不使用で、外面はタテ方向基調のケズリ、内面もヨコ方向のケズリである。

41 は土師器長甕口縁下部～体部で、体部中位に最大径がある器形と思われる。1区 3B-2F23 出土。ロクロ不使用で、外面は残りが悪くはつきりしないがケズリと思われる。内面はヨコナデである。

42 は土師器小甕の体部下端かと思われる小片である。1区 3B-2G16 出土。ロクロ不使用であろう。

43～51 は平坦な底部と思われるものである。43 は直径 5cm 程の平底をもつ土師器小甕で、1区 3B-2F19 出土。ロクロ不使用で、外面ナナメハケ、内面はナデであろうか。

44 は土師器小甕体部～底部で、直径 8.3cm 程の平底は低い円盤状に突出しており、底部と体部の境は明瞭な

段になる。1区 3B-2G17・3B-2F17 出土。ロクロ使用か。外面ロクロナデ・ケズリ？内面ロクロナデ・ナデで底面には切り離し後なんらかの敷物？か棒？の圧痕が認められる。

45 は土師器長甕か。1区 3B-2G18 出土。直径 9.2cm の全く平坦な底部にはナデと木葉痕が認められる。ロクロ使用の可能性もあるか。

46 は底径 9.0cm の土師器長甕で、1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ方向のケズリ、内面はナデと指頭圧痕、底部外面はケズリとナデで調整されている。

47 は底径 7.6cm 程と推定される土師器小甕か、1区 3B-2F21 出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ・ナメハケ、内面には指頭圧痕がみられる。

48 は底径 5.8cm 程の土師器小甕体部～底部で、1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、体部外面はタテ・ナメハケ、内面には指頭圧痕、底部外面はハケメがみられる。

49 は土師器小甕？底部片で、1区 3B-2E25 出土。ロクロ不使用で、外面はケズリ？内面ナデ。

50 は土師器長甕？底部片で、1区 3B-2F16・3B-2F22 出土。中央が最も厚みがある。ロクロ不使用で、外面調整は残りが悪く不明、内面はナデである。

51 は土師器小甕？底部片で、1区 3B-2G17 出土。ロクロ不使用で、内面はナデ？外面はケズリが施されていると思われる。

52 はロクロ使用の土師器無台椀または有台皿の口縁部で、1区 3B-2J6 出土。端部が玉縁風になるもので、器面はなめらかに調整されている。

53 はロクロ使用の土師器無台椀底部片で、1区 3B-2G14 出土。底部は糸切りで切り離しの際に糸が体部下端に巻き付いた跡がある。内面は 54 に比べると凹凸があるが小甕よりはなめらかに仕上げられている。残存部からすると体部はそれほど開かない器形であると推定する。

54 はロクロ使用の土師器無台椀底部片で、1区 3B-2J6・3B-2J7 出土。底径は 9cm 近く大ぶりの深い器形のものとして推定する。内面はなめらかに調整されており、両面赤彩されていた可能性あり？

55 はロクロ使用の土師器小甕口縁部で、1区 3B-2H12 出土。端部はやや先細りになり外方にやや開く。

56 はロクロ使用の土師器小甕口縁部で、1区 3B-2G16 出土。口縁部はやや内湾して端部は上方に向く。

57 は叩き技法で整形した土師器長甕の体部片で、1区 3B-2F18・3B-2F16 から 1 点ずつ同一個体が出土した。外面は長方形格子文タタキメ、内面はハケメが施されており当て具痕は不明である。叩き技法を用いているので成形はロクロ使用であろう。

58 はロクロ使用の土師器長甕口縁部で、1区 3B-2G20 出土。反りは強くなく、端部直下を強くなでてややつまみだすように整えている。

59 はロクロ使用の土師器長甕口縁部で、1区 3B-2E25 出土。58 に比べるとやや薄手で反りが強い。端部は丸くおさめるのみである。

60 は叩き技法で丸く整形した土師器鍋の底部片で 1区 3B-2G16 出土。外面は平行線文タタキメ、内面は当て具痕の上からハケメ？が施される。成形にはロクロを使用したものであろう。

2) 試掘調査出土土器

65 はロクロ使用の土師器長甕で、9T VI層出土。体部外面には平行線文タタキメが認められる。

66 はロクロ使用の土師器小甕で、9T VI層出土。体部からくの字形に屈曲し、口縁部は肥厚して丸くおさめる。

67 はロクロ使用の土師器長甕で、9T VI層出土。体部からくの字形に屈曲して口縁部は肥厚し、端部は断面方形に近いが、やや内側につまみだしている。体部は内外面ともカキメが施される。

68 はロクロ使用の土師器長甕体部で、9T VI層出土。外面上半はカキメとケズリ、下半は平行線文タタキメ、内面上半はロクロナデ、下半は平行線文当て具痕がみられる。厚手である。

69 は須恵器無台杯口縁部で、11T VI層出土。

- 70 は須恵器無台杯底部～体部下半で、11T VI層出土。底部はヘラ切り無調整。
- 71 は須恵器無台杯底部で、11T VI層出土。底部はヘラ切り無調整。69～71 は佐渡小泊窯産であろう。
- 75 は須恵器無台杯口縁部で、12T VI層出土。灰白色を呈し焼成はやや軟質である。小泊窯産？
- 76 はロクロ使用の土師器無台椀底部～体部で、12T VI層出土。底部糸切り無調整か。
- 77 はロクロ使用の土師器小甕で、13T VI層出土。口縁部は体部からくの字形に屈曲して延び、端部は肥厚する。
- 79 はロクロ使用の土師器小甕で、19T VI層出土。体部からのくびれはあまり強くない、端部は丸くおさめられている。
- 81 は須恵器壺・瓶類の底部とみられる。23T VI層出土。薄手の平坦な底部の端に断面方形の高台が貼り付けられている。高台径は外端部で14.6cmほどになる。高台内側の底部外面には爪形の圧痕がめぐっている。
- 82 は須恵器壺・瓶類の肩部で、23T VI層出土。肩の張りは強く、外面には降灰がみられる。
- 83 は須恵器甕肩部で、23T VI層出土。肩の張りは強い器形になると推定される。外面は平行線文タタキメ（木目左上がり斜交）の後カキメが施され、内面は球面をもつものを押し当てた浅いくぼみの連続がみられる。明確な文様と呼べるものは見いだせないが、部分的に直線的な凹凸がある。本来無文の原体にキズが生じたものかあるいはごく部分的な刻みをもつ当て具痕であると考えられる。
- 84 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。非常に厚みがあり、外面は平行線文タタキメ（木目左上がり斜交）内面は無文？当て具痕やナデが見られる。外面のタタキメは83によく似ており、83の同一個体かもしれない。
- 85 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。外面は斜格子文タタキメ（木目不明）の後ごく目の細かいカキメ、内面は同心円文当て具痕の上に平行線文当て具痕が見られる。84に比べると非常に薄手である。
- 86 は須恵器甕体部の小片で、23T VI層出土。灰白色を呈して焼成は軟質である。外面は平行線文タタキメ（木目直交）、内面は同心円文当て具痕がみられる。
- 89 は須恵器甕体部の小片で、26T VI層出土。外面は平行線文タタキメ（木目直交）の上からカキメが施され、内面は同心円文当て具痕がみられる。
- 90 は土師器長甕で、27T VI層出土。同一個体の各部位を用いて図上で復元した。体部中位に最大径がある器形と思われる。口縁部は比較的長く弱く外反する。ロクロ不使用で、体部外面は目の粗いタテハケで、内面調整は残りが悪く不明である。
- 91 は土師器小甕で、28T VI層出土。試掘・確認調査出土品のなかでは最も残りがよい個体で、底部を除き口縁～体部の半分近くが残存している。中位に最大径がある体部からくの字形に屈曲して短い口縁部が直線的に延びる。端部は丸くおさめられるのみである。ロクロ不使用で、体部外面は全体が縦方向のケズリで調整されている。内面調整は器面の残りが悪く判然としない。
- 92 はロクロ使用の土師器鍋口縁部で、29T VI層出土。断面三角形の端部が上方に大きくつまみだされる。

第3節 中世以降の陶磁器（図版25・26 写真図版25～27）

A 中世の陶器

試掘・確認調査で珠洲焼が出土している。11Tでは珠洲焼の片口鉢(72)、甕体部(73)、壺または甕の底部(74)、23Tでは壺頸部(87)がある。

72 は珠洲焼片口鉢口縁部で、11T VI層出土。端部は断面三角形を呈する。吉岡編年Ⅱ期ごろか。割れ口の2片が磨滅しており、砥石に転用されている。

73 は外面平行線文タタキメ、内面無文当て具痕をもつ珠洲焼の体部小片で、厚みからは甕と思われる。11T VI層出土。割れ口の一辺に部分的に磨滅がみられ、砥石に転用したとみられる。

74 は珠洲焼壺T種または甕体部下端の鉢形の部分で、11T VI層出土。外傾の度合いからは壺であろうか。外

面にはロクロナデののち左上がりに傾く平行線文のタタキメがみられる。内面はロクロナデが認められるのみで当て具痕はない。残存部の上端が接合部にあっており、内面上端に継ぎ目をなでつけた跡がある。

87は珠洲焼壺T種の口縁部下端～肩部。23T VI層出土。外表面は剥落が多く、内表面は敲打されたように荒れているが、外面は横方向に平行線の刻み目が並ぶタタキメ、内面当て具痕はほぼ無文に見えるが、ごく浅い同心円文かもしれない。

B 近世・近代の陶磁器

試掘・確認調査において出土したものである。基本層序の形成年代などの参考資料として掲載する。3Tでは磁器碗、皿、陶器播鉢があり4点図化した。13・20・24・29Tからも磁器碗・皿が出土している。

61は磁器碗で、3T VI層出土。染付で草花か輪状の文様が描かれている。肥前か。

62は磁器碗で、3T VI層出土。高台外面に染付で2重の圏線がめぐらされる。

63は磁器皿で、3T VI層出土。染付により松葉文が描かれている。18世紀の肥前系か。

64は陶器摺鉢で、3T VI層出土。全面に褐釉がかけられている。口縁端部近くから施した卸目を幅広くナデ消している。19世紀のものか。

78は小ぶりの磁器碗で、13T VI層出土。染付で外面は線描きの文様、内面には口縁直下に2重の圏線がめぐらされる。

80は磁器皿で、20T VI層出土。見込み蛇の目釉剥ぎで、外面腰部から下は露胎である。18世紀の肥前系か。

88は磁器碗で、24T VI層出土。外面には染付で網目状文が描かれる。

93は磁器碗で、29T I層出土。外面は染付で圏線と曲線的な文様が描かれている。

第4節 石製品・木製品

A 石製品 (図版27・28 写真図版27・28)

本発掘調査では全9点(敲石+砥石1点、敲石2点、磨石1点、台石2点、軽石製石製品1点)。出土遺構はPit51のみ。その他に礫7点(38g)が出土している。試掘・確認調査出土3点(砥石2点、敲石1点)も報告する。石材は、角田山塊に産出する、敲打具には在地石材の安山岩・流紋岩・凝灰岩・片岩系の石材が用いられ、砥石は緑色凝灰岩・凝灰岩が用いられている。本発掘資料は古代の所産、確認調査資料は古代あるいは中世の可能性がある。

1) 本発掘調査出土石製品 (1～8)

1は楕円形の礫を用いた敲石+砥石である。端部に敲打痕を残し、正面および側面の2面に線状痕が残る砥面がある。一部被熱している。断面は新しい可能性がある。2は細長い礫を用いた敲石である。上下端に敲打の痕跡が残る。3は楕円形の礫の端部に敲打痕が剥離状に残る。4は円形礫を用いた磨石である。微細な擦痕が両端に残る。5は円礫を用いた比較的小形の台石である。被熱しており、火を受けた後にその影響で、分割して割れた可能性がある。6は大形の円礫を用いた台石である。意図的に周辺を剥離している。被熱が著しく炭化物も付着する。台石としての役割が終わった後に、炉材として用いられたと考えられる。7は流紋岩製の石核である。縄文時代の石器に見られる剥離痕が正面に1面見られる。8は軽石製石製品である。擦痕は見られないが、何らかを擦るなどの用途が考えられる。軽石はおそらく阿賀野川水系の沼沢火山起源の可能性が高く〔立木2014〕、阿野川流域から搬入されたと考えられる。

2) 確認調査出土石製品 (9～11)

9は長方形の礫を用いた砥石である。断面形は長方形である。砥面が5面確認される。法量的に置砥石として用いられたと考える。10は分割した礫あるいは大形の剥片を用いた砥石である。砥面が5面観察される。上端

部が折断されている。砥面はよく使いこまれ、下端部の方は相当磨り減っている。手持砥石として用いられたと考えられる。11 は不正形の礫を用いた敲石である。下端に敲打痕が残る。

B 木製品 (図版 28 写真図版 29)

木製品は本発掘調査 1 区でのみ出土した。2 点あり、2 点図化した。計測値などは別表 5 に記した。いずれも樹種同定を行っており、その詳細は第VI章第 4 節に掲載している。

1 は 1 区 Pit52 に残存していた柱根で、樹種はヤナギ属と同定された。表皮直下とみられる面が残る丸材である。2 は包含層出土の板状の製品で、スギ材を用いている。長方形で厚さが 49mm ある厚手のものである。用途は不明。

面にはロクロナデののち左上がりに傾く平行線文のタタキメがみられる。内面はロクロナデが認められるのみで当て具痕はない。残存部の上端が接合部にあっており、内面上端に継ぎ目をなでつけた跡がある。

87は珠洲焼壺T種の口縁部下端～肩部。23T VI層出土。外表面は剥落が多く、内表面は敲打されたように荒れているが、外面は横方向に平行線の刻み目が並ぶタタキメ、内面当て具痕はほぼ無文に見えるが、ごく浅い同心円文かもしれない。

B 近世・近代の陶磁器

試掘・確認調査において出土したものである。基本層序の形成年代などの参考資料として掲載する。3Tでは磁器碗、皿、陶器播鉢があり4点図化した。13・20・24・29Tからも磁器碗・皿が出土している。

61は磁器碗で、3T III層出土。染付で草花か輪状の文様が描かれている。肥前か。

62は磁器碗で、3T III層出土。高台外面に染付で2重の圏線がめぐらされる。

63は磁器皿で、3T III層出土。染付により松葉文が描かれている。18世紀の肥前系か。

64は陶器摺鉢で、3T III層出土。全面に褐釉がかけられている。口縁端部近くから施した卸目を幅広くナデ消している。19世紀のものか。

78は小ぶりの磁器碗で、13T III層出土。染付で外面は線描きの文様、内面には口縁直下に2重の圏線がめぐらされる。

80は磁器皿で、20T II層出土。見込み蛇の目釉剥ぎで、外面腰部から下は露胎である。18世紀の肥前系か。

88は磁器碗で、24T I層出土。外面には染付で網目状文が描かれる。

93は磁器碗で、29T I層出土。外面は染付で圏線と曲線的な文様が描かれている。

第4節 石製品・木製品

A 石製品 (図版27・28 写真図版27・28)

本発掘調査では全9点(敲石+砥石1点、敲石2点、磨石1点、台石2点、軽石製石製品1点)。出土遺構はPit51のみ。その他に礫7点(38g)が出土している。試掘・確認調査出土3点(砥石2点、敲石1点)も報告する。石材は、角田山塊に産出する、敲打具には在地石材の安山岩・流紋岩・凝灰岩・片岩系の石材が用いられ、砥石は緑色凝灰岩・凝灰岩が用いられている。本発掘資料は古代の所産、確認調査資料は古代あるいは中世の可能性がある。

1) 本発掘調査出土石製品 (1～8)

1は楕円形の礫を用いた敲石+砥石である。端部に敲打痕を残し、正面および側面の2面に線状痕が残る砥面がある。一部被熱している。断面は新しい可能性がある。2は細長い礫を用いた敲石である。上下端に敲打の痕跡が残る。3は楕円形の礫の端部に敲打痕が剥離状に残る。4は円形礫を用いた磨石である。微細な擦痕が両端に残る。5は円礫を用いた比較的小形の台石である。被熱しており、火を受けた後にその影響で、分割して割れた可能性がある。6は大形の円礫を用いた台石である。意図的に周辺を剥離している。被熱が著しく炭化物も付着する。台石としての役割が終わった後に、炉材として用いられたと考えられる。7は流紋岩製の石核である。縄文時代の石器に見られる剥離痕が正面に1面見られる。8は軽石製石製品である。擦痕は見られないが、何らかを擦るなどの用途が考えられる。軽石はおそらく阿賀野川水系の沼沢火山起源の可能性が高く〔立木2014〕、阿野川流域から搬入されたと考えられる。

2) 確認調査出土石製品 (9～11)

9は長方形の礫を用いた砥石である。断面形は長方形である。砥面が5面確認される。法量的に置砥石として用いられたと考える。10は分割した礫あるいは大形の剥片を用いた砥石である。砥面が5面観察される。上端

第VI章 自然科学分析

第1節 概要

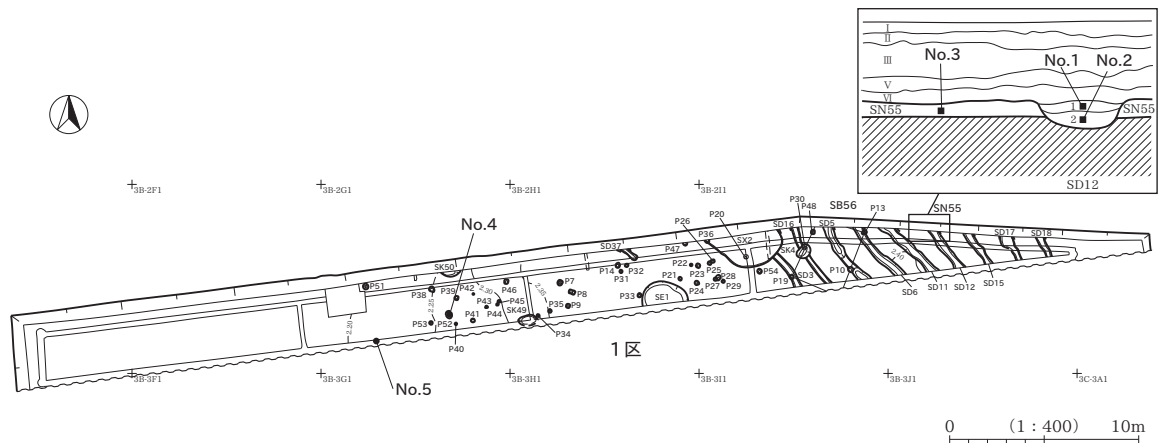
赤鎔砂山遺跡では、検出された遺構や出土遺物の状況に合わせ、自然科学分析を実施した。遺跡や遺構の性格、遺物の年代、遺跡周辺の自然環境や植生等を効果的に把握することを念頭に置き、内容を検討した。それぞれの概要と具体的な目的については下記の通りである。

今回の調査では、連続した9条の溝状遺構が検出された。この溝群は古代の畑跡と推定されることから、農耕の可能性を検討するため、植物珪酸体分析と花粉分析を行った。耕作が行われていた場合、これらの分析によって栽培されていた植物の特定も期待された。また、植物珪酸体分析と花粉分析については赤鎔砂山遺跡周辺の植生と環境の復元も目的とした。試料採取地点は畝間の溝と思われるSD12と、連続する畝としたSN55のうちSD12に隣接する地点である。いずれも調査区北壁から土壌サンプルを採取した。

このほか、木製品の分析も行った。Pit52で柱根が、3B-2G22のVI層からは板状木製品が出土している。これらの木製品について、当時の木材利用の状況と周辺植生を検討するため、樹種同定を行った。Pit52で出土した柱根は、遺構の実年代の把握のため放射性炭素年代測定も行った。

植物珪酸体・花粉分析については、分析対象となる遺構の断面実測図に採取した土壌サンプルの位置を記録した。また、デジタルカメラにて採取状況や採取後の断面などの写真撮影も行った。樹種同定・放射性炭素年代測定試料は、出土した木製品を洗浄後、実測に支障のない範囲を5mm角程度に切り取り、分析試料とした。

これら自然科学分析のサンプルは、採取した地点を第5図に、遺構名や層位などを第3表に示した。



第5図 赤鎔砂山遺跡自然科学分析サンプル採取地点

第3表 赤鎔砂山遺跡自然科学分析一覧表

試料No.	区	遺構	層位	グリッド	時代	分析種別・分析機関			
						第2節 植物珪酸体	第3節 花粉	第4節 樹種	第5節 ¹⁴ C
1	1	SD12	1	3B-2J7	古代	○	○		
2	1	SD12	2	3B-2J7	古代	○	○		
3	1	SN55	1	3B-2J6	古代	○	○		
4	1	Pit52	1	3B-2G19				○	○
5	1	-	VI	3B-2G22				○	

第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

古環境研究所 松田隆二

A はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている〔杉山 2000〕。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である〔藤原・杉山 1984〕。

赤鎔砂山遺跡の発掘調査では、奈良時代から平安時代とされる溝状遺構が検出され、当時の畑跡の可能性が想定された。そこで、当該遺構における農耕の可能性を検討する目的で、植物珪酸体分析を行うことになった。

B 試料

分析試料は、1区 SD12 の1層と2層、1区 SN55 の1層より採取された3点である。遺構の時期は奈良時代から平安時代の層準である。試料採取箇所は第5図に示した。

C 方法

植物珪酸体分析は、ガラスビーズ法〔藤原 1976〕を用いて、次の手順で行った。

- (1) 試料を 105℃ で 24 時間乾燥（絶乾）する。
- (2) 試料約 1g に直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加する。
- (3) 電気炉灰化法（550℃・6 時間）により脱有機物処理を行う。
- (4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）により分散する。
- (5) 沈底法により 20 μm 以下の微粒子を除去する。
- (6) 封入剤（オイキッ）中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400 倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が 500 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料 1g 中の植物珪酸体個数（試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは 1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）を乗じて、単位面積で層厚 1cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる〔杉山 2000〕。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は 2.94（種実重は 1.03）、ヨシ属（ヨシ）は 6.31、ススキ属（ススキ）は 1.24、メダケ節は 1.16、チマキザサ節は 0.75、ミヤコザサ節は 0.30 である〔杉山 2000〕。

D 結果

同定された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属型、タケ亜科ササ属（メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を第4表、第6図に示す。主要な分類群については顕微鏡写真を示す（第7図）。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

1) 1区SD12：1層、2層

1層では、相対的にはススキ属型がやや多く、イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属型、メダケ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が認められた。密度的にはいずれの分類群も低い値である。2層では、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型およびミヤコザサ節型が検出されているが、いずれの分類群も低い密度である。

2) 1区SN55：1層

ヨシ属がやや高い密度である。イネ、キビ族型、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型およびミヤコザサ節型が検出されているが、いずれの分類群も低い密度である。

E 考 察

1) 農 耕 の 検 討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ、ムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）、ジューズダマ属型（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。本遺跡では、これらのうちイネのみがSD12の1層とSN55の1層で検出された。植物珪酸体密度は、いずれも600個/gと低い値である。植物珪酸体分析では、通常、試料1gあたり5,000個以上の密度でイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断される〔杉山2000〕。こうしたことから、これらの地点で水田稲作が行われていた可能性を積極的に肯定することはできない。ただし、上記基準値は水田稲作を前提としたものであり、連作を行えない畑稲作ではこの限りではない。調査地が溝状遺構であること、さらに第3節の花粉分析の結果も踏まえると、畑作の系統（陸稲）による稲作が行われていた可能性も否定できない。なお、イネ以外の栽培植物に由来する植物珪酸体は未検出であることから、ヒエ、アワ、キビ、ムギ類等の雑穀の栽培については言及できない。

イネ科栽培植物の中には検討が不十分なものもあるため、キビ族型などその他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

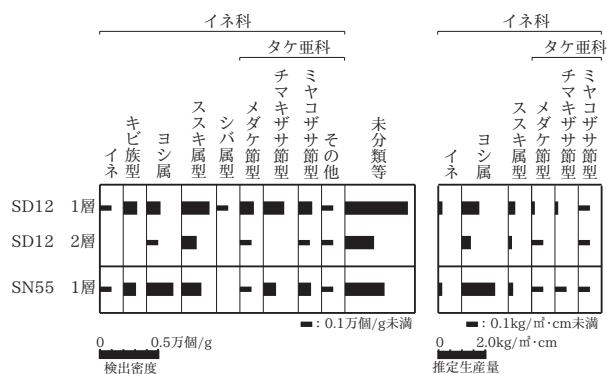
上記以外の分類群では、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。おもな分類群の推定生産量によると、SD12の1層とSN55の1層では量的には少ないものの、おおむねヨシ属が優勢である。これらの結果から、SD12の1層、SN55の1層の

第4表 赤鎗砂山遺跡の植物珪酸体分析結果

分類群（和名・学名）		SD12		SN55
		1層	2層	1層
イネ科 Gramineae (Grasses)				
イネ	<i>Oryza sativa</i>	6		6
キビ族型	Paniceae type	12		11
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	6	23
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	24	13	17
シバ属型	<i>Zoysia</i> type	6		
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)				
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	12	6	6
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	18		11
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	12	6	11
その他	Others	6	6	6
未分類等	Unknown	54	25	34
植物珪酸体総数		162	62	125

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.18		0.17
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.76	0.40	1.44
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.30	0.16	0.21
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.14	0.07	0.07
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.	0.14		0.09
その他	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.04	0.02	0.03

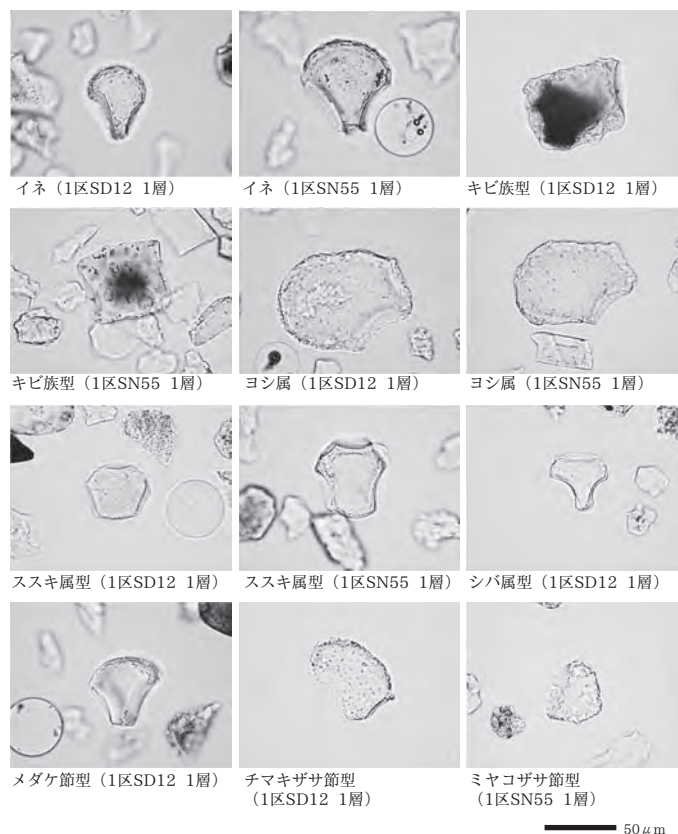


第6図 赤鎗砂山遺跡の植物珪酸体分析結果

堆積当時は、ヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であったと考えられ、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（メダケ節、チマキザサ節など）やススキ属が生育していたと推定される。なお、SD12の2層についてはいずれの植物珪酸体も低密度であることから、イネ科草本植物の生育には適さない環境であったか、土壤の堆積速度が速く、短期間に堆積した可能性が考えられる。

F ま と め

植物珪酸体分析の結果、SD12の1層とSN55の1層でイネが少量検出された。このことから、当時は調査地の周辺で稲作が行われており、そこから何らかの形でイネの植物珪酸体が混入した可能性が考えられた。なお、溝状遺構であることから畑稲作（陸稲）の可能性も積極的ではないが認められた。また、これらの層では、調査地はヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはササ属（メダケ節、チマキザサ節など）やススキ属が生育していたと推定された。



第7図 赤館砂山遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

第3節 花粉分析

古環境研究所 金原正子

A はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。しかし、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、庭園などの狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸上の堆積物が分析に適さないわけではない。

赤館砂山遺跡では、発掘調査において奈良時代から平安時代とされる溝状遺構が検出された。ここでは、当該遺構における植生と環境の推定、さらに農耕を検討する目的で花粉分析を実施した。

B 試料

分析試料は、1区SD12の1層と2層、1区SN55の1層より採取された3点である。試料採取箇所は第5図に示した。

C 方法

花粉の分離抽出は、中村〔中村1967〕の方法をもとに、以下の手順で行った。

(1) 試料から1cm³を採量

- (2) 0.5% リン酸三ナトリウム (12 水) 溶液を加え 15 分間湯煎
- (3) 水洗処理の後、0.25mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- (4) 25% フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置
- (5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎) を施す
- (6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- (7) 沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製
- (8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 300 ~ 1000 倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン (-) で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉 [島倉 1973]、中村 [中村 1980] を参照して行った。イネ属については、中村 [中村 1974・1977] を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

D 結 果

1) 分 類 群

出現した分類群は、樹木花粉 13、樹木花粉と草本花粉を含むもの 1、草本花粉 12、シダ植物孢子 2 形態の計 28 である。これらの学名と和名および粒数を第 5 表に示し、花粉数が 200 個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第 8 図に示す。主要な分類群の顕微鏡写真を第 9 図に示す。同時に寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ、ニシキギ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

a 1 区 SD12 : 1 層、2 層

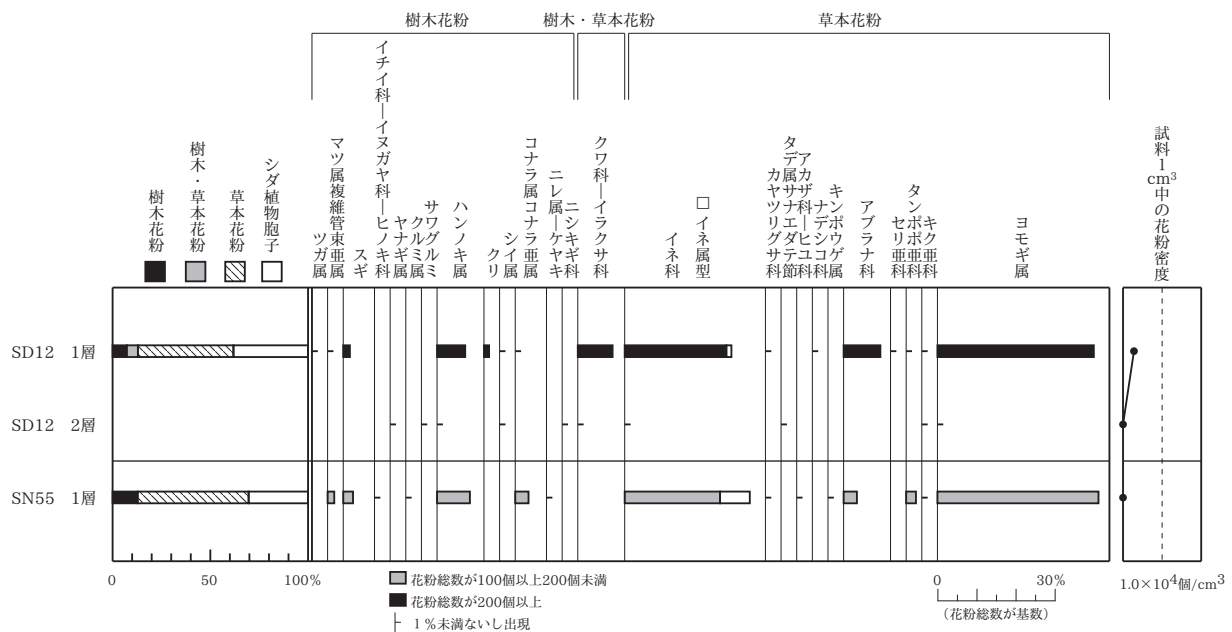
下部より、2 層では密度が極めて低く、花粉はほとんど検出されないが、樹木花粉のハンノキ属、樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科、草本花粉のヨモギ属、イネ科がわずかに出現する。また、シダ植物単条溝孢子がやや多い。上部の 1 層は、樹木花粉が 7%、草本花粉が 49%、シダ植物孢子が 38% を占める。樹木花粉は少なく、ハンノキ属を主に、スギやクリなどが出現する。草本花粉では、ヨモギ属が優占し、次いでイネ科 (イネ属型を含む) の出現率が高く、アブラナ科が伴われる。他に樹木・草本花粉のクワ科-イラクサ科が比較的多い。

b 1 区 SN55 : 1 層

樹木花粉が 13%、草本花粉が 57%、シダ植物孢子が 30% を占める。樹木花粉は少なく、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複雑管束亜属が出現する。草本花粉では、ヨモギ属、イネ科 (イネ属型を含む) の

第5表 赤館砂山遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	SD12		SN55
			1層	2層	1層
Arboreal pollen		樹木花粉			
<i>Tsuga</i>		ツガ属	1		
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属複雑維管束亜属	1		2
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	4		3
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1
<i>Salix</i>		ヤナギ属		1	
<i>Juglans</i>		クルミ属			1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ		1	
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	17	2	10
<i>Castanea crenata</i>		クリ	3		
<i>Castanopsis</i>		シイ属	1	1	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	1		4
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ			1
Celastraceae		ニシキギ科		1	
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	21	3	
Nonarboreal pollen		草本花粉			
Gramineae		イネ科	61	3	29
<i>Oryza type</i>		イネ属型	3		9
Cyperaceae		カヤツリグサ科	1		1
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>		タデ属サナエタデ節		1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科			1
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1		
<i>Ranunculus</i>		キンボウゲ属			1
Cruciferae		アブラナ科	22		4
Apiioideae		セリ亜科	1		
Lactucoideae		タンポポ亜科	2		3
Asteroidae		キク亜科	1	1	1
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	94	4	49
Fern spore		シダ植物孢子			
Monolate type spore		単条溝孢子	142	38	49
Trilate type spore		三条溝孢子	3	2	3
Arboreal pollen		樹木花粉	28	6	22
Arboreal · Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	21	3	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	186	9	98
Total pollen		花粉総数	235	18	120
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	1.4 × 10 ³	1.1 × 10 ²	9.9 × 10 ²
Unknown pollen		未同定花粉	6	1	5
Fern spore		シダ植物孢子	145	40	52
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Stone cell		石細胞	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)
Charcoal · woods fragments		微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体 (Charcoal · woods fragments)		(×10 ⁵)			
未分解遺体片			0.6		
分解質遺体片			18.5	5.0	28.4
炭化遺体片 (微粒炭)					1.7



第8図 赤館砂山遺跡の花粉ダイアグラム

出現率が高く、アブラナ科、タンポポ亜科が低率に伴われる。イネ属型の占める割合はやや高い。

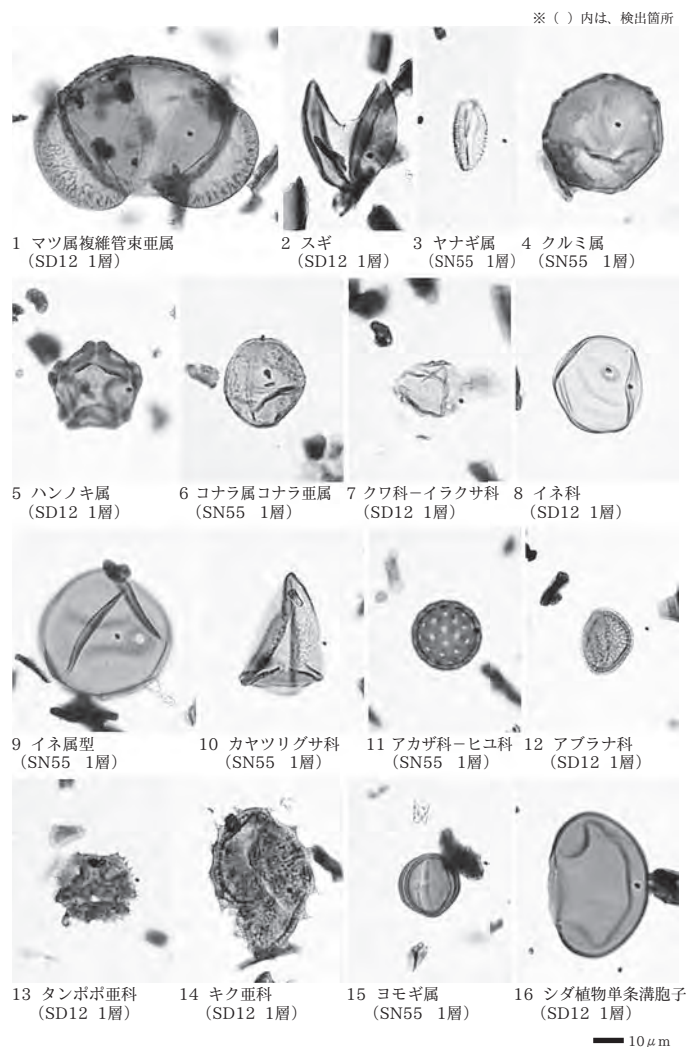
E 花粉分析から推定される植生と環境

1) 1区 SD12 : 1層、2層

周囲は樹木が少なく、草本が優勢である。乾燥した畑地や路傍に生育するヨモギ属を主にイネ科が多く、栽培植物を含むアブラナ科もやや多いため、周囲には畑地が分布し、アブラナ科の栽培植物などが栽培されていたと推定される。SD12 周辺は、イネ科やカナムグラやイラクサ科などの雑草が生育していたと考えられる。水生植物に乏しく、季節的や引水時にのみ流れる溝の可能性が示唆される。樹木はやや遠方に、ハンノキ属が湿地林または湿地性の二次林として分布し、周辺山地にはスギ林が分布していたと推定される。

2) 1区 SN55 : 1層

周囲は樹木が少なく、乾燥した畑地や路傍に生育するヨモギ属を主にイネ科が多く、イネ属型、栽培植物を含むアブラナ科もやや多いため、周囲には畑地と水田の分布が推定される。アブラナ科が散布性のない虫媒花植物であることから、近隣に畑地が分布し、やや遠方に水田の分布が推定されるが、田畑輪換であった可能性もある。周辺山地にはスギ林が分布するが、やや遠方でコナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属の二次林もやや増加していた。ハンノキ属は湿地林または湿地性の二次林として分布していたと考えられる。



第9図 赤鎔砂山遺跡の花粉・胞子

F ま と め

赤鎔砂山遺跡の1区 SD12 : 1層、2層と1区 SN55 : 1層で花粉分析を行った結果、両地点の花粉群集は比較的一致し、周囲は草本が優勢で、畑地と水田の分布が示唆された。畑地はヨモギ属、イネ科、アブラナ科が生育し、アブラナ科の栽培植物（アブラナ、ダイコン、カブなど）が栽培されていたと推定された。SD12 周辺にはカナムグラやイラクサなどのクワ科-イラクサ科の雑草が分布していた。周辺山地にはスギ林が分布するが、コナラ属コナラ亜属、マツ属複維管束亜属、クリの二次林もやや増加し、ハンノキ属の湿地林または湿地性の二次林が低地部に分布していた。

第4節 樹種同定

A はじめに

古環境研究所 金原美奈子・金原裕美子

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、赤鎔砂山遺跡より出土した木製品について樹種同定を行い、当時の木材利用ならびに周辺植生について検討する。

B 試料と方法

試料は、赤鎔砂山遺跡より出土した柱根 (Pit52)、板状木製品 (3B-2G22 VI層) の2点である。遺跡の時期は奈良時代から平安時代である。試料の詳細を第6表に記す。

樹種同定の方法は次のとおりである。試料からカミソリを用いて新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

C 結果

第6表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す (第10図)。以下に同定根拠となった特徴を記す。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 柱根 (Pit52)

小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の特徴からヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は軽軟で、耐朽性、保存性は低く、建築、器具などに用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

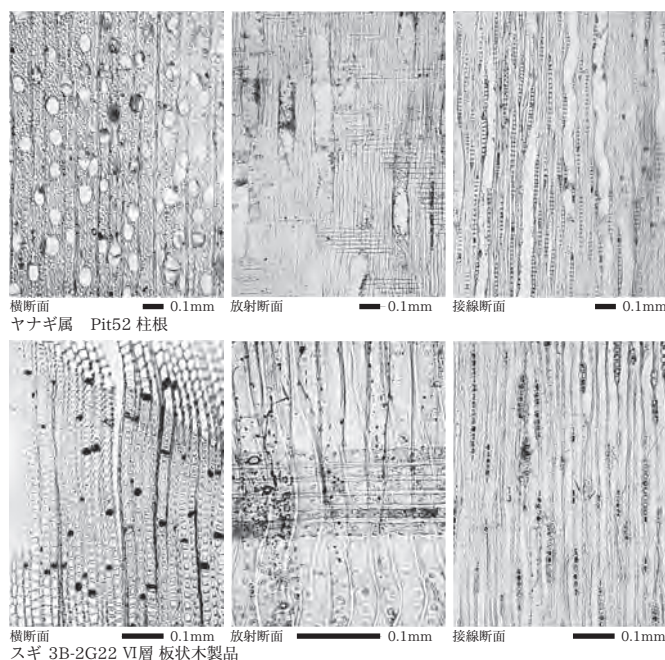
スギ科 板状木製品 (3B-2G22 VI層)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本

第6表 赤鎔砂山遺跡における木材同定結果

試料No.	遺構名	種別	結果 (学名/和名)	
4	Pit52	柱根	<i>Salix</i>	ヤナギ属
5	3B-2G22 VI層	板状木製品	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ



第10図 赤鎔砂山遺跡の木材

特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

D 所 見

同定の結果、赤鎔砂山遺跡の木製品および柱根は、スギとヤナギ属であった。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。日本海側では古くからスギが多用される傾向にある。ヤナギ属は、柱根に利用されている。ヤナギ属は耐朽性・保存性は低く、切削・加工の容易な材である。新潟県内では、青田遺跡や蔵ノ坪遺跡で縄文時代から古墳時代にかけてヤナギ属が柱材として用いられる例がみられるが、律令期以降は柱などの建築部材としての利用は少ない。律令期以降では、ヤナギ属が柱材として利用された例は極めてめずらしい。スギは温帯に広く分布し、特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹で、肥沃で湿潤な土壌を好む樹木である。ヤナギ属は流路沿いや湿地、川辺などの水辺に分布する落葉高木である。どちらの樹木も、遺跡周辺ないし周辺地域に生育し、比較的容易にもたらされたと推定される。

第5節 放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

A 測定対象試料

新潟県新潟市に所在する赤鎔砂山遺跡の測定対象試料は、Pit52から出土した柱根の残存する最外年輪から採取された木片1点である（第7表）。

B 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/ℓ (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第7表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

C 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

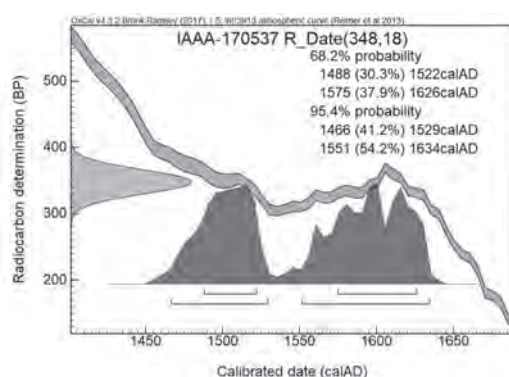
D 算出方法

- (1) δ¹³Cは、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である (第7表)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を

基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 7 表に、補正していない値を参考値として第 8 表に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

(3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第 7 表に、補正していない値を参考値として第 8 表に示した。

(4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ¹⁴C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ¹⁴C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下 1 桁を丸めない ¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース [Reimer et al. 2013] を使い、OxCalv4.3 較正プログラム [Bronk Ramsey 2009] を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第 8 表に示した。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。



第 11 図 赤館砂山遺跡における暦年較正年代グラフ (参考)

E 測定結果

測定結果を第 7・8 表に示す。

試料の ¹⁴C 年代は、 $350 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 (1σ) は、1488~1626cal AD の間に 2 つの範囲で示される。試料の炭素含有率は 57% のおおむね適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第 7 表 赤館砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-170537	No.4	1区 Pit52 1層 3B-2G19	木片 (柱根)	AAA	-28.52 ± 0.24	350 ± 20	95.76 ± 0.22

[IAA登録番号 : #8604]

第 8 表 赤館砂山遺跡における放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ¹⁴C 年代、較正年代)

測定番号	試料名	採取場所	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
			Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170537	No.4	1区 Pit52 1層 3B-2G19	410 ± 20	95.07 ± 0.21	348 ± 18	1488calAD - 1522calAD (30.3%) 1575calAD - 1626calAD (37.9%)	1466calAD - 1529calAD (41.2%) 1551calAD - 1634calAD (54.2%)

[参考値]

第Ⅶ章 総 括

第 1 節 赤縮砂山遺跡の遺構について

赤縮砂山遺跡 1 区では、調査区東側で北西から南東方向に伸びる溝群が検出された。溝群は西から SD3・16・5・6・11・12・15・17・18 の 9 条で、ほぼ等間隔で連続している。この範囲の調査区壁面を精査したところ、溝と溝の間に畝状の高まりが確認されたため、これら一帯を畑跡 (SN55) とし、溝群は畝間の溝とした。調査区が狭小のため畑跡の規模については不明な点が多いが、現況で最も長い SD6 が長さ 3.41m で、両端がさらに調査区外に伸びていることから、ほかの溝も SD6 と同様の長さ以上になると推測される。畑跡の幅は SD3 から SD18 まで 13.72m で、東側は調査区外に続く可能性もある。それぞれの溝の幅は 0.4m 前後、深度は 0.2m 前後で、断面形は弧状を呈する。溝と溝の間隔は約 1m で、畝は高さ 0.08 ～ 0.14m を測る。

この畑跡と重複して掘立柱建物跡を検出した。切り合いによる両者の構築順は不明瞭であるが、溝完掘後に掘立柱建物跡の柱穴を検出できた例もあり、畑跡が新しいと推定される。いずれも古代の土器が出土しており、掘立柱建物廃絶後、それほど期間を置かず畑が作られたと考える。

また、畑跡における栽培植物を検討する目的で、SD11・12 間の畝と SD12 の埋土で土壌の自然科学分析を行ったところ、イネの植物珪酸体が検出された。しかし、検出密度が低く、稲作を行っているとは積極的に肯定できない値とされた。ただし、これは「水田稲作」を基準とした数値で、連作を行えない「陸稲作 (陸稲)」の場合は明確な基準がないとのことである (第Ⅵ章第 2 節)。同地点の花粉分析ではイネ科花粉の出現率が高いことが示されている (第Ⅵ章第 3 節)。これらの結果を踏まえると、畑作による稲の栽培が行われていた可能性は十分に考えられる。また、花粉分析ではイネ科のほかにアブラナ科の花粉が検出された。アブラナ科は散布性のない虫媒花植物であることから、分析試料を採取した畝でアブラナ科が栽培されていた可能性は高いと言える。

SN55 では畑稲作 (陸稲) が行われていた可能性が積極的ではないが認められた。また、アブラナ科の栽培も推定されている。陸稲が連作を行えないことを考慮すると、アブラナ科の栽培植物 (アブラナ・ダイコン・カブなど) と輪作していた可能性も考えられる。

周辺の遺跡では下新田遺跡や林付遺跡で畑跡が確認されている。下新田遺跡 [龍田・長澤ほか 2015] では水田跡とともに畑跡を検出した。調査区は赤縮砂山遺跡同様、狭小であるが、調査区壁面に連続して 20 条以上、約 40m に渡り畝が確認された。同じ調査区の低地部分では水田畦畔が 7 条も確認されていることから、水田と畑が広範囲に広がっていることが想定される。一方、林付遺跡 [相田ほか 2012] では上層で大型の掘立柱建物に隣接して畑跡が検出された。確認された畑は幅約 2m、長さ約 8m で、2 条の小溝で構成されている小規模なものであった。これに井戸や土坑が伴って集落が構成されている。また、下層では平均して幅約 8m、長さ約 15m の畑跡が複数確認されており、一部に小型の掘立柱建物が伴っている。

発掘調査での畑跡の検出形態としては、「水田とともに広がる大規模な畑」と「集落内に散在する小規模な畑」の 2 つのタイプが確認されている [奈良文化財研究所 2010]。下新田遺跡は前者、林付遺跡は後者の様相を示している。赤縮砂山遺跡については、調査区の西側が低地で畑跡は微高地の縁辺に位置しており、居住域からは離れた地点であると推察される。規模については、畑の幅が 13m 以上あり、林付遺跡よりも大きい単位で確認されている。よって、赤縮砂山遺跡は下新田遺跡に近い様相を示しているといえる。下新田遺跡と同じタイプとすれば、今回の調査では畦畔などの遺構は確認できなかったが、赤縮砂山遺跡周辺の低地でも水田が分布していた可能性はあると考えられる。

第 2 節 赤縮砂山遺跡出土の古代土器について

出土量と構成比 古代の土器には須恵器・土師器・黒色土器がある。本発掘調査では 1 区 2 区それぞれから出土したが、2 区では包含層から土師器が破片数で 5 点、2.0g 出土したのみで、大部分が 1 区出土である。1 区では破片数 660 点、7140.0g の出土であり、1・2 区合計した総破片数は 665 点、総重量 7142.0g となる。

1・2 区総破片数、総重量について遺構出土と包含層出土に分けてみると、遺構 9 点 (1.4%)、47.0g (0.7%)、包含層 656 点 (98.6%)、7095.0g (99.3%) であり、大部分包含層出土である。次に種別ごとにみても、須恵器 24 点 (3.6%)、595.0g (8.3%)、土師器 640 点 (96.2%)、6535.0g (91.5%)、黒色土器 1 点 (0.2%)、12.0g (0.2%) となり、点数比、重量比ともに土師器が 9 割を超える。

機能別にみると、食膳具 47 点 (7.1%)、672.0g (9.4%)、煮炊具 614 点 (92.3%)、6419.0g (86.1%)、貯蔵具 4 点 (0.6%)、51.0g (0.7%) となる。口縁部残存値でみると食膳具 24%、煮炊具 76% で約 1 : 3 の比率になる。底残値では食膳具 61.0%、煮炊具 39% で逆転するが、食膳具は底部残存値の方が大きい値を示すので底残値をとり、煮炊具は口残値をとることにすると、食膳具 41%、煮炊具 59%、逆にともに小さい方をとると、偶然かもしれないが、食膳具 42%、煮炊具 58% でほぼ等しい値になる。この約 2 : 3 という比率がこの中では実態に近い値ではないだろうか。

出土分布 試掘・確認調査での古代土器の出土状況を見ると、点数が最も多かったのは 9T で土師器のみ 41 点、23・28T がともに 27 点でそれに次ぐが、23T では須恵器が 4 割弱を占めるのに対し 28T は土師器のみである。以下 11T 13 点、12・27T がともに 10 点で 11・12T では須恵器が約 2 割である。その他のトレンチでは 6 点以下の出土であった。

9・11・12T は近接しており、8T も含めるとこれら 4 トレンチで試掘・確認調査出土古代土器の半数が出土している。また、27・28T からもある程度まとまって出土していることから、遺跡範囲の西よりと北東よりに古代土器分布の中心があり、西側のほうが規模が大きいと言える。須恵器の出土しているのは 11・12・23・26T で、須恵器は中央から西側に多い。このうち 11T・12T では 9 世紀の須恵器無台杯が主体だが、23T では須恵器壺瓶類や甕が多く、器形にも多様性がある。

図版 15 に本発掘調査における小グリッド別の包含層出土土器重量分布図を示したが、1 区の 3B-2G15 に最も集中し、そこを境に調査区の西側に多く、東側は少ないという傾向がみられる。土器が出土した遺構は SK50、SD17、Pit10、Pit39、Pit52 であり、このうち SK50、Pit39、Pit52 が最集中区の 3B-2G15 に隣接する 3B-2G14・19 に近接して存在する。本発掘調査区は試掘・確認調査 8・9・11・12・14T の南に近接しており、試掘・確認調査での遺物出土状況と合致している。

出土土器群の特徴と年代的位置づけ 今回出土した土器群は、ほとんどが包含層出土であり、出土状況から資料体の同時性を検討することはできないが、蒲原郡域の古代土器の編年については春日真実氏の研究〔春日 1999・2015 など〕があり、また近年西蒲区では新道遺跡〔相田 2015〕、下新田遺跡〔龍田ほか 2015〕、島灘瀬遺跡〔遠藤ほか 2016〕、仲歩切遺跡〔龍田 2016〕、秋葉区では沖ノ羽遺跡〔遠藤・脇本ほか 2016〕など 7～8 世紀代の土器の出土例が増えている。それらとの対比で今回出土した土器群の年代について考えてみることにしたい。

図版 22-2 の須恵器無台杯は厚手で丸底のもので、類例を知らないが、金属器模倣の流れで理解できるものとするれば 7 世紀のものである可能性もある。

底部周縁に方形の高台がつく図版 22-5 の須恵器有台杯の類例としては、沖ノ羽遺跡第 24 次調査の 1396、図版 22-8 の須恵器杯蓋のように扁平に近い擬宝珠形つまみをもち径の大きいものも沖ノ羽遺跡第 24 次調査の 896 などに近く、これらはいずれも春日氏のⅢ期（以下～期はすべて春日編年）に位置づけられている。8 は沖ノ羽例よりさらに径が大きい 18cm もあるものなのでさらに古い様相といえる。8 については、つまみの作り方

に特徴があることを先述したが、上越市三角田遺跡〔沢田・細井ほか2006〕のC区下層SD113の1などもつまみの下端を深くえぐるようにしてあり、ある程度の分布をもつ可能性がある。今後注意深く見ていくことで特定の産地や時期の技法としてとらえるかもしれない。

新しい時期のものでは、佐渡小泊窯産とみられる須恵器無台杯がV～VI期、図版22-6の深い有台杯も佐渡小泊窯産とみられ、VI期ごろであろう。

ロクロ不使用の土師器の杯は粘土紐の継ぎ目を残すものが多く、形態に多様性があり個体差も大きいのが特徴である。ロクロ不使用の土師器長甕にも多様な口縁形態がみられる。

〔春日2015〕では、西蒲原地域の土師器煮炊具について、古墳時代後期以来の伝統を受け継いだハケメ調整のA系、須恵器技法のB系、ハケメ調整を多用し口縁部に面をもつC系、外面にヘラケズリを行うもので、関東地方の影響を受けたと考えているD系、底部に木葉痕があるものや外面ヘラミガキを行うもの、頸部に段や沈線があるものなど東北地方の影響をうけたものを一括したE系、北陸以西の近江・畿内などの影響を受けたものを一括したF系に分類して、それらの消長を検討しており、8世紀初頭まではA系のみでB系がみられないこと、E・F系が確認できるのは8世紀前葉までで、それ以後は減少傾向にあること、D系も8世紀前葉までの例が多いが、量的には多くないながらもその後も散発的に出土しているようであることを指摘された。

赤鎔砂山遺跡で出土したロクロ不使用の土師器の調整技法をみるとハケメ調整のものが主体であるが、ヘラケズリのみのものも少なからず存在しており、「く」字状にシャープに屈曲する頸部をもつヘラケズリ調整の小甕(図版26-91)などはD系の例と言える。ヘラミガキを行うものや頸部に段や沈線をもつものはないが、木葉痕をもつ底部は存在するのでE系もある。ロクロ使用の煮炊具口縁部には8世紀代のB系があるかもしれないが、はっきりはしない。

さて、図版23-30の長甕は丸底となるものであるが、ハケメ調整を多用しつつ丸底化にはケズリを併用している点や、口縁部は長く外反して丸くおさめるのみで端部に面を持たない点で、「西古志型煮炊具」を含むC系の定義には含まれないものである。A系の技法と口縁部形態を残しつつ丸底の長甕を実現したものと言える。C系とは時間差または地域差があるということかもしれない。丸底形態をB系の影響と考えるならば、間接的にB系の存在を示すことになり、8世紀前葉以降のものと考えべきであろう。いずれにせよ30が製作された当時、長甕においては丸底にすることが最も重要なポイントで、それぞれがおかれた自然環境・社会的環境のなかで可能な方法でそれを実現していたということではないだろうか。春日氏が指摘するようにB系・C系がともに須恵器窯周辺で作られたと考えられる〔春日2015〕とすれば、当遺跡はB系・C系を出土する遺跡に比べて須恵器窯からは遠い地域であった、または住民が須恵器生産との接点が少ない集団であったということを示す可能性がある。

ロクロ使用の食膳具では、図版24-52の無台椀がVI-2・3期か。図版24-53もVI～VII期とみられる。

ロクロ使用の土師器煮炊具にも口縁端部の作りには単純に外反するもの、つまみ出しが明瞭なものがあり、V～VI期にかけてある程度の時期幅はありそうである。当遺跡でいつから須恵器技法の煮炊具が出現するのか気になるところであるが、その点については今後良好な資料の出土を期待したい。

第3節 赤鎔砂山遺跡の様相について

赤鎔砂山遺跡は、調査面積の制約から掘立柱建物は1棟の検出にとどまるが、調査面積に対して遺構数が定量あり、土器の出土も多いことなどから、古代・中世の集落の一部であったと考えられる。土器の考察(第VII章第2節参照)から、本発掘調査区内での遺跡の存続時期は、古代では、飛鳥・奈良時代(7世紀後半から8世紀前半)、平安時代(9世紀代)の概ね2時期に分離できる。また、検出された遺構は考察(第VII章第1節参照)のとおり、平安時代の掘立柱建物(SB56)が畑(SN55)を切ることからさらに細分される。Pit52に残る柱根の年代測定は、

中世（15～16世紀）の年代値を示している。確認調査で出土した土器には珠洲焼の甕・鉢なども出土しており、遺跡の存続時期は中世まで続くことが確実である。それ以降の土地利用は、断面の土層観察から、近隣を流れる西川由来の洪水堆積物が、幾層も確認でき荒地となっていた時期を経て、近世に再度、圃場として開発され、現代にいたるまで、水田・畑など耕作地に利用されていたようである。

古代と考えられる畑（SN55およびSD12）の花粉分析（第Ⅵ章第3節参照）の結果、アブラナ科（アブラナ・ダイコン・カブなど）の植物が栽培されていたと推定されている。また、植物珪酸体分析（第Ⅵ章第2節参照）の結果、陸稲栽培の可能性もあるが、近隣で水稲栽培が行われた可能性が指摘されている。

遺跡周辺の環境も花粉分析・植物珪酸体分析から明らかになっている。コナラ・クリ・ハンノキなどの広葉樹とスギなどの針葉樹が周辺に分布し、ハンノキなどの湿地性の樹木が確認できることから、旧河道や潟などが周辺に存在した可能性がある。

遺跡周辺では近年、複数の発掘調査が行われており、約1km北に位置する新道遺跡〔相田2015〕では、8世紀前半の遺跡が確認されている。約3km北東の旧鎧潟北岸に位置する大島橋遺跡では7世紀後半の遺物が出土している〔山口・前山1984〕。約4km東の旧鎧潟南岸に位置する島灘瀬遺跡では7世紀代後半から8世紀前半の遺物が出土している〔遠藤・脇本ほか2016〕。8世紀前半と9世紀後半の複数の時期が確認されている集落跡とされる下新田遺跡〔龍田ほか2015〕が、約5km東にあり、東に奈良から平安時代の8世紀後半から9世紀後半の複数時期が確認され、「川井の庄」荘園関連と考えられる林付遺跡〔相田ほか2012〕などの調査成果がある。

飛鳥から平安時代にかけての遺跡が自然堤防上に点々と分布している。特に注目されるのは、この地域では、7世紀後半から8世紀前半の飛鳥時代から奈良時代の遺跡が増加傾向にあることが、確認されていることである〔春日2014〕。同じ遺跡密集地帯の秋葉区沖ノ羽・細池寺道上遺跡群〔遠藤・澤野ほか2016、立木・奈良ほか2017〕などは、複数年の発掘調査を続けてきたが、当該期の遺跡は、ほとんど発見されていない。遺跡立地的な違いの問題も考えられるが、極端な現象である。当期は、文献史学の成果などを参考にすると「淳足柵」が機能していた時期にあたる〔小林2010〕。前代の古墳時代後期の遺跡数も極端に少ない。沖積平野側に当期の人々が開発・進出におもむいたのは、この社会的な変化が大きいと考えられる。また、十分に解明されていないが、他地域からの移民を養うための開発や、古代の官道がこの地域にありそこを中心に開発が進んだ側面も考えられようか。内水面交通網も潟湖や小河川が交通手段として用いられていることなども考慮に入れると赤縮砂山遺跡は当時の交通の要所的な場所であったのかもしれない。今後、大規模な遺跡調査などで様相が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- ア 相田泰臣 2015 「Ⅱ 2 (4) 新道遺跡 第 1 次調査」『新潟市文化財センター年報』第 2 号 新潟市文化財センター
相田泰臣ほか 2012 『林付遺跡 第 2 次調査 -新潟市立潟東南小学校体育館建設工事に伴う林付遺跡第 2 次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
相田泰臣・渡邊朋和ほか 2014 『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書-第 15・16・17・18・19 次調査-』新潟市教育委員会
相田泰臣・前山精明 2003 『菖蒲塚古墳・隼人塚古墳- 2002 年度確認調査の概要』巻町教育委員会
相田泰臣・前山精明 2005 『菖蒲塚古墳・隼人塚古墳Ⅱ- 2003 年度確認調査の概要』巻町教育委員会
甘粕 健・小野 昭ほか 1993 『越後山谷古墳』巻町教育委員会
- ウ 宇野隆夫 1991 『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』桂書房
宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集 国立歴史民俗博物館
- エ 江口友子・小濱 亨ほか 2000 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 100 集 北陸自動車道黒埼パーキングエリア改良工事関係発掘調査報告書 釈迦堂遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
遠藤恭雄・脇本博康ほか 2016 『島灘瀬遺跡 第 5 次調査-県営ほ場整備事業(経営体育成型)巻東町地区に伴う島灘瀬遺跡第 5 次発掘調査報告書-』新潟市教育委員会
- カ 柿田祐司 2001 「須恵器甕の叩き目から」『北陸古代土器研究』第 9 号 北陸古代土器研究会
春日真実 1991 「古代佐渡小泊窯における須恵器の生産と流通」『新潟考古学談話会』第 8 号 新潟考古学談話会
春日真実 1995 「古代集落の展開」『研究紀要』(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
春日真実 1997a 「越後・佐渡における 9 世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第 6 号 北陸古代土器研究会
春日真実 1997b 「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第 7 号 北陸古代土器研究会
春日真実 1998 「中組遺跡出土の緑釉陶器について」『町史研究 よしだ』第 2 号 吉田町教育委員会
春日真実 1999 「第 IV 章 古代 第 2 節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
春日真実 2000 「考古編 第 5 章 まとめ」『吉田町史 資料編 1 考古・古代・中世』吉田町
春日真実 2003 「消費遺跡出土佐渡小泊産須恵器のロクロ回転方向-越後出土の資料を中心に」『研究紀要』第 4 号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について-「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に-」『新潟考古』第 16 号 新潟県考古学会
春日真実 2006 「越後における 7 世紀の土器編年」『新潟考古』第 17 号 新潟県考古学会
春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』第 18 号 新潟県考古学会
春日真実 2009 「越後における古代掘立柱建物」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
春日真実 2013 「古代集落の動体-越後を事例として-」『新潟考古学談話会 2013 Summer Meeting』資料 新潟考古学談話会
春日真実 2014 「古代遺跡の動態-西蒲原地域を事例として-」『郷土史燕』第 7 号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
春日真実 2015 「古代西蒲原地域の土師器煮炊具」『郷土史燕』第 8 号 燕市教育委員会・燕市郷土史研究会連合会
春日真実・笹澤正史 1999 「越後・佐渡の様相」『北陸古代土器研究』第 8 号 北陸古代土器研究会
春日真実ほか 2004 『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟県古代土器研究会
加藤 学・荒川隆史 1999 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 93 集 上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ 和泉 A 遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
金子拓男ほか 1983 『緒立遺跡発掘調査報告書』黒埼町教育委員会
川上貞雄 1997 『和納館遺跡』岩室村教育委員会
川上貞雄・木村宗文・鈴木郁夫 1989 『新津市史 資料編第 1 巻 原始・古代・中世』新津市
川上貞雄ほか 1991 『笹神村文化財調査報告 8 発久遺跡発掘調査報告書』笹神村教育委員会
川村浩司 2000 「上越市の古墳時代土器の変遷-関川右岸下流域を中心に-」『上越市史研究』第 5 号 上越市
川村 尚 2002 「佐渡郡羽茂町小泊窯跡」『新潟県考古学会第 14 回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- キ 北野博司 1999 「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第 8 号 北陸古代土器研究会
木村宗文 1989 「資料解説-古代越後国と蒲原郡」『新津市史 資料編 第 1 巻 原始・古代・中世』新津市

- ク 桑原正史 1994 「第二編 第一章 古代の蒲原地方」『巻町史 通史偏上』 巻町
- コ 小池邦明・藤塚 明 1993 『新潟市の場遺跡 的場土地区画整理事業用地内発掘調査報告書』 新潟市教育委員会
 小林昌二 2010 「古代越後の蒲原・沼垂郡—新潟市西区の四十石遺跡にふれて—」『新潟史学』63号 新潟史学会
 小林 存 1952 『新津市誌』 新潟市
 古俣近建 1989 『ありし日の鎧潟』 新潟県教育委員会
 小山正忠・竹原秀雄 1967 『新版 標準土色帖』 農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修
- サ 斎藤順作 1967 『三潟水抜一件<前>』巻町双書 第7集 巻町役場
 斎藤順作 1968 『三潟水抜一件<後>』巻町双書 第17集 巻町役場
 斎藤義信 1986 「新津市」『日本歴史地名大系 15 新潟県の地名』 平凡社
 坂井秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通—8～10世紀を中心として—」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
 坂井秀弥 1989 「北陸型土師器長甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 新潟考古学談話会
 坂井秀弥 1994 「庁と館、集落と屋敷—東国古代遺跡における館の形成—」『城と館を掘る・読む—古代から中世へ—』山川出版社
 坂井秀弥 1996 「水辺の古代官衛遺跡—越後平の内水面・舟運・漁業」『越と古代の北陸』 名著出版
 坂井秀弥 1999 「第IV章 古代 第1節 総論」『新潟県の考古学』 高志書院
 坂井秀弥 2008 『古代地域社会の考古学』 同成社
 坂井秀弥ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
 坂井秀弥ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第40集 北陸自動車道 上越市春日・木田地区発掘調査報告書Ⅱ 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会
 坂井秀弥ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟県国道工事事務所
 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991 「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号 新潟県考古学会
 坂上有紀 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 磐越自動車道関係発掘調査報告書 上浦遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 笹澤正史 1999 「第4章 古代 第4節 生産と流通 第2項 窯業」『新潟県の考古学』新潟県考古学会編 高志書院
 笹澤正史 2001 「須恵器瓶類の口縁頸部接合痕跡」『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会
 笹澤正史 2003 「第5章 古代 第1節 時代概説」『上越市史 資料編2 考古』 上越市
 笹澤正史 2004 「第IV章 各論 1 須恵器生産の概要」『越後阿賀北地域の古代土器様相』 新潟古代土器研究会
 佐藤友子ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第187集 一般国道7号線万代橋下流橋関係発掘調査報告書 近世新潟町跡広小路堀地点』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 澤野慶子 2018 「赤館砂山遺跡」『平成29年度 新潟市遺跡発掘調査速報会 最新調査成果が語る新潟市の歴史』新潟市文化財センター
- タ 高橋与右エ門 1984 「須恵器大甕にみられる「放射状当て具痕」について」『紀要』Ⅳ (財)岩手県埋蔵文化財センター
 武田健次郎・青山 晃・内田亜紀子 1999 「越中における須恵器貯蔵具の様相」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
 龍田優子 2016 「Ⅱ2 (10) 仲歩切遺跡 第3次調査及び工事立会」『新潟市文化財センター年報』第3号 新潟市文化財センター
 龍田優子ほか 2015 『下新田遺跡 第6・8・9次調査—県営ほ場整備事業(経営体育成基盤整備型)道上地区に伴う第3・5・6次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会
- ツ 立木宏明・伊比博和ほか 2013 『峰岡城山遺跡 第2次調査—城山屋内体育施設造成工事に伴う峰岡城山遺跡第2次発掘調査報告書—』 新潟市教育委員会
- テ 出越茂和 1999 「北加賀・能登地方の古代須恵器貯蔵具」『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会
 寺村光晴 1960 「越後六地山遺跡」『上代文化』30 国学院大学考古学会
 寺崎裕介・高濱信行ほか 2000 「味方排水機場遺跡調査報告書」『味方村誌 通史偏』 味方村

- ナ 中村孝三郎 1960 「西蒲原郡中野小屋村曾和弥生式六地山遺跡」『日本考古学年報』9 日本考古学協会
奈良文化財研究所 2010 「第V章 遺構の発掘 第9節 生産関連遺構3 農業関連ほかの遺構 A畑」『発掘調査のてびきー
集落遺跡発掘編ー』 同成社
- ニ 新潟県 1983 『新潟県史 資料編4 中世二 文書編Ⅲ』
新潟県 1984 『新潟県史 資料編5 中世三 文書編Ⅳ』
新潟県教育委員会・巻町教育委員会 1966 『鎧潟：鎧潟干拓地域民俗資料緊急調査報告書』
新潟古砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡－新潟砂丘の形成史Ⅰ－」『第四紀研究』13-2 日本第四紀学会
新潟市国際文化部歴史文化課 2007 『新 新潟市歴史双書2 新潟市の遺跡』 新潟市
新潟市史編さん原始古代中世史会 1994 『新潟市史 資料編1 原始 古代 中世』 新潟市
- フ 藤塚 明・小池邦明・渡邊朋和 1987 『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』 新潟市教育委員会
- ホ 北陸農政局鎧潟干拓建設事業所 1968a 『鎧潟干拓技術誌』
北陸農政局鎧潟干拓建設事業所 1968b 『鎧潟干拓図集』
細井佳浩 2014 「新潟県における古代の「畝状小溝」（畠）について－越後国域の検出事例から－」『三面河流域の
考古学』第12号 奥三面を考える会
細野高伯・伊比博和ほか 2012 『大沢谷内遺跡Ⅱ 第7・9・11・12・14次調査－一般国道403号小須戸田上バイパス
整備工事に伴う大沢谷内遺跡第2・4・6・7・9次発掘調査報告書ー』 新潟市教育委員会
- マ 前山精明 1994 『御井戸遺跡』『巻町史 資料編1 考古』 巻町
前山精明・相田泰臣 2002 『南赤坂遺跡－縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査ー』 巻町教育
委員会
前山精明・相田泰臣 2003 『御井戸遺跡Ⅰ－2002年度確認調査の概要ー』 巻町教育委員会
前山精明・相田泰臣 2004 『御井戸遺跡Ⅱ－2003年度確認調査の概要ー』 巻町教育委員会
前山精明ほか 2015 『峰岡上町遺跡 第3次調査－国道460号線改良工事に伴う峰岡上町遺跡第3次発掘調査報告書ー』
新潟市教育委員会
前山精明・山口栄一 1985 『城願寺跡・坊ヶ入墳墓』 巻町教育委員会
- モ 望月精司 1997 「第2章 各地域の土師器生産と土師器焼成遺構 第4節 北陸」『古代の土師器生産と焼成遺構』
真陽社
- ヤ 山口栄一 1994 「Ⅱ考古資料 2各時代の概観 5中世」『巻町史 資料編1 考古』 巻町
山口栄一・前山精明 1984 「西川町の遺跡 3.大島橋遺跡」『西川町史考 その12「史料・民具の紹介と古老の話」』
西川町教育委員会
- ヨ 横山勝榮・竹田和夫ほか 1987 『新潟県中世城跡等分布調査報告書』 新潟県教育委員会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉田町 2000 「第2章 中世資料」『吉田町史 資料編1 考古 古代 中世』
米沢 康 1965 「大化前代における越の史的位罫」『信濃』17-1 信濃史学会
米沢 康 1980 「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』32-6 信濃史学会
- ワ 渡邊ますみ 1993 『緒立A遺跡確認調査報告書』 黒埼町教育委員会
渡邊ますみほか 1994 『緒立C遺跡発掘調査報告書』 黒埼町教育委員会
渡邊ますみ 1998 「第二章 原始・古代－緒立遺跡－ 第三節 出土遺物 第三項 奈良・平安時代の遺物」『黒埼町史資
料編1 原始・古代・中世』 黒埼町
渡邊ますみほか 2009 『駒首潟遺跡第3・4次調査－大型小売店舗建設に伴う駒首潟遺跡第3・4次発掘調査報告書ー』
新潟市教育委員会
渡邊ますみ・奈良貴史ほか 2012 『四十石遺跡 第2調査－（仮称）新赤塚埋立処分地整備工事に伴う四十石遺跡第2
次発掘調査報告書ー』 新潟市教育委員会

第Ⅵ章 自然科学分析参考文献

- イ 伊東隆夫・山田昌久 2012 『木の考古学』 雄山閣 p.449
- カ 金子清俊・谷口博一 1987 「線形動物・扁形動物」『医動物学 新版臨床検査講座』8 医歯薬出版 p.9-55
金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻 古代資料研究の方法』 角川書店 p.248-
262
金原正明 1999 「寄生虫」『考古学と動物学 考古学と自然科学2』 同成社 p.151-158

- 金原正明・金原正子 1992 「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－』奈良国立文化財研究所 p.14-15
- 金原正明・金原正子 1993 「石棺内の花粉分析および消化管内残渣の分析」『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所 p.18-26
- 金原正明・金原正子・松井 章 2012 「寛永寺徳川將軍親族遺体に由来する環境考古学的分析」『東叡山寛永寺徳川將軍家御裏方靈廟第三分冊』寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編 吉川弘文館 p.428-440
- 金原正明・金原正子 2015 「堆積物と植物遺体の総合的研究」『日本文化財科学会第32回大会研究発表要旨集』p.146-147
- サ 佐伯 浩・原田 浩 1985 「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.20-48
- 佐伯 浩・原田 浩 1985 「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p.49-100
- シ 島倉巳三郎 1973 「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集』60p
- 島地 謙・伊東隆夫 1988 『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p.296
- ス 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラント・オパール)」『考古学と植物学』同成社 p.189-213
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20 p.81-92
- 鈴木三男・小川とみ・能城修一 2004 「青田遺跡出土木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡 関連諸科学・写真図版編』新潟県教育委員会 p.53-70
- ナ 中村 純 1967 『花粉分析』古今書院 p.82-102
- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」『第四紀研究』13 p.187-193
- 中村 純 1977 「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 p.21-30
- 中村 純 1980 「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』91p
- ハ バリノ・サーヴェイ 2002 「蔵ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 一般国道7号中条黒川バイパス関係発掘調査報告書 蔵ノ坪遺跡』新潟県教育委員会 p.45-59・80-83
- フ 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29
- 藤原宏志・杉山真二 1984 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17 p.73-85.
- ヤ 山田昌久 1993 『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 植生史研究特別第1号』植生史研究会 p.242
- B Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
- P Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard 1992 Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*,19, p.231-245.
- R Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55 (4), 1869-1887
- S Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon*19 (3), 355-363

別表1 遺構計測表

図版 No.	写真図版 No.	区	遺構		グリッド	時代	確認面	主軸方位	規模 (m)					底面標高 (m)	形態		埋土	重複関係	遺物		遺物図版 No.	備考
			種別	番号					上端		下端		深度		平面	断面			遺物の有無	遺物の種類		
									長軸	短軸	長軸	短軸										
13・16	5	1	SE	1	3B-2H14・15・19・20	古代	Ⅶ	N-81°-W	2.42	(1.23)	2.03	(1.02)	(0.25)	2.10	楕円形	—	4					
14・17	5	1	SK	4	3B-2I8	古代	Ⅶ	N-36°-E	0.80	0.59	0.58	0.26	0.11	2.24	楕円形	弧状	1	>SD16、Pit30				
13・17	5	1	SK	49	3B-2H16	古代	Ⅶ	N-88°-E	(1.04)	(0.55)	(0.76)	(0.40)	0.12	2.24	楕円形	弧状	1					
13・17	6	1	SK	50	3B-2G14	古代	Ⅶ	N-84°-E	(1.08)	(0.28)	(0.64)	(0.18)	0.16	2.15	楕円形	弧状	1		○ 黒色土器無台碗・土師器長囊	22		
13・17	6	1	SX	2	3B-2I6～8・11・12	古代	Ⅶ	N-49°-W	(3.25)	2.75	(3.98)	(1.72)	0.07	2.30	不整形	弧状	1	>SD3、Pit20・36				
13・14	6	1	SD	3	3B-2I7・8・13	古代	Ⅵ下	N-42°-W	(2.10)	0.40	(2.10)	0.22	0.05	2.31	—	弧状	1	>Pit19、<SX2			SN55	
14・18	6・7	1	SD	5	3B-2I9・14・15	古代	Ⅵ下	N-35°-W	(3.37)	0.49	(3.37)	0.26	0.25	2.17	—	弧状	2	>Pit10			SN55	
14・18	6・7	1	SD	6	3B-2I10・15、2I6・11	古代	Ⅵ下	N-40°-W	(3.41)	0.50	(3.41)	0.25	0.18	2.30	—	弧状	2	>Pit13			SN55	
14・18	7	1	SD	11	3B-2I10、2I6・7・11・12	古代	Ⅵ下	N-45°-W	(3.30)	0.52	(3.30)	0.40	0.26	2.24	—	弧状	2				SN55	
14・18	7	1	SD	12	3B-2J7・12・13	古代	Ⅵ下	N-37°-W	(2.47)	0.50	(2.47)	0.35	0.20	2.30	—	弧状	2				SN55	
14・18	7	1	SD	15	3B-2J7・8・13	古代	Ⅵ下	N-35°-W	(1.96)	0.44	(1.96)	0.29	0.20	2.30	—	弧状	2				SN55	
14・18	6	1	SD	16	3B-2I8・13・14	古代	Ⅵ下	N-38°-W	(3.46)	0.33	(3.46)	0.22	0.14	2.26	—	弧状	2	<SK4			SN55	
14・18	7・8	1	SD	17	3B-2J8・9・14	古代	Ⅵ下	N-24°-W	(1.37)	0.67	(1.37)	0.55	0.18	2.32	—	弧状	2		○ 土師器長囊		SN55	
14・18	7・8	1	SD	18	3B-2J9・10	古代	Ⅵ下	N-27°-W	(1.16)	0.36	(1.16)	0.26	0.22	2.25	—	弧状	2				SN55	
13・17	8	1	SD	37	3B-2H8・9		Ⅵ	N-50°-W	(0.90)	0.30	(0.79)	0.14	0.31	2.23	—	半円状	2					
13・18	9	1	Pit	7	3B-2H12	古代	Ⅶ	N-29°-E	0.29	0.26	0.11	0.09	0.12	2.26	円形	階段状	2					
13・18	10	1	Pit	8	3B-2H12	古代	Ⅶ	N-72°-W	0.34	0.22	0.11	0.11	0.30	2.08	長方形	階段状	2					
13・18	10	1	Pit	9	3B-2H17	古代	Ⅶ	N-7°-E	0.22	0.21	0.11	0.11	0.10	2.28	方形	半円状	1					
14・20	9	1	Pit	10	3B-2I14・15	古代	Ⅶ	N-48°-W	0.31	0.26	0.15	0.14	0.22	2.12	円形	U字状	1	<SD5	○ 土師器無台碗		SB56	
14・20	9	1	Pit	13	3B-2I10	古代	Ⅶ	N-60°-E	0.27	0.20	0.14	0.11	0.10	2.26	楕円形	弧状	1	<SD6			SB56	
13・18	10	1	Pit	14	3B-2H13	古代	Ⅶ	N-20°-E	(0.27)	0.23	0.13	0.12	0.24	2.11	楕円形	U字状	2					
13・14	9	1	Pit	19	3B-2I13	古代	Ⅶ	N-5°-W	0.25	0.23	0.14	0.12	0.26	2.09	円形	U字状	2	<SD3			SB56	
13・17	6	1	Pit	20	3B-2I7	古代	Ⅶ	N-52°-W	(0.25)	(0.24)	0.11	0.10	0.15	2.20	円形	半円状	3	<SX2				
13・18	11	1	Pit	21	3B-2H15	古代	Ⅶ	N-22°-W	0.21	0.18	0.12	0.09	0.03	2.32	円形	弧状	1					
13・18	11	1	Pit	22	3B-2H15	古代	Ⅶ	N-23°-W	0.14	0.14	0.08	0.07	0.13	2.24	円形	U字状	1					
13・18	11	1	Pit	23	3B-2H15、2I11	古代	Ⅶ	N-25°-W	0.25	0.23	0.12	0.11	0.12	2.22	円形	半円状	1					
13・18	11	1	Pit	24	3B-2H15、2I11	古代	Ⅶ	N-65°-W	0.25	0.23	0.14	0.10	0.08	2.26	楕円形	半円状	1					
13・18	11・12	1	Pit	25	3B-2I11	古代	Ⅶ	N-29°-W	0.21	0.20	0.13	0.08	0.08	2.26	円形	半円状	1	>Pit26				
13・18	11・12	1	Pit	26	3B-2I6・11	古代	Ⅶ	N-77°-E	0.22	0.17	0.12	0.10	0.08	2.28	方形	半円状	1	<Pit25				
13・19	12	1	Pit	27	3B-2I11	古代	Ⅶ	N-56°-E	0.20	0.18	0.09	0.07	0.08	2.30	円形	弧状	1	>Pit28				
13・19	12	1	Pit	28	3B-2I11	古代	Ⅶ	N-9°-E	0.30	0.23	0.13	0.11	0.13	2.24	楕円形	半円状	2	<Pit27				
13・19	12	1	Pit	29	3B-2I11	古代	Ⅶ	N-10°-W	0.18	0.17	0.09	0.07	0.05	2.32	円形	弧状	1					
14・20	5・9	1	Pit	30	3B-2I8	古代	Ⅶ	N-66°-W	0.22	0.22	0.12	0.08	0.28	1.95	円形	U字状	1	<SK4			SB56	
13・19	10	1	Pit	31	3B-2H13	古代	Ⅶ	N-15°-W	0.18	0.16	0.09	0.09	0.09	2.27	円形	台形状	1					
13・19	10	1	Pit	32	3B-2H14	古代	Ⅶ	N-67°-E	0.20	0.17	0.11	0.09	0.04	2.32	楕円形	弧状	1					
13・19	12	1	Pit	33	3B-2H14	古代	Ⅶ	N-11°-W	0.23	0.21	0.11	0.10	0.13	2.23	円形	V字状	1					
13・19	12	1	Pit	34	3B-2H16	古代	Ⅶ	N-49°-W	0.17	0.15	0.10	0.08	0.12	2.24	円形	半円状	1					
13・19	13	1	Pit	35	3B-2H17	古代	Ⅶ	N-6°-W	0.20	0.20	0.10	0.09	0.11	2.25	円形	半円状	1					
13・17	6	1	Pit	36	3B-2I6	古代	Ⅶ	N-4°-W	(0.16)	(0.24)	(0.10)	(0.17)	0.15	2.18	円形	箱状	1	<SX2				
13・19	13	1	Pit	38	3B-2G13	古代	Ⅶ	N-48°-W	(0.32)	0.25	0.17	0.14	0.38	1.86	楕円形	U字状	2					
13・19	13	1	Pit	39	3B-2G14・19	古代	Ⅶ	N-10°-E	0.22	0.22	0.14	0.11	0.10	2.20	方形	半円状	1		○ 土師器長囊			
13・19	13	1	Pit	40	3B-2G19	古代	Ⅶ	N-9°-W	0.14	0.13	0.09	0.07	0.05	2.26	円形	弧状	1					
13・19	14	1	Pit	41	3B-2G19・20	古代	Ⅶ	N-85°-W	0.22	0.20	0.14	0.14	0.10	2.20	円形	半円状	1					
13・19	14	1	Pit	42	3B-2G15	古代	Ⅶ	N-4°-W	0.10	0.09	0.06	0.04	0.09	2.19	円形	半円状	1					
13・19	14	1	Pit	43	3B-2G20	古代	Ⅶ	N-50°-E	0.15	0.14	0.06	0.06	0.05	2.24	円形	弧状	1					
13・19	14	1	Pit	44	3B-2G20	古代	Ⅶ	N-38°-E	0.15	0.13	0.08	0.08	0.04	2.24	円形	弧状	1					
13・19	14	1	Pit	45	3B-2G20	古代	Ⅶ	N-60°-W	0.16	0.15	0.07	0.06	0.03	2.25	円形	弧状	1					
13・19	15	1	Pit	46	3B-2G15	古代	Ⅶ	N-1°-E	0.24	0.22	0.15	0.12	0.18	2.15	長方形	半円状	2					
13・16	15	1	Pit	47	3B-2H10	古代	Ⅶ	N-7°-W	(0.16)	(0.21)	(0.11)	(0.13)	0.13	2.24	円形	半円状	1					
14・19	15	1	Pit	48	3B-2I8・9	古代	Ⅶ	N-3°-E	0.24	0.20	0.12	0.10	0.08	2.24	方形	半円状	1					
12・19	15	1	Pit	51	3B-2G12	古代	Ⅶ	N-23°-W	0.31	0.28	0.10	0.09	0.11	2.10	円形	階段状	1		○ 石製品			
13・19	15・16	1	Pit	52	3B-2G19	中世以降	Ⅵ以上	N-10°-W	(0.41)	0.32	(0.15)	(0.13)	0.30	2.14	楕円形	U字状	2		○ 土師器無台碗・長囊、柱根			
13・14	16	1	Pit	54	3B-2I12	古代	Ⅶ	N-12°-W	0.26	0.24	0.13	0.11	0.12	2.23	円形	半円状	1					
15・21	18	2	SX	1	3C-1C6～9・11～13	古代	Ⅶ	N-85°-E	(5.33)	(0.88)	(4.90)	(0.78)	0.20	2.34	不整形	弧状	1					
15・21	19	2	Pit	2	3C-1C11	古代	Ⅶ	N-10°-W	0.17	0.16	0.09	0.07	0.07	2.39	円形	台形状	1					

別表2 掘立柱建物計測表

図版 No.	写真図版 No.	区	グリッド	確認面	時期	棟方向	主軸方位	構造	梁行 (m)	桁行 (m)	床面積 (㎡)	梁間柱間 (m)		桁行柱間 (m)		
												計測Pit名	計測値	計測Pit名	計測値	
SB56	14・20	8・9	1	3B-2I8～10・13～15	Ⅶ	古代	南北	N-25°-E	側柱	(2.70)	(3.64)	9.83	Pit30-Pit10	2.70	Pit13-Pit10	2.11
														Pit30-Pit19	1.67	

別表 3 土器・陶磁器観察表

図版 No.	写真図版 No.	報告 No.	出土位置		層位	種別	器種	分類	法量 (cm)			径高指数	底径指数	胎土		産地	色調		焼成	手法				遺存率 (/36)			付着物		時代	時期・年代	備考					
			区	遺構名					グリッド	口径	底径			器高	状態		含有物	外面		内面	外面	工具痕	内面	工具痕	底部	回転	口縁部	底部				全体	内面	外面		
																																			胎土	色調
22	20	1	1	SK50	3B-2G14	1	黒色土器	無台碗		-	-	-	-	精	石英・白色凝灰石		7.5YR4/2 灰褐	N3/0 暗灰	酸化	ロクロナデ、ロクロケズリ→ミガキ又はナデ		ミガキ							-	-	1			平安	春日VI期か	内面黒色処理
22	20	2	1	-	3B-2G18	VI	須恵器	無台杯	A	13.4	4.4	5.0	-	精	白色凝灰岩・海綿骨針	D	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	酸化	ロクロナデ、ケズリ→ナデ		ロクロナデ		ケズリ→ナデ			19	36	20			飛鳥～奈良	春日I～II期か	器種、蓋か鉢?		
22	20	3	1	-	3B-2H12 3B-2H16	VI	須恵器	無台杯		14.0	-	-	-	普通	長石・チャート・白色凝灰石	Cか	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				9	-	3			平安	春日V期頃か				
22	20	4	1	-	3B-2G17	VI	須恵器	無台杯		11.8	-	-	-	精	長石・白色凝灰石	Bか	2.5Y6/1 黄灰	10YR7/3 にぶい黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				2	-	1			平安	春日V期頃か	焼き甘いが小泊?			
22	20	5	1	-	3B-2F19 3B-2F20	VI	須恵器	有台杯	A	-	10.2	-	-	精	白色凝灰石	D	N7/0 灰白	N8/0 灰白	還元	ロクロナデ、ロクロケズリ		ロクロナデ		ヘラ切り後ナデ	不明	-	13	6			平安	春日V期か				
22	20	6	1	-	3B-2G18 3B-2G19	VI	須恵器	有台杯	B	14.7	7.7	6.6	-	普通	白色凝灰石	B	N7/0 灰白	N7/0 灰白	還元	ロクロナデ		ロクロナデ		回転ヘラ切り→後ナデ		2	23	10			平安	春日V2期頃か				
22	20	7	1	-	3B-2G16	VI	須恵器	甕		-	-	-	-	普通	長石・白色凝灰石	Bか	N5/0 灰	N5/0 灰	還元	平行タタキ	He	同心円当て具痕		D		-	-	1			平安	春日V～VI期か				
22	20	8	1	-	3B-2E25	VI	須恵器	杯蓋		18.0	-	3.7	-	普通	石英・長石・白色凝灰石	D	7.5Y5/1 灰	N7/0 灰白	還元	ロクロナデ、ロクロケズリ		ロクロナデ			右	4	-	8			奈良	春日III期頃	つまみ(3.0cm)、つまみ打ち欠き、成形・調整いずれも右回転			
22	20	9	1	-	3B-2E25	VI	土師器	無台杯?	A	10.3	-	-	-	普通	長石		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ヨコハケ		ヨコハケ				3	-	2			飛鳥～奈良		非ロクロ			
22	20	10	1	-	3B-2E25	VI	土師器	(無台)杯	B	-	-	-	-	普通	石英・長石・チャート		10YR8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	酸化	ナデ?		ヨコナデ、ハケ				-	-	2			奈良	春日III～IV期か				
22	20	11	1	-	3B-2E25	VI	土師器	無台杯	C	-	6.4	-	-	粗	長石		5YR7/3 にぶい橙	10YR8/2 灰白	酸化			ハケメ				-	7	3			飛鳥～奈良		非ロクロ			
22	20	12	1	-	3B-2E20	VI	土師器	無台杯	C	-	-	-	-	精	石英・白色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	5Y8/1 灰白	酸化	ヨコハケ		ハケ		ハケ?→木葉痕?		-	-	1			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
22	20	13	1	-	3B-2G16	VI	土師器	(無台)杯か高杯	C	-	-	-	-	普通	長石・雲母・チャート・白色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ヨコナデ、ヘラケズリ?		ヨコナデ				5	-	5			飛鳥～奈良	春日II～III期か				
22	21	14	1	-	3B-2F22	VI	土師器	(無台)杯	C	8.8	-	-	-	普通	石英・雲母・チャート		2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	酸化	ヨコナデ、指頭圧痕→ナデ		ヨコナデ、指頭圧痕、ヨコナメハケ				2	-	1			奈良	春日III～IV期か	非ロクロ			
22	21	15	1	-	3B-2F16	VI	土師器	(無台)杯	C	10.3	-	-	-	普通	長石・白色凝灰石		5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	酸化	ヨコナデ、ヘラケズリ?ナデ?		ヨコナデ、指頭圧痕				3	-	2		赤彩?	飛鳥～奈良	春日II～III期か				
22	21	16	1	-	3B-2E24	VI	土師器	鉢?		18.2	-	-	-	普通	石英・長石・雲母・チャート		10YR8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	酸化	ヨコナデ、ヘラケズリ		ヨコナデ				4	-	2			飛鳥～奈良	春日II～III期か	非ロクロ			
22	21	17	1	-	3B-2E24	VI	土師器	不明		14.0	-	-	-	普通	石英・チャート・白色凝灰石		10YR8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	酸化	ヨコナデ、指頭圧痕、タテ・ナメハケ→ヘラケズリ		ヨコハケ				7	-	2			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
22	21	18	1	-	3B-2E20	VI	土師器	不明		16.2	-	-	-	普通	石英・長石・雲母		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	酸化	ヨコナデ、ナメハケ		ヨコナデ、ヨコハケ				2	-	1			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
22	21	19	1	-	3B-2E20 3B-2E25	VI	土師器	甕か		20.0	-	-	-	普通	石英・長石・雲母・チャート		10YR6/1 褐灰	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ヨコナデ、タテ・ナメハケ		ヨコナデ				3	-	1			飛鳥	春日II期前後か	非ロクロ			
22	21	20	1	-	3B-2F16	VI	土師器	甕か		19.5	-	-	-	普通	石英・長石・雲母・白色凝灰石		7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ヨコナデ、タテハケ、指頭圧痕		ヨコナデ、ヨコハケ→ヨコナメハケ				4	-	1			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
22	21	21	1	-	3B-2G16	VI	土師器	小甕	B	14.0	-	-	-	普通	長石・白色凝灰石		10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/3 にぶい橙	酸化	ヨコナデ、タテハケ		ヨコナデ、ナメハケ				3	-	1			飛鳥	春日II期か	非ロクロ			
22	21	22	1	-	3B-2E25	VI	土師器	小甕	B	15.2	-	-	-	普通	石英・雲母・チャート		7.5YR7/3 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	酸化	ヨコナデ、タテハケ		ヨコナデ				3 (8)	-	1			奈良	春日III～IV期か	非ロクロ			
22	21	23	1	-	3B-2E24	VI	土師器	不明		11.0	-	-	-	普通	石英・長石・雲母・焼土粒・白色凝灰石		10YR6/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ヨコナデ、指頭圧痕→ヘラケズリ、ナデ		ヨコナデ、ナデ?				2	-	2			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
23	21	24	1	-	3B-2G15	VI	土師器	小甕	B	14.0	-	-	-	普通	石英・長石・白色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR5/1 褐灰	酸化	ヨコナデ、ハケ、ヘラケズリ		ヨコナデ、ヨコハケ→ヨコナデ				4	-	2	スス		飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
23	21	25	1	-	3B-2E20	VI	土師器	小甕	B	13.2	-	-	-	普通	石英・チャート		10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	酸化	ヨコナデ		ヨコナデ、ナメハケ				3	-	1			飛鳥～奈良	春日II～IV期か	非ロクロ			
23	21	26	1	-	3B-2E25	VI	土師器	小甕	B	(13.5)	-	-	-	普通	長石		10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ヨコハケ						2	-	1			飛鳥～奈良		非ロクロ			

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			層位	種別	器種	分類	法量 (cm)			径高指数	底径指数	胎土		産地	色調		焼成	手法					遺存率 (/36)			付着物		時代	時期・年代	備考		
			区	遺構名	グリッド					口径	底径	器高			状態	含有物		外面	内面		外面	工具痕	内面	工具痕	底部	回転	口縁部	底部	全体	内面				外面	
																																			口縁部
23	21	27	1	-	3B-2E20	VI	土師器	小甕	C	16	-	-	-	-	普通	長石・チャート		7.5YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ナデ?							2	-	1			奈良 平安	春日Ⅲ～Ⅳ期 か	非ロクロ?
23	21	28	1	-	3B-2F19	VI	土師器	長甕	B	17.6	-	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	酸化	ヨコナデ、ナ ナメハケ		ヨコナデ、ナ ナメハケ					7	-	2			飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ
23	21	29	1	-	3B-2G17	VI	土師器	小甕か		15.2	-	-	-	-	粗	長石・チャート・ 白色凝灰石		10YR8/3 浅黄橙	5YR7/6 橙	酸化	ヨコナデ、ハ ケ?		ヨコナデ、ハ ケ?				3	-	1			飛鳥	春日Ⅰ～Ⅱ期 か	非ロクロ	
23	22	30	1	-	3B-2G15 3B-2G14	VI	土師器	長甕	A	24.4	-	30.8	-	-	普通	石英・雲母・ チャート・白色 凝灰石		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	酸化	口縁ヨコナデ →ナメ・ヨ コハケ 体部ナメハ ケ→タテハケ →ナメハラ ケズリ		口縁ヨコナデ →ヨコハケ 体部ナメハ ケ→タテハケ →ナメハラ ケズリ		内外ハラケズ リ		12	36	30	スス	飛鳥	春日Ⅱ期ころ か	非ロクロ		
23	23	31	1	-	3B-2E25	VI	土師器	長甕		24.3	-	-	-	-	普通	石英・雲母・白 色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ヨコナデ、ヨ コ・ナメハ ケ		ヨコナデ、ナ ナメハケ				2	-	1			奈良 平安	春日Ⅳ期か	非ロクロ	
23	23	32	1	-	3B-2G17	VI	土師器	長甕か		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母		2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	酸化	ヨコナデ、タ テハケ		ヨコナデ、ヨ コハケ				-	-	1	スス	飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ		
23	23	33	1	-	3B-2F20	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	長石・雲母・ チャート		2.5Y8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	タテ・ナナメ ハケ		ヨコ・ナナメ ハケ				-	-	1	オコゲ	奈良	春日Ⅲ～Ⅳ期 か	非ロクロ		
23	23	34	1	-	3B-2E25	VI	土師器	小甕		-	-	-	-	-	普通	長石・チャート		5YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	タテハケ		ヨコナデ				-	-	2			飛鳥 奈良		非ロクロ	
23	23	35	1	-	3B-2E25 VI 排土	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	長石・チャート		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	酸化	タテハケ		ヨコナデ				-	-	2			飛鳥 奈良		非ロクロ	
23	23	36	1	-	3B-2G16	VI	土師器	小甕		-	-	-	-	-	普通	石英・雲母・ チャート・焼土 粒		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	酸化	ハラケズリ		ヨコナデ				-	-	1			奈良	春日Ⅲ～Ⅳ期 か	非ロクロ	
23	23	37	1	-	3B-2E24	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/1 灰白	酸化	ハラケズリ		ヨコ・ナナメ ハケ				-	-	1			飛鳥	春日Ⅱ期前後 か	非ロクロ	
23	23	38	1	-	3B-2F18	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ケズリ?		ヨコハケ、ナ デ				-	-	1			飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ	
24	23	39	1	-	3B-2G17	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	酸化	ナナメハラケ ズリ		タテ・ナナメ ハケ				-	-	1			飛鳥	春日Ⅱ期か	非ロクロ	
24	23	40	1	-	3B-2G17	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート・白色 凝灰石		10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/1 灰白	酸化	タテ・ナナメ ハラケズリ		ヨコハラケズ リ				-	-	1			飛鳥	春日Ⅱ期か	非ロクロ	
24	23	41	1	-	3B-2F23	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	長石・雲母		10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	酸化	ケズリ?		ヨコナデ				-	-	2			飛鳥 奈良		非ロクロ	
24	23	42	1	-	3B-2G16	VI	土師器	小甕か		-	-	-	-	-	普通	長石・白色凝灰 石		2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	酸化	ナデ?		不明				-	-	1			飛鳥 奈良		非ロクロ	
24	23	43	1	-	3B-2F19	VI	土師器	小甕		-	5.0	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート		10YR8/3 浅黄橙	2.5Y4/1 黄灰	酸化	ナナメハケ		ナデ?		ナデ (工具 痕?あり)		-	6	1			飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ	
24	23	44	1	-	3B-2G17 3B-2F17	VI	土師器	小甕		-	8.3	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート		10YR7/2 にぶい黄橙	7.5YR7/2 明褐灰	酸化	ロクロナデ→ ケズリ?		ロクロナデ→ ケズリ?		ナデ (工具 痕?あり)		-	14	2	スス	飛鳥 奈良	春日Ⅳ期頃か			
24	24	45	1	-	3B-2G18	VI	土師器	長甕か		-	9.2	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母・白色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	酸化			ハケ?→ナデ		ナデ (工具 痕?あり)		-	4	1			奈良 平安	春日Ⅲ期頃か	ロクロ?	
24	24	46	1	-	3B-2E25	VI	土師器	長甕		-	9.0	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母・チャート・ 白色凝灰石		7.5YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	酸化	ハラケズリ		ナデ、指頭圧 痕		ハラケズリ、 ナデ		-	20	2			飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ	
24	24	47	1	-	3B-2F21	VI	土師器	小甕か		-	7.6	-	-	-	普通	長石・チャート・ 白色凝灰石		10YR6/2 灰黄褐	10YR7/1 灰白	酸化	タテ・ナナメ ハケ、ナデ?		指頭圧痕 (ケ ズリ?)				-	3	1			飛鳥 奈良	春日Ⅱ～Ⅳ期 か	非ロクロ	
24	24	48	1	-	3B-2E25	VI	土師器	長甕		-	5.8	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母・白色凝灰石		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/1 褐灰	酸化	タテ・ナナメ ハケ		指頭圧痕		ハケ		-	5	1			平安	春日Ⅳ期頃か	非ロクロ	
24	24	49	1	-	3B-2E25	VI	土師器	小甕		-	5.6	-	-	-	普通	長石		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	酸化	ナデ		ケズリ?				-	18	-			飛鳥 奈良		非ロクロ	
24	24	50	1	-	3B-2F16 3B-2F22	VI	土師器	長甕		-	10.2	-	-	-	普通	長石・白色凝灰 石		10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	酸化	ナデ		不明				-	8	4			飛鳥 奈良		非ロクロ	
24	24	51	1	-	3B-2G17	VI	土師器	長甕		-	10.0	-	-	-	普通	長石・海綿骨針		10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化			ナデ?		ケズリ		-	14	3			飛鳥 奈良		非ロクロ	
24	24	52	1	-	3B-2J6	VI	土師器	無台椀		13.0	-	-	-	-	精	石英・海綿骨針		7.5YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/3 にぶい黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				3	-	1			平安	春日Ⅱ～Ⅲ 期頃か		
24	24	53	1	-	3B-2G14	VI	土師器	無台椀		-	6.4	-	-	-	精	雲母・白色凝灰 石		5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ		糸切	左	-	4	1			平安	春日Ⅵ～Ⅶ期 か		
24	24	54	1	-	3B-2J6 3B-2J7	VI	土師器	無台椀		-	8.8	-	-	-	精	石英・長石・雲 母・白色凝灰石		2.5YR6/8 橙	2.5YR5/6 明赤褐	酸化	ロクロナデ、 (ロクロ)ケ ズリ		ロクロナデ		糸切	右?	-	17	4	赤彩?	赤彩?	平安	春日Ⅵ期か		
24	24	55	1	-	3B-2H12	VI	土師器	小甕	D	12.0	-	-	-	-	普通	石英・チャート・ 白色凝灰石		7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				3	-	1			平安	春日Ⅵ～Ⅶ期 か		

図版 No.	写真 図版 No.	報告 No.	出土位置			層位	種別	器種	分類	法量 (cm)			径高 指数	底径 指数	胎土		産地	色調		焼成	手法					回転	遺存率 (/36)			付着物		時代	時期・年代	備考		
			区	遺構名	グリッド					口径	底径	器高			状態	含有物		外面	内面		外面	工具痕	内面	工具痕	底部		口縁部	底部	全体	内面	外面					
24	24	56	1	-	3B-2G16	VI	土師器	小甕	D	12.2	-	-	-	-	精	長石・白色凝灰石	B	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	酸化	ロクロナデ、 ケズリか		ロクロナデ						3	-	1			平安	春日Ⅳ期か	
24	24	57	1	-	3B-2F18 3B-2F16	VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	長石		10YR4/3 にぶい黄褐	7.5YR6/6 橙	酸化	長方形格子文 タタキメ、ケ ズリ	K	ヨコハケ						-	-	1			平安		
24	24	58	1	-	3B-2G20	VI	土師器	長甕	C	21.3	-	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート		2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	酸化	ロクロナデ?		ロクロナデ?				1	-	1			奈良~ 平安	春日Ⅳ期頃か	ロクロカ		
24	24	59	1	-	3B-2E25	VI	土師器	長甕	C	20	-	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母		7.5YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ、 カキメ				2	-	1			奈良~ 平安	春日Ⅳ期か			
24	24	60	1	-	3B-2G16	VI	土師器	鍋		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・ チャート・白色 凝灰石		7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	酸化	平行タタキ	H	当て具痕→ハ ケ?	H				-	-	1		スス	平安	春日Ⅵ期か		
25	25	61	確認 3T	-		III	磁器	碗		(10.2)	-	-	-	-	精			10Y7/1 灰 白	10Y7/1 灰 白	染付							2	-	1			近世				
25	25	62	確認 3T	-		III	磁器	碗		-	-	-	-	-	精			7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	染付							-	1	1		サビ?	近世				
25	25	63	確認 3T	-		III	磁器	皿		(16.3)	-	-	-	-	精			5GY8/1 灰白	7.5GY8/1 明緑灰				染付				2	-	1			近世				
25	25	64	確認 3T	-		III	陶器	播鉢		(31.6)	-	-	-	-	精			5Y3/2 オ リーブ黒	5Y2/2 オ リーブ黒					卸目			1	-	1			近世		内外鉄軸		
25	25	65	確認 9T	-		VI	土師器	長甕	D	17.8	-	-	-	-	粗	石英・長石・ チャート		2.5Y8/3 浅黄	2.5Y8/3 浅黄	酸化	タタキメ (平 行) あり		ロクロナデか				4	-	2			古代				
25	25	66	確認 9T	-		VI	土師器	小甕	C	12.8	-	-	-	-	粗	石英・長石・雲 母		10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				4	-	2	スス	スス	古代				
25	25	67	確認 9T	-		VI	土師器	長甕	D	(23.2)	-	-	-	-	普通	石英・長石・赤 色粒子		5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	酸化	カキメ		カキメ				1	-	2			古代				
25	25	68	確認 9T	-		VI	土師器	長甕		-	-	-	-	-	普通	石英・長石・雲 母・チャート・ 角閃石		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	酸化	上半: カキ メ・ケズリ 下半: タタキ メ (平行)	H	上半: ロクロ ナデ 下半: 当て具 痕 (平行)	H			-	-	3			古代				
25	25	69	確認 11T	-		VI	須恵器	無台杯	B	12.0	-	-	-	-	精	長石・白色凝灰 石	B	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ				6	-	2			平安				
25	25	70	確認 11T	-		VI	須恵器	無台杯	B	-	8.6	-	-	-	精	海綿骨針	B	N5/0 灰	N4/0 灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ		ヘラ切		-	4	2			平安		底外面板状圧痕		
25	25	71	確認 11T	-		VI	須恵器	無台杯	B	-	7.0	-	-	-	精	長石	B	10Y6/1 灰	10Y6/1 灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ		ヘラ切	左	-	7	7			平安				
25	25	72	確認 11T	-		VI	珠洲焼	片口鉢		30.2	-	-	-	-	精	長石・海綿骨針		N5/0 灰	N5/0 灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ				3	-	1			中世	吉岡Ⅱ期か	砥石に転用		
25	25	73	確認 11T	-		VI	珠洲焼	甕か		-	-	-	-	-	精	長石		7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	還元	タタキメ		あて具痕 ナデ				-	-	1			中世		砥石に転用		
25	25	74	確認 11T	-		VI	珠洲焼	壺T種		-	-	-	-	-	精			7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	還元	底部ロクロナ デ上部タタキ メ		底部ロクロナ デ上部あて具 痕				-	-	2			中世				
25	25	75	確認 12T	-		VI	須恵器	無台杯	B	(13.0)	-	-	-	-	普通	石英・長石	Bか	5Y7/1 灰 白	5Y7/1 灰 白	還元	ロクロナデ		ロクロナデ				1	-	1			平安				
25	25	76	確認 12T	-		VI	土師器	小甕か		-	6.3	-	-	-	普通	長石		2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				-	5	1			平安				
25	25	77	確認 13T	-		VI	土師器	小甕	C	15.0	-	-	-	-	普通	長石・チャート		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				3	-	1			平安				
25	25	78	確認 13T	-		III	磁器	碗		8.0	-	-	-	-	精			10Y8/1 灰 白	10Y8/1 灰 白	染付			染付				3	-	1			近世				
25	25	79	確認 19T	-		VI	土師器	小甕	C	14.0	-	-	-	-	普通	長石・チャート		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ				4	-	1			平安				
25	25	80	確認 20T	-		II	磁器	皿		-	-	-	-	-	精			5Y5/6 オ リーブ黄	5Y6/3 オ リーブ黄		ロクロケズリ		蛇ノ目軸刺				-	-	1			近世				
26	26	81	確認 23T	-		VI	須恵器	壺・瓶類		-	-	-	-	-	精	長石・白色凝灰 石	Bか	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ				-	12	6			平安				
26	26	82	確認 23T	-		VI	須恵器	壺・瓶類		-	-	-	-	-	精	長石	B	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	還元	ロクロナデ		ロクロナデ				-	-	1		自然軸	古代				
26	26	83	確認 23T	-		VI	須恵器	甕		-	-	-	-	-	精	石英・長石・白 色凝灰石	A	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	還元	カキメ・タタ キメ (平行)	Hc	当て具痕	N			-	-	2		自然軸	古代				
26	26	84	確認 23T	-		VI	須恵器	甕		-	-	-	-	-	精	長石・白色凝灰 石	A	N5/0 灰	N5/0 灰	還元	タタキメ (平 行)	Hc	当て具痕	N			-	-	1			古代				
26	26	85	確認 23T	-		VI	須恵器	甕		-	-	-	-	-	精	長石・白色凝灰 石	B	N4/0 灰	N4/0 灰	還元	カキメ・タタ キメ (格子状)	K	当て具痕 (平 行)	H			-	-	1			古代				
26	26	86	確認 23T	-		VI	須恵器	甕		-	-	-	-	-	普通	白色凝灰石	D	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	還元	タタキメ (平 行)	Ha	当て具痕 (同 心円)	D			-	-	1			古代				

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			層位	種別	器種	分類	法量 (cm)			径高指数	底径指数	胎土		産地	色調		焼成	手法					回転	遺存率 (/36)			付着物		時代	時期・年代	備考		
			区	遺構名	グリッド					口径	底径	器高			状態	含有物		外面	内面		外面	工具痕	内面	工具痕	底部		口縁部	底部	全体	内面	外面					
26	26	87	確認23T	-		VI	珠洲焼	壺T種		-	-	-	-	-	粗	長石		7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	還元	タタキメ上部ロクロナデ		当て具痕上部ロクロナデ						-	-	2			中世		
26	26	88	確認24T	-		I	磁器	碗		-	-	-	-	-	精	長石		10Y8/1灰白	10Y8/1灰白	染付								-	9	4	サビ?	サビ?	近世			
26	27	89	確認26T	-		VI	須恵器	甕		-	-	-	-	-	精	長石	C	N5/0灰	N5/0灰	還元	カキメ・タタキメ(格子)	Ha	当て具痕(同心円)	D				-	-	1			古代			
26	27	90	確認27T	-		VI	土師器	長甕	B	(20.0)	-	-	-	-	普通	長石・雲母・チャート・赤色粒子		2.5Y8/3浅黄	2.5Y8/3浅黄	酸化	ハケメ							2	-	2	スス		古代			
26	26	91	確認28T	-		VI	土師器	小甕	A	14.0	-	-	-	-	普通	長石・チャート・焼土粒・角閃石		7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	酸化	ヘラケズリ							20	-	18			古代			
26	27	92	確認29T	-		VI	土師器	鍋		(39.6)	-	-	-	-	粗	長石		10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	酸化	ロクロナデ		ロクロナデ					2	-	1			古代			
26	27	93	確認29T	-		I	磁器	碗		-	-	-	-	-	精			2.5GY8/1灰白	5GY8/1灰白	染付								-	-	2	サビ?	サビ?	近世			

- 凡例
- 1 器種・分類 第V章に記した。
 - 2 法量 括弧付の数値は遺存率の低いものである。
 - 3 径高指数 器高 / 口径 × 100
 - 4 底径指数 底径 / 口径 × 100
 - 5 胎土 胎土内に含まれる鉱物・小礫等について記した。
 - 6 色調 『新版標準土色帖』(小山・竹原 1967) の記号を記した。
 - 7 手法 特徴的な手法のみを記し、網羅的な記載は行っていない。底部の「系切り」・「ヘラ切り」はいずれも回転台を用いたものである。回転方向は、回転台の回転方向を表す。底部調整やロクロナデ・ロクロナズリ・ロクロナデから判断した。
 - 8 遺存率 分数で遺存割合を示した。分母 36 を省略している。

別表 4 石製品観察表

図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			層位	種別	分類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	時代	備考
			区	遺構名	グリッド					長さ	幅	厚さ			
27	27	1	1	-	3B-2G14	VI	石製品	礫石+砥石	安山岩	13.537	8.126	7.198	934.31		被熱 砥面2
27	27	2	1	-	3B-2G19	VI	石製品	礫石	緑色凝灰岩	9.010	3.935	3.775	129.90		
27	27	3	1	-		排土	石製品	礫石	緑色片岩	5.700	5.420	3.915	153.58		
27	27	4	1	-	3C-2A7	III	石製品	磨石	凝灰岩	6.625	4.755	3.000	122.39		
27	27	5	1	-	3B-2E25	VI	石製品	台石	安山岩	11.630	11.861	5.315	620.00		被熱
27	27	6	1	Pit 51	3B-2G12	I	石製品	台石	安山岩	16.000	13.722	10.438	2315.54		被熱 炭化物
27	28	7	1	-	3B-2H13	VI	石製品	石核	流紋岩	6.275	6.720	7.829	273.72		
27	28	8	1	-	3B-2G20	VI	石製品	軽石製石製品	軽石	4.916	3.581	2.358	12.50		
28	28	9		試掘11T		VI	石製品	砥石	凝灰岩	17.600	8.300	7.320	1143.10		被熱 砥面
28	28	10		試掘2T		III	石製品	砥石	緑色凝灰岩	10.850	3.765	3.610	104.66		砥面 5面
28	28	11		試掘11T		VI	石製品	礫石	凝灰岩	9.650	5.830	5.550	388.20		

別表 5 木製品観察表

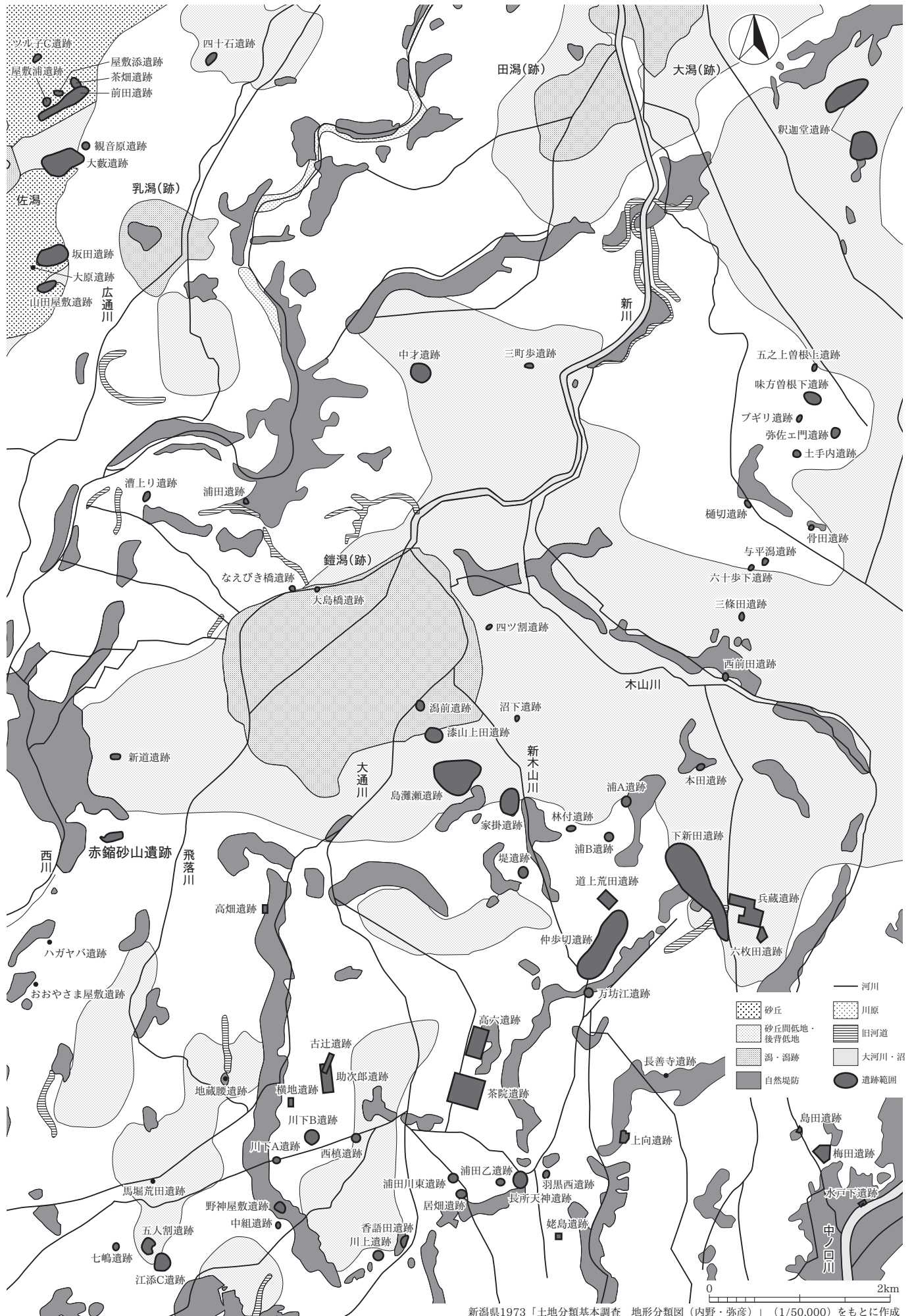
図版No.	写真図版No.	報告No.	出土位置			層位	器種			樹種	法量 (cm)				木取り	時代	備考
			区	遺構名	グリッド		大分類	中分類	細分類		長さ/口径	幅/底径	器高	厚さ			
28	29	1	1	Pit 52	3B-2G19	I	木製品	柱根		ヤナギ属	26.5	24.5		16.5	芯持丸材	中世	
28	29	2	1	-	3B-2G22	VI	木製品	板状		スギ	17.6	11.9		4.9	板目	古代か	

圖 版



明治44年測図 大正3年8月大日本帝国陸地測量部発行「弥彦」1/50,000に加筆













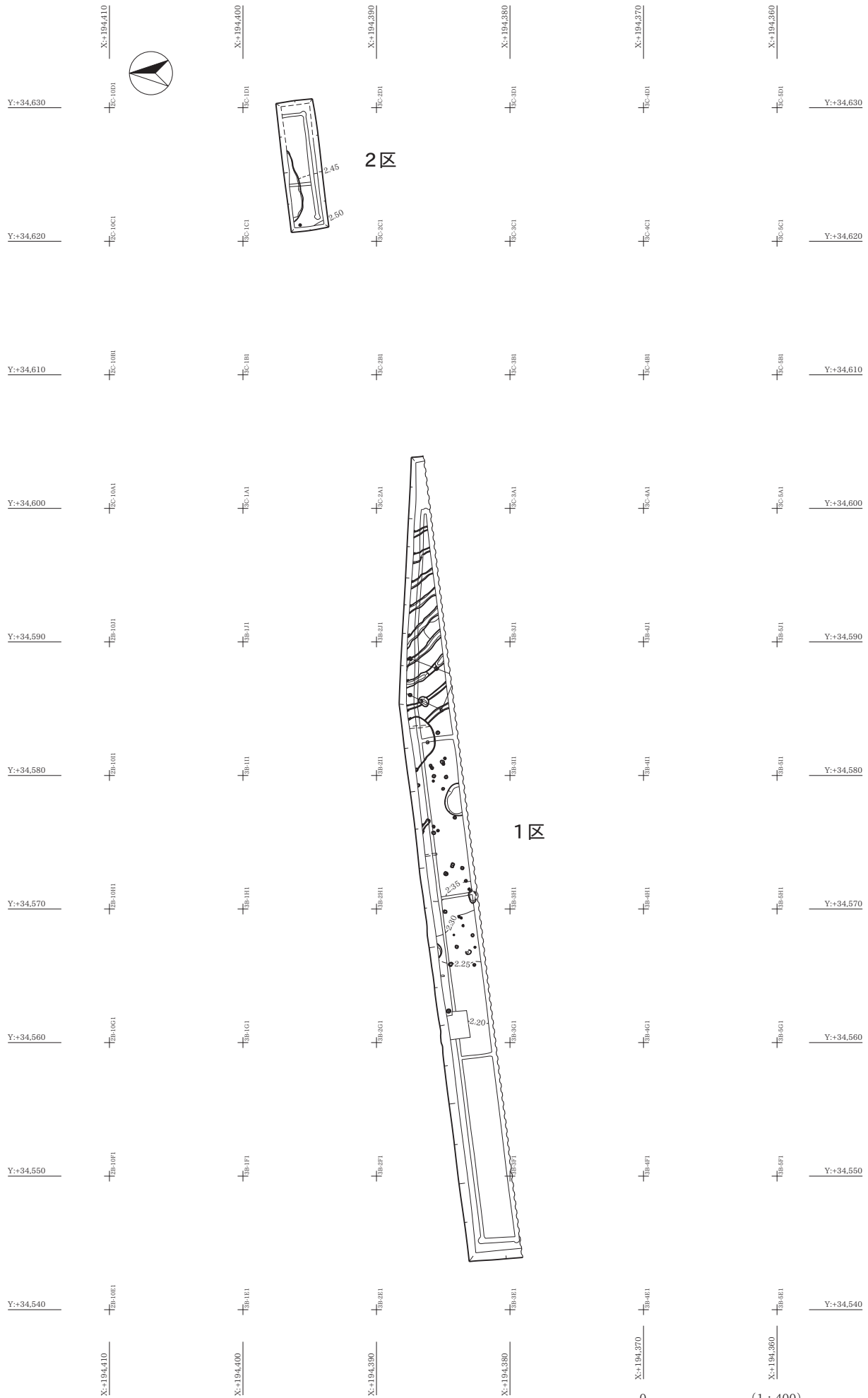
平面直角座標値は世界測地系（測地成果2011）による
2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を縮小修正→1:10,000



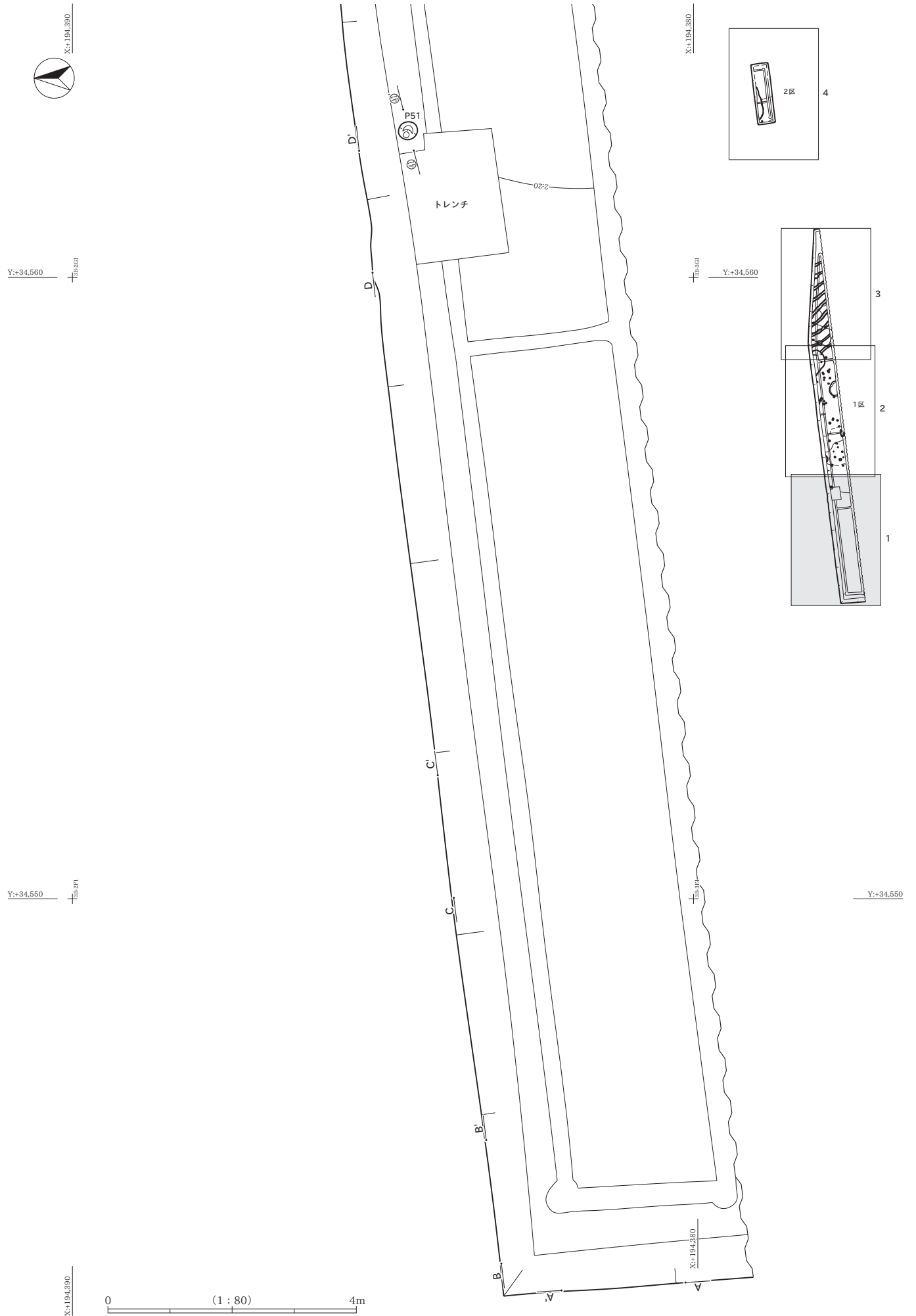
平面直角座標値は世界測地系(測地成果2011)による
 2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を縮小修正→1:5,000

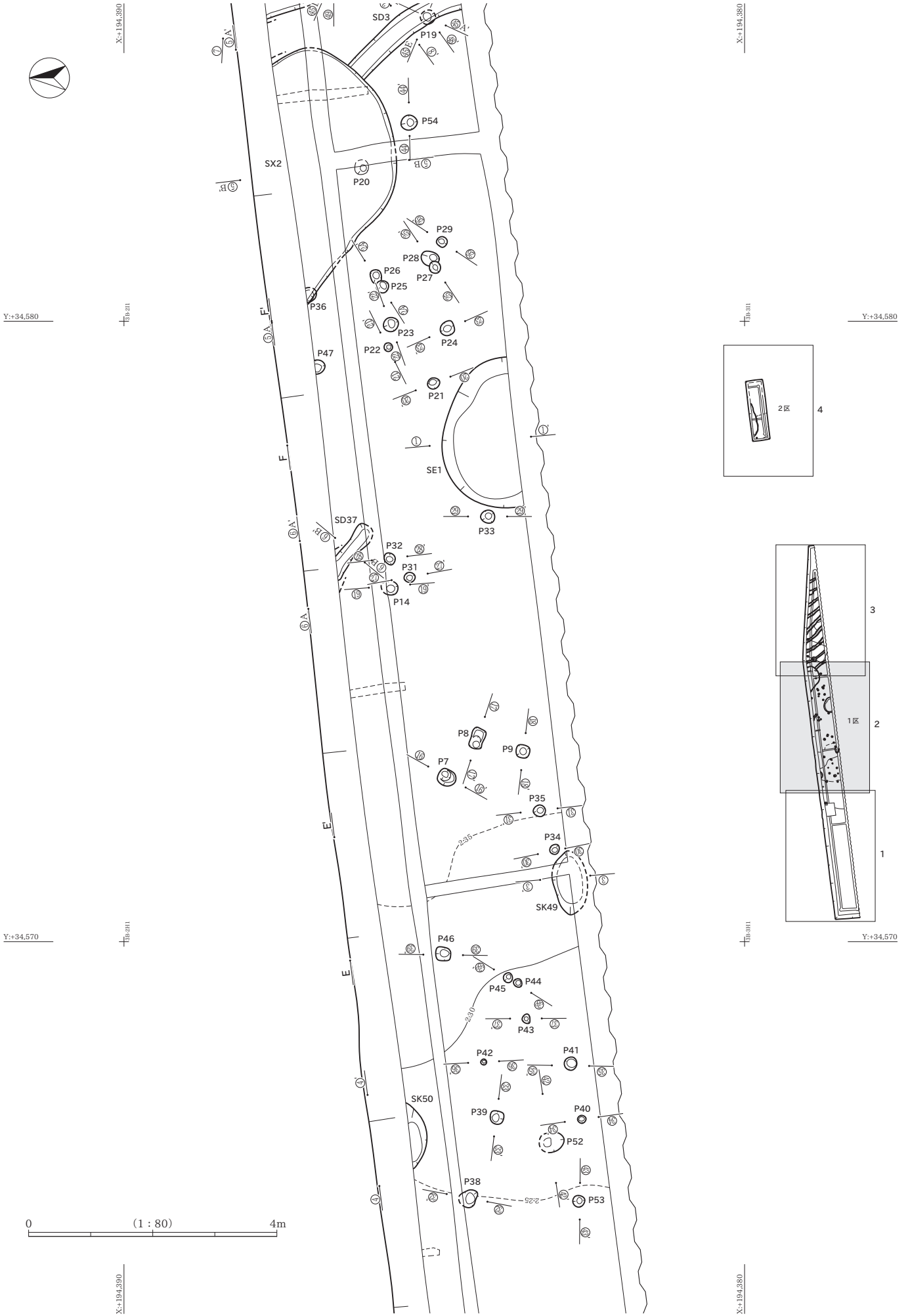


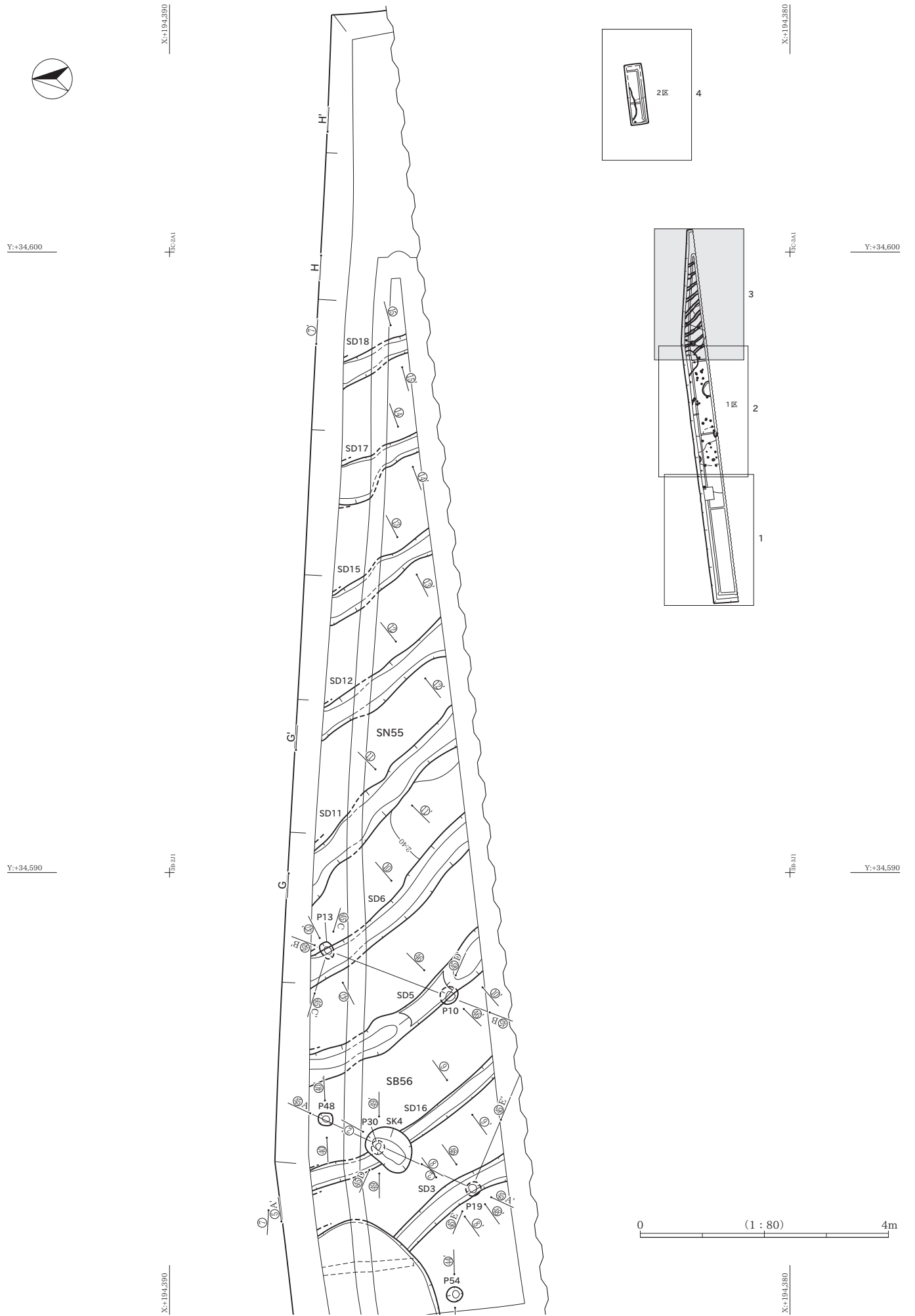
平面直角座標値は世界測地系（測地成果2011）による
 2007年発行「新潟市地形図 1:2,500」を加筆修正

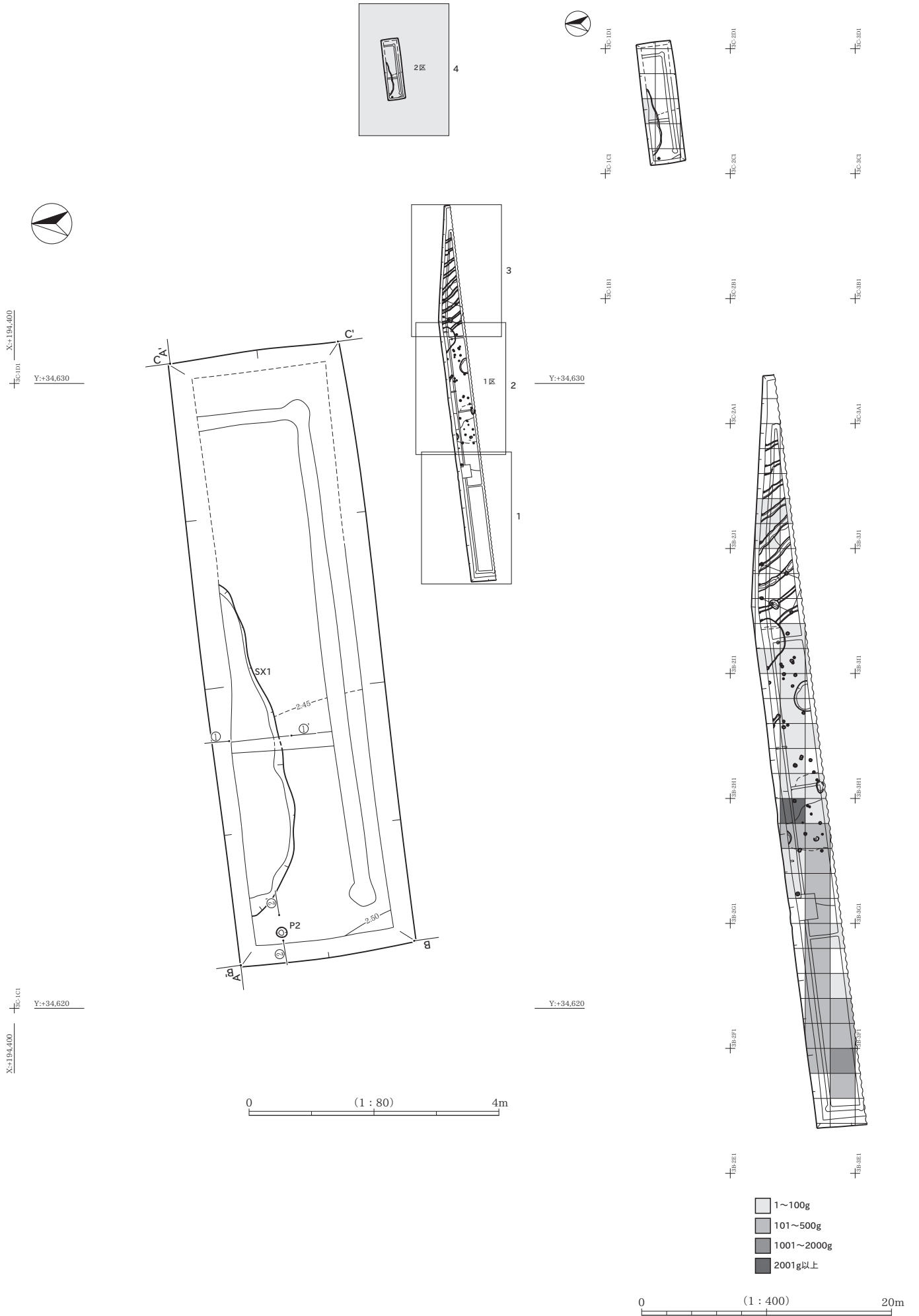


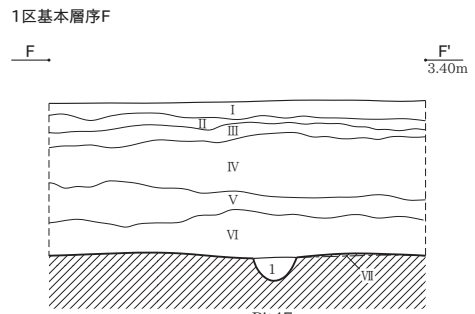
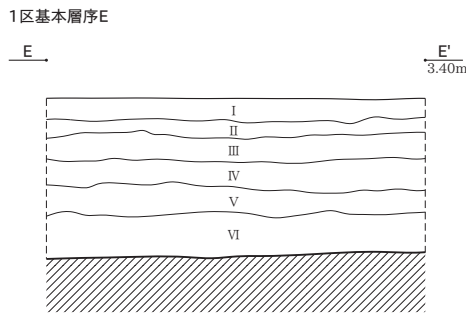
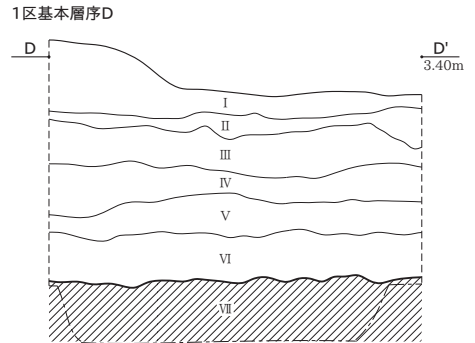
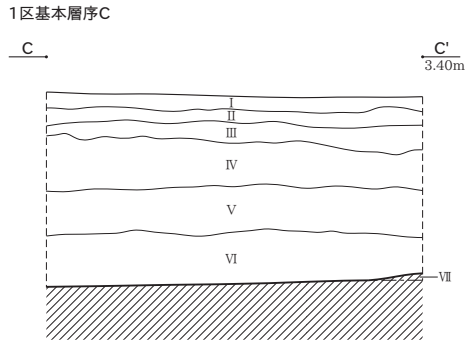
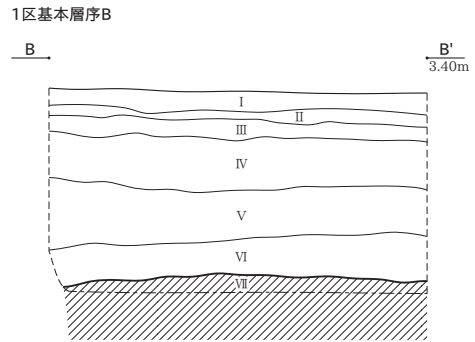
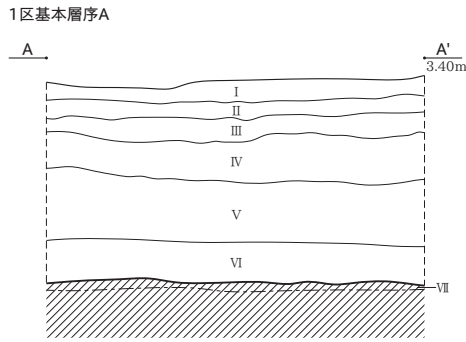
0 (1 : 400) 20m



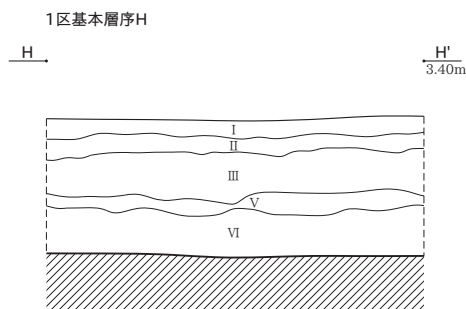
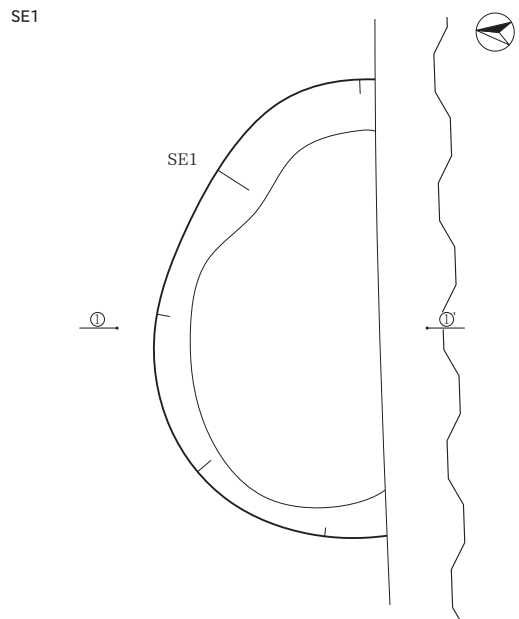
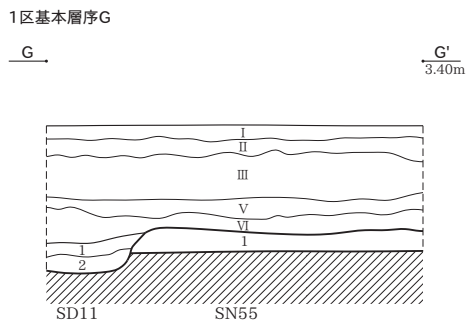








Pit47
1 灰色砂質 (5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる

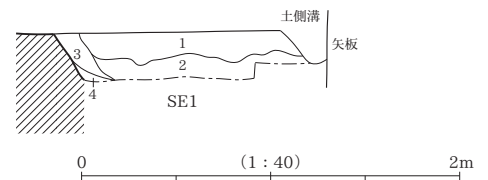


基本層序

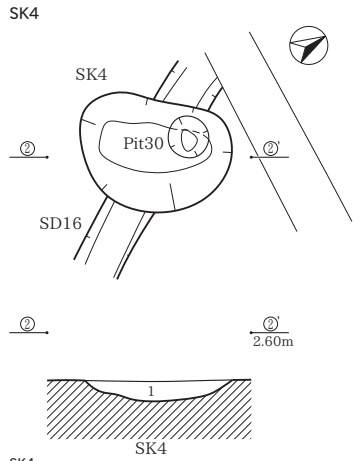
I 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト	粘性ややあり	しまりあり	黄褐色粒子混じる	表土
II 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト	粘性ややあり	しまり強い	茶褐色粒子混じる	床土
III 黒褐色 (10YR3/2) シルト	粘性ややあり	しまりあり	褐色シルト混じる	
IV 灰色 (5Y4/1) シルト	粘性ややあり	しまりあり	茶褐色粒子混じる	
V 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト	粘性あり	しまりややあり		
VI 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト	粘性あり	しまりあり	φ1~2mmの炭化物少量混じる	包含層
VII 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト	粘性あり	しまり強い	暗灰色シルトがブロック状に少量混じる	基盤層

SE1

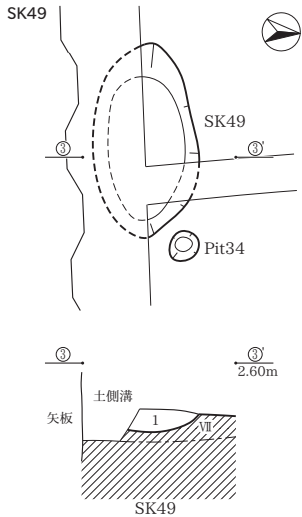
1 褐灰色 (10YR4/1) シルト	粘性強い	しまりあり	茶褐色粒子混じる
2 灰色 (7.5Y4/1) シルト	粘性強い	しまりあり	
3 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト	粘性強い	しまりあり	灰色シルトがブロック状に混じる
4 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト	粘性強い	しまりあり	φ1mmの炭化物少量混じる



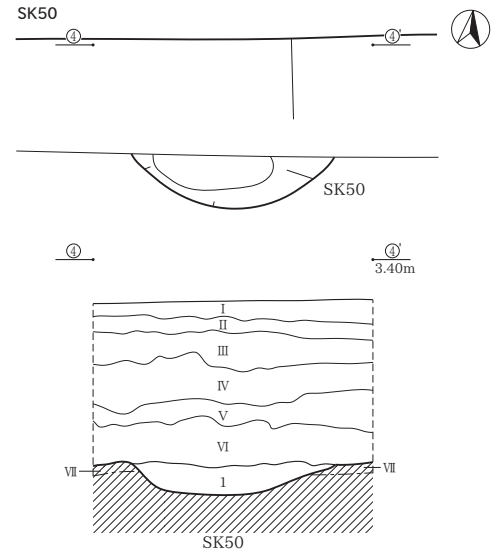
0 (1 : 40) 2m



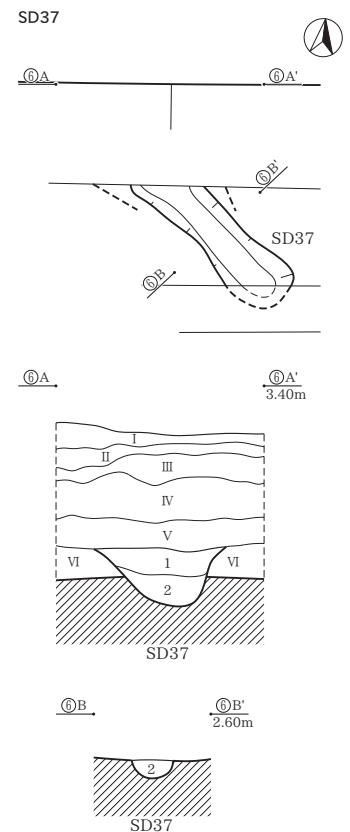
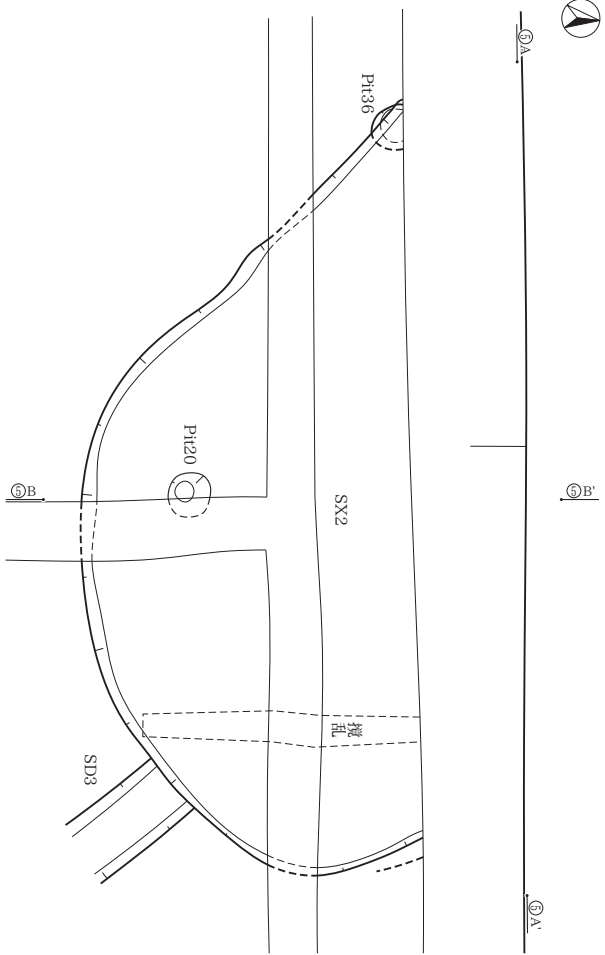
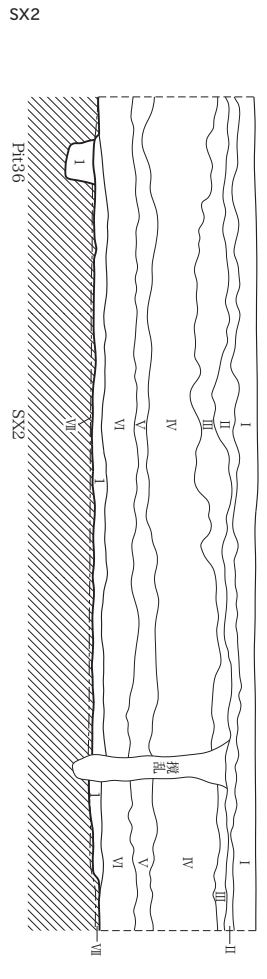
SK4
1 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性強い しまりあり
φ1~3mmの炭化物混じる 灰色砂質土が粒状に混じる



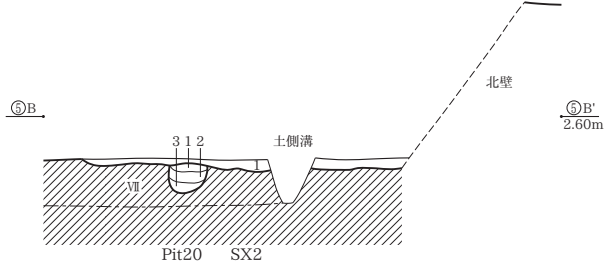
SK49
1 暗緑灰色 (7.5GY3/1) シルト 粘性強い しまりあり
灰色砂質土がブロック状に混じる



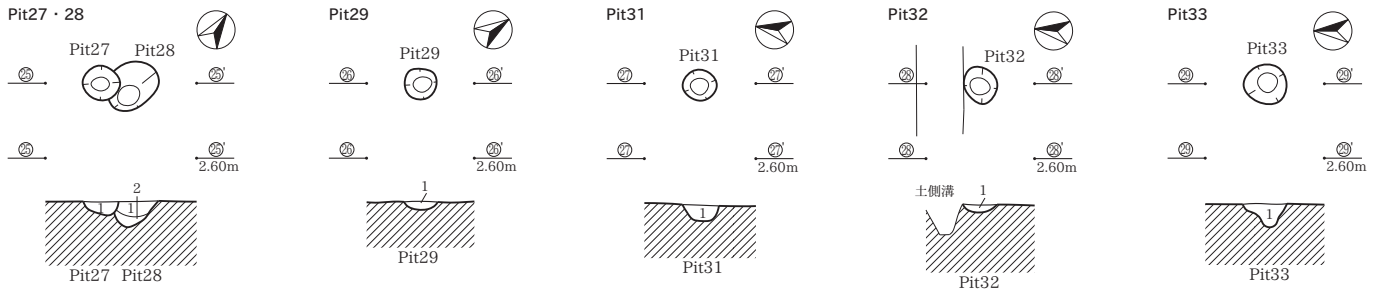
SK50
1 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり
φ3~5mmの炭化物多く混じる



SD37
1 灰色 (7.5Y4/1) シルト 粘性あり しまりややあり 茶褐色粒子混じる
2 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり 茶褐色粒子混じる



SX2
1 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト 粘性あり しまりあり 灰色粒子混じる
Pit36
1 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性強い しまりややあり 茶褐色粒子混じる
Pit20
1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト 粘性あり しまりあり 黄灰色粒子混じる
2 灰色 (7.5Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり
3 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり φ1~3mmの炭化物混じる



Pit27
1 灰色 (7.5Y4/1) 砂質シルト 粘性あり しまりあり

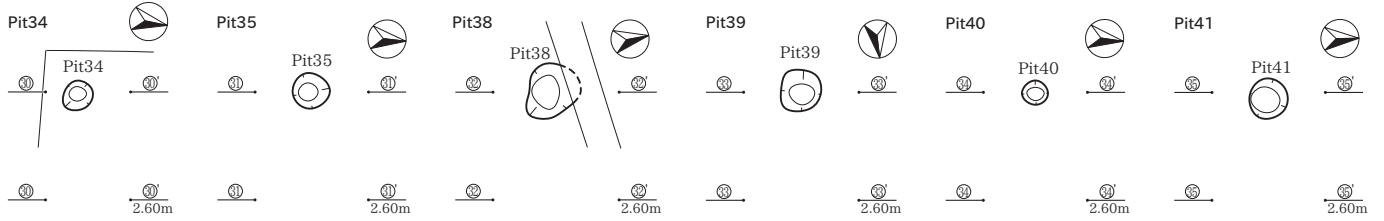
Pit28
1 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり
灰色砂質土がブロック状に混じる
2 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり
φ1~2mmの炭化物少量混じる

Pit29
1 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり 茶褐色粒
子混じる

Pit31
1 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり φ1mmの
炭化物混じる

Pit32
1 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり 黄色粒子混じる

Pit33
1 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト 粘性強い しまりあり φ1mmの炭化物
少量混じる



Pit34
1 灰色 (7.5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり

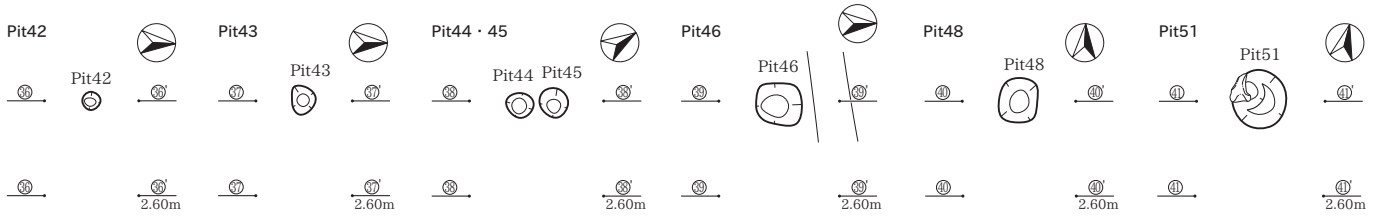
Pit35
1 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 砂質シルト 粘性強い
しまりややあり φ1mmの炭化物少量混じる

Pit38
1 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり
2 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト 粘性強い しまりややあり φ1mmの炭化物少量混じる

Pit39
1 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる
φ1mmの炭化物少量混じる

Pit40
1 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる

Pit41
1 灰色 (7.5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり



Pit42
1 灰色 (10Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり

Pit43
1 灰色 (7.5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり

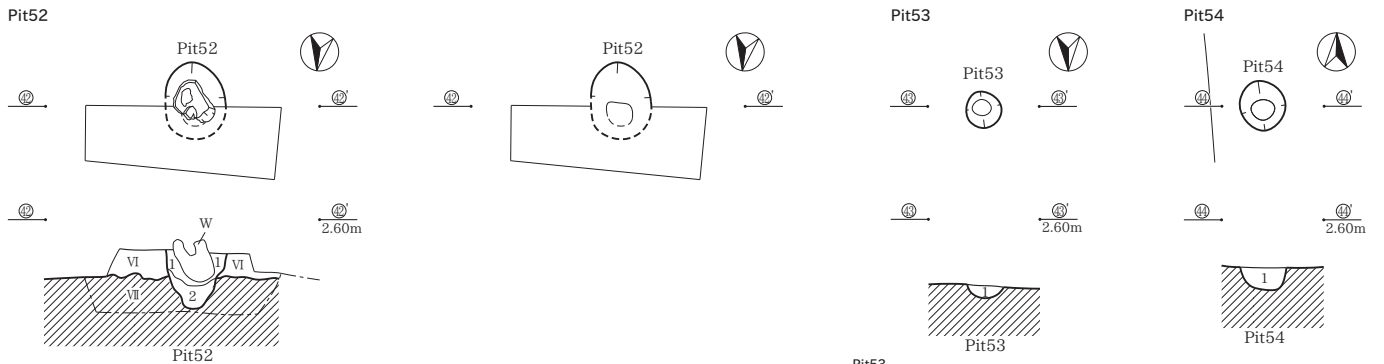
Pit44
1 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり

Pit45
1 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色砂質土がブロック状に混じる

Pit46
1 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト 粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる
2 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂 粘性ややあり しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる

Pit48
1 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト 粘性強い しまりあり φ1mmの炭化物少量混じる

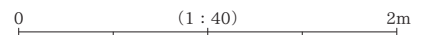
Pit51
1 黒褐色 (10YR3/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルト (7.5Y4/1) がブロック状に混じる
φ1mmの炭化物混じる



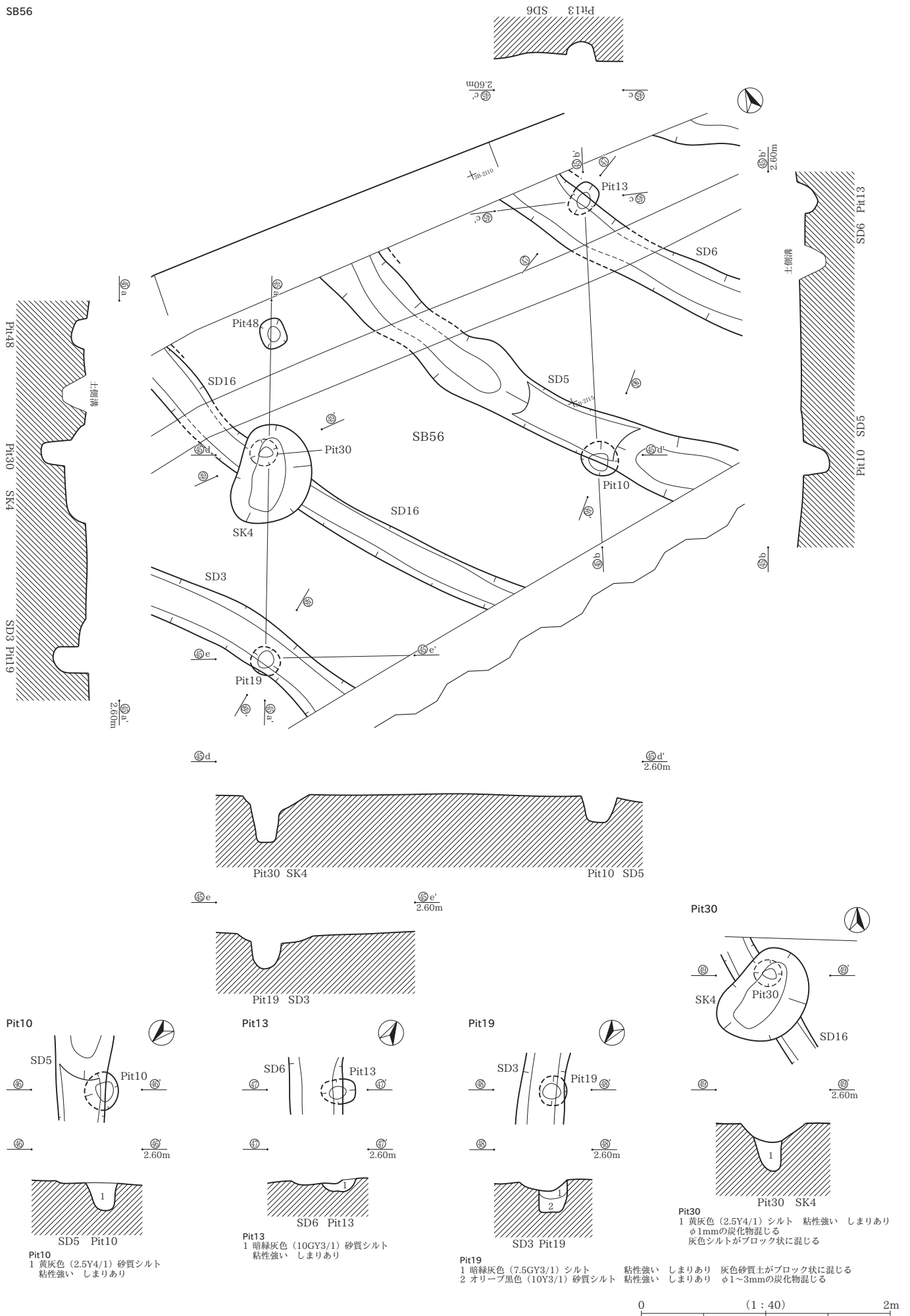
Pit52
1 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる
2 褐灰色 (10YR4/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる φ1mmの炭化物少量混じる

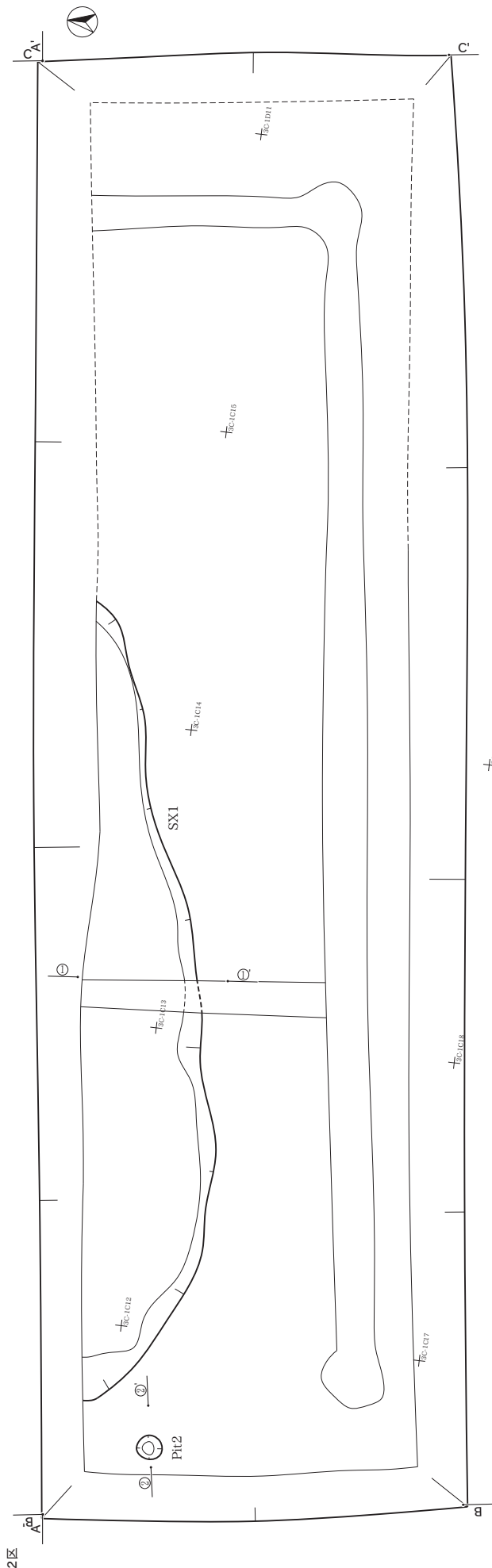
Pit53
1 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト 粘性強い しまりややあり 灰色砂質土
がブロック状に混じる

Pit54
1 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト 粘性あり しまりあり 灰色砂質土がブ
ロック状に混じる φ2~3mmの炭化物混じる

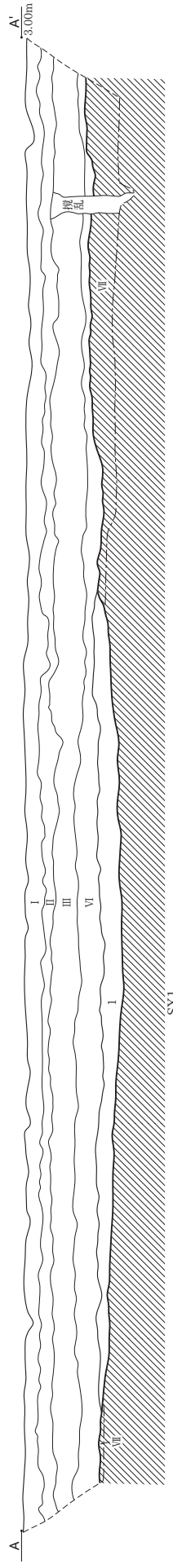


SB56

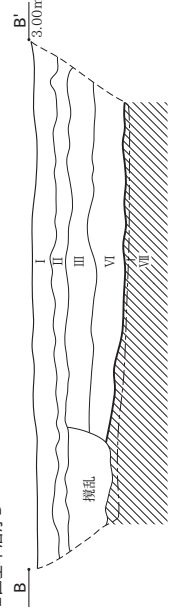




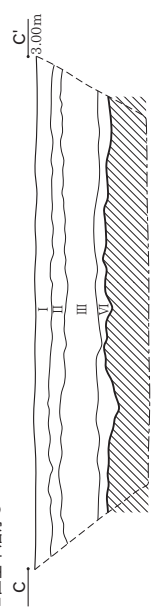
2区基本層序A



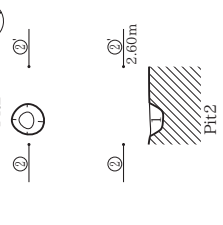
2区基本層序B



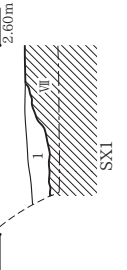
2区基本層序C



Pit2

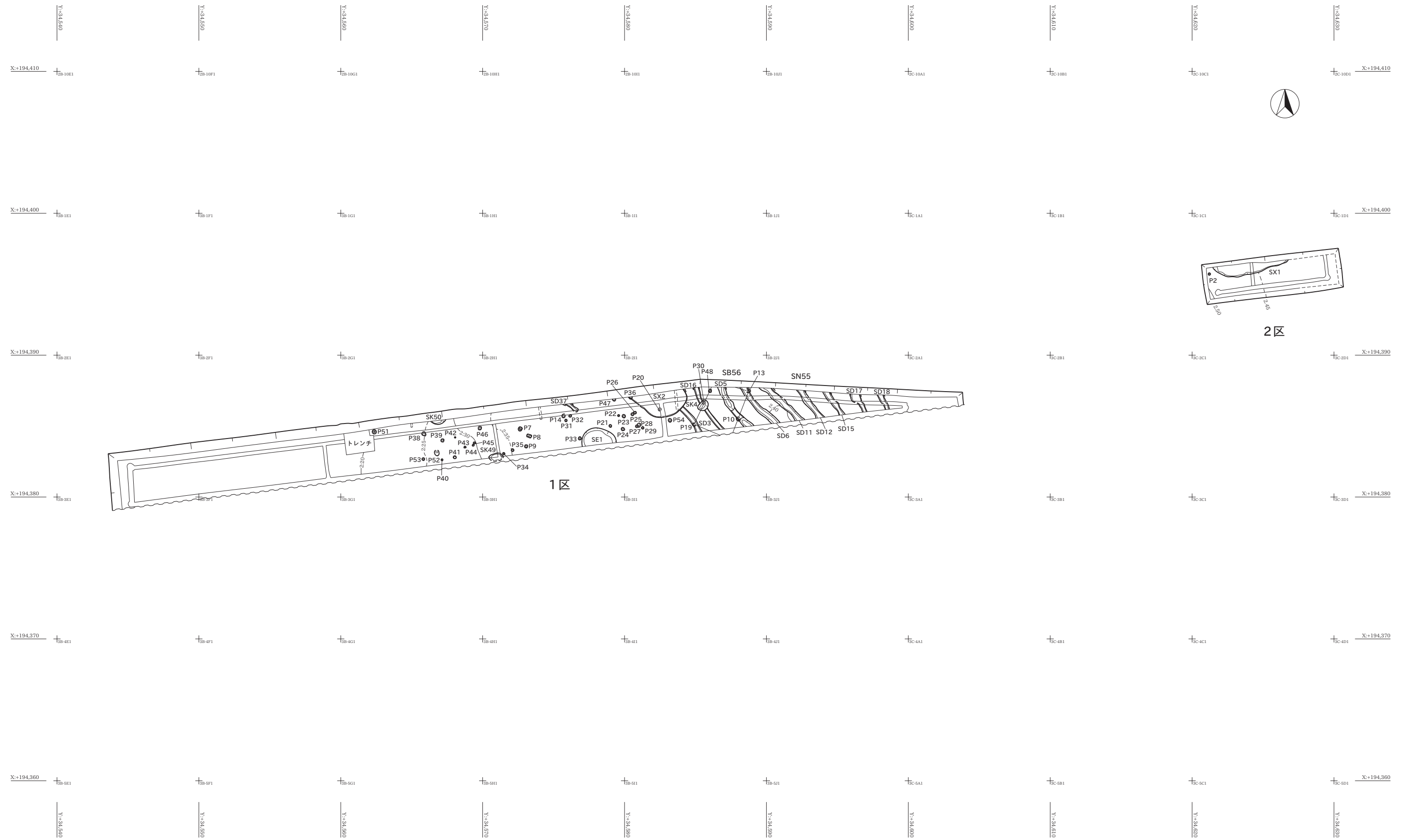


SX1

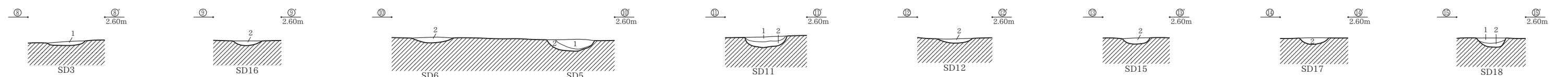
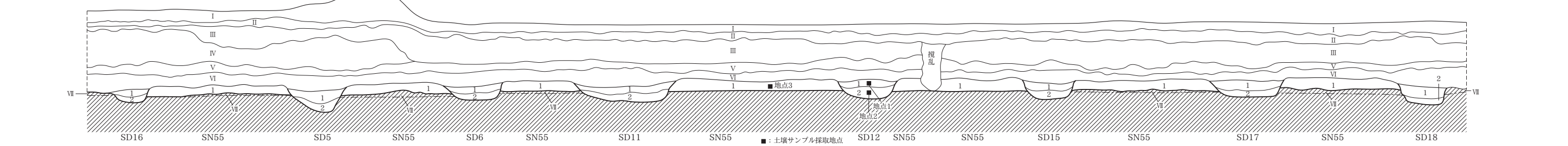
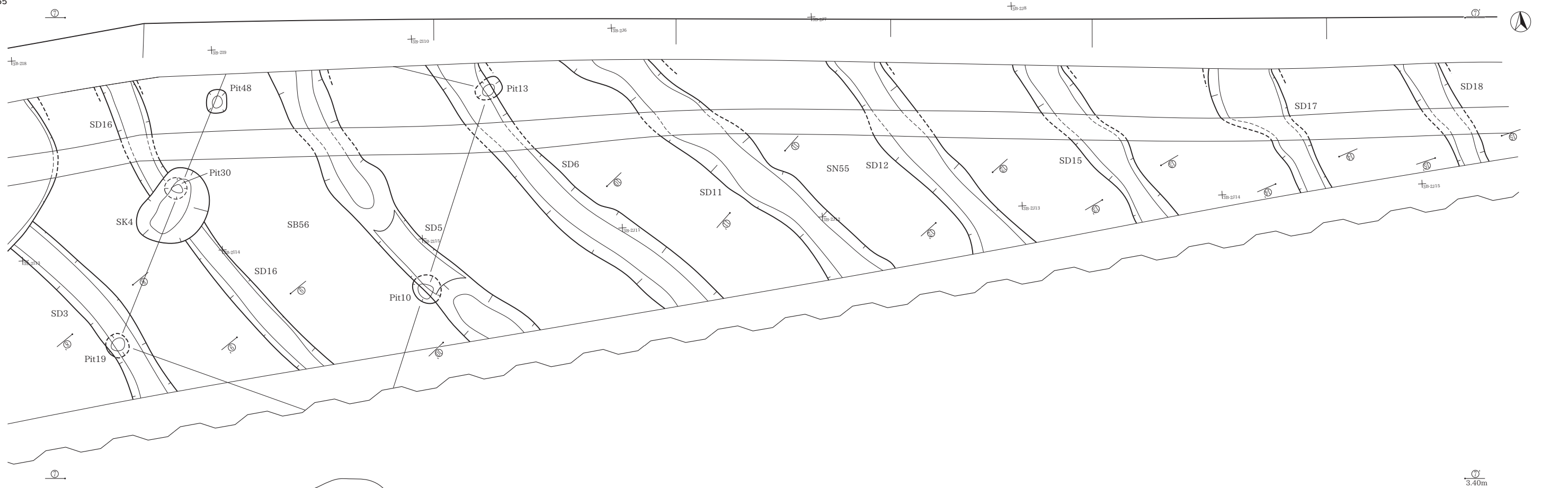


- 基本層序**
- I 前灰黄色 (2.5Y5/2) シルト 粘性ややあり しまりあり 黄褐色粒子混じる 表土
 - II 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト 粘性ややあり しまり強い 茶褐色粒子混じる 床土
 - III 褐灰色 (10YR4/1) シルト 粘性あり しまりあり 黄褐色粒子混じる
 - VI オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト 粘性強い しまりあり 黄褐色粒子混じる
 - VII 灰色 (7.5Y4/1) シルト 粘性強い しまり強い 灰色砂質土がブロック状に混じる 基盤層
- SX1**
- 1 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる
 - φ 1mmの炭化物混じる
- Pit2**
- 1 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト 粘性強い しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる

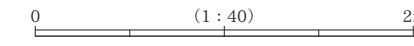




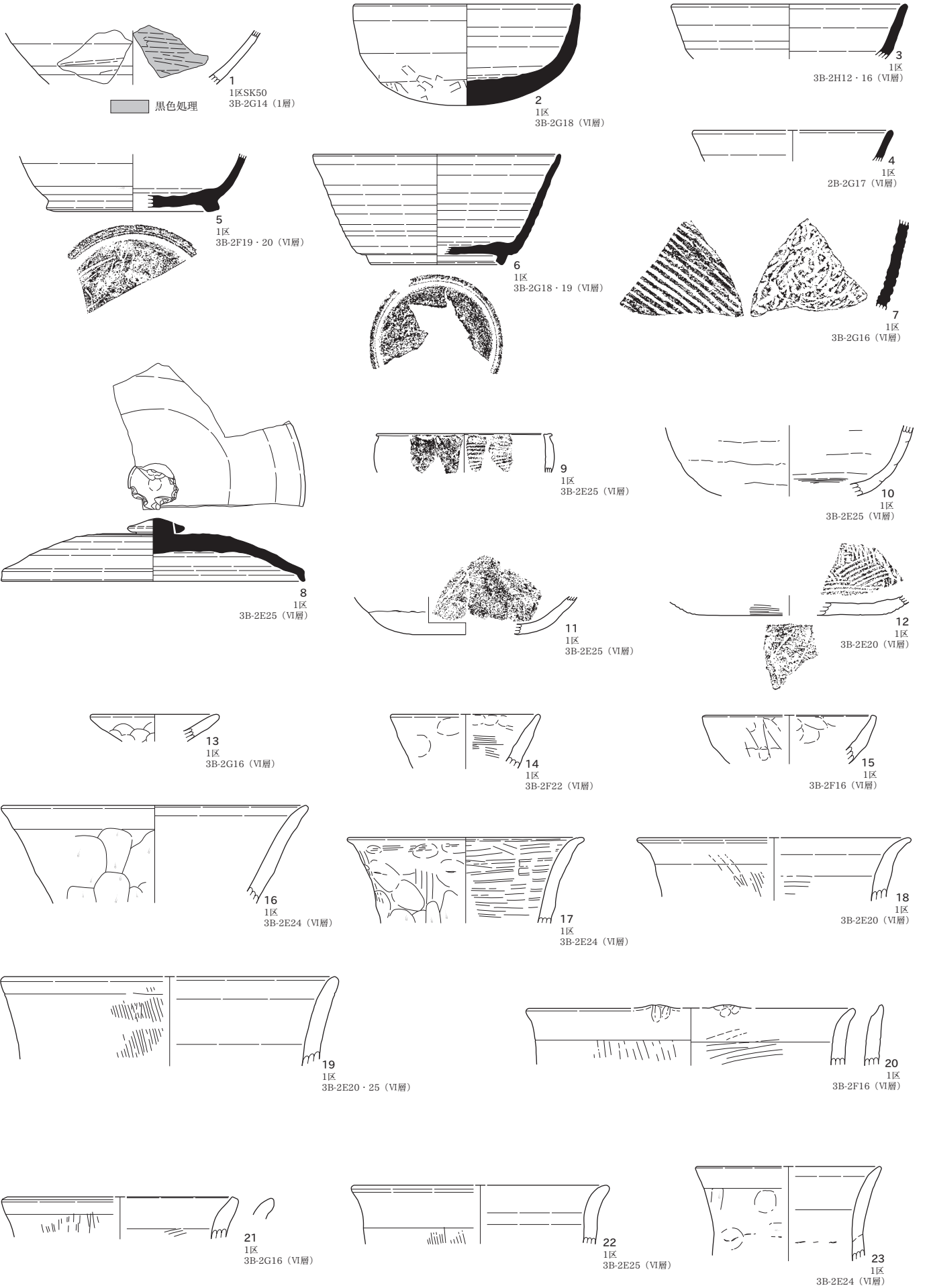
SN55

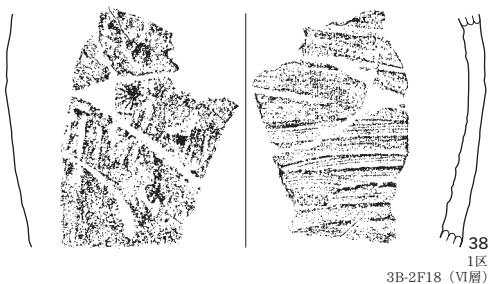
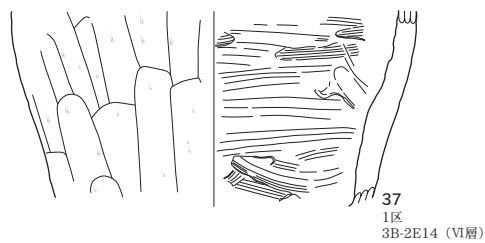
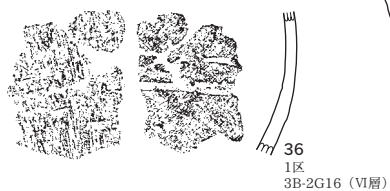
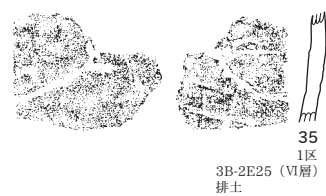
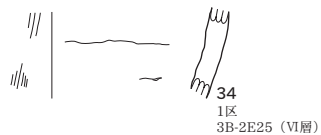
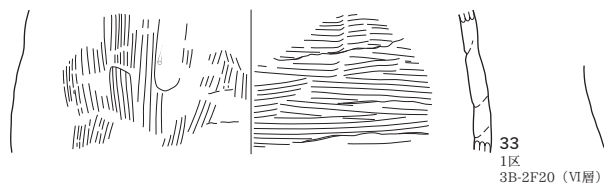
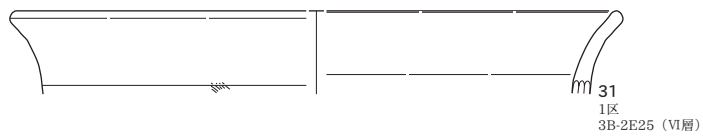
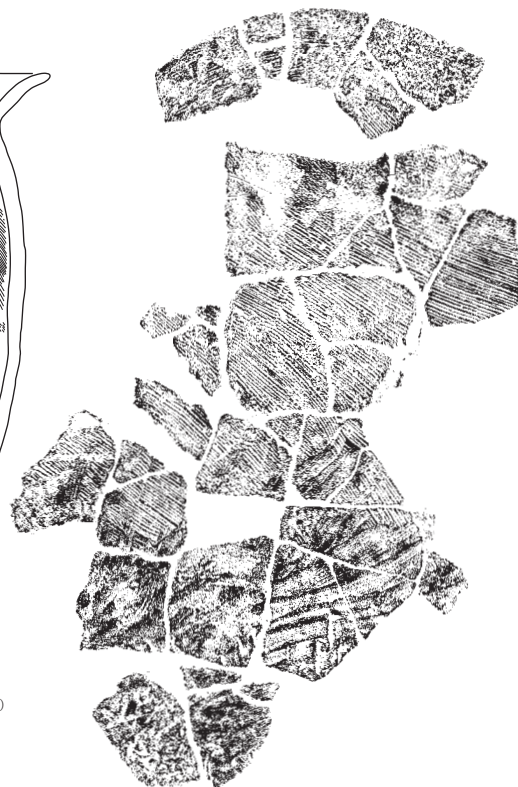
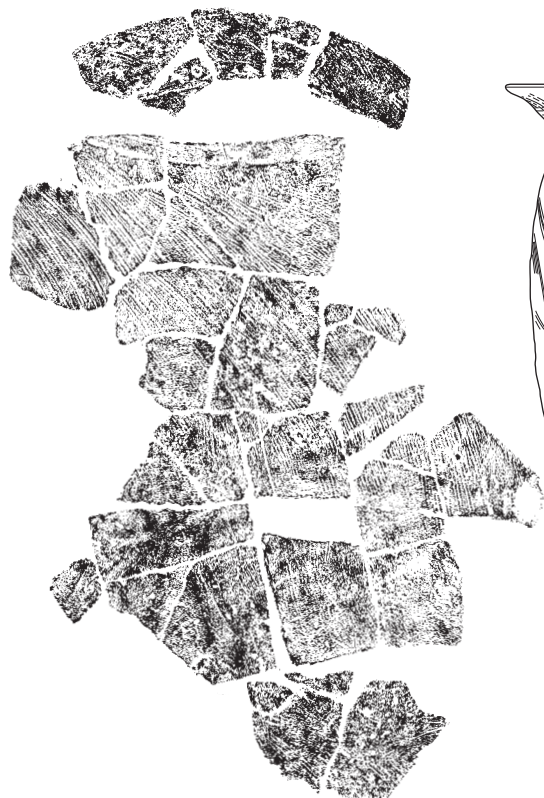
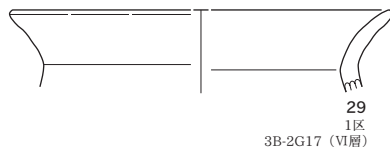
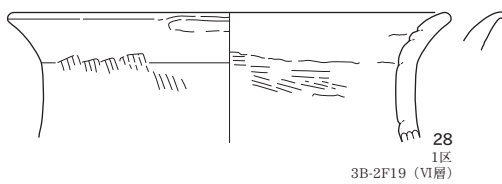
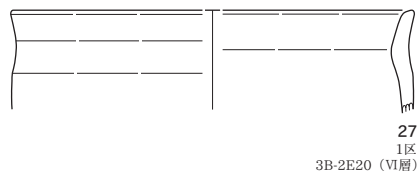
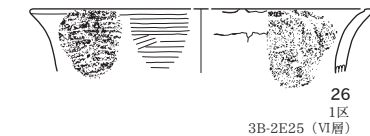
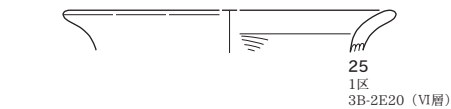
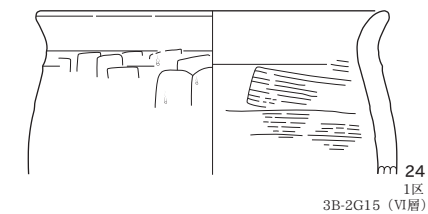


<p>SN55</p> <p>1 黒褐色 (10Y3/1) シルト φ1~2mmの炭化物少量混じる</p> <p>粘性強い しまりあり 暗灰色シルトがブロック状に混じる</p>	<p>SD3</p> <p>1 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 茶褐色粒子混じる</p>	<p>SD16</p> <p>1 黒褐色 (10YR3/1) シルト 2 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 粘性あり しまりあり 黒灰色シルトがブロック状に少量混じる</p>	<p>SD5</p> <p>1 黒褐色 (10YR3/1) シルト 2 褐灰色 (10YR4/1) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり φ2~3mmの炭化物混じる 粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる</p>	<p>SD6</p> <p>1 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 砂質シルト 2 オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト</p> <p>粘性あり しまりあり 粘性強い しまりあり 黄褐色粒子混じる</p>	<p>SD11</p> <p>1 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト 2 灰色 (5Y4/1) シルト</p> <p>粘性あり しまりあり 灰色砂質土がブロック状に混じる 粘性あり しまりあり 灰色砂質土がブロック状に混じる</p>	<p>SD12</p> <p>1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト 2 灰色 (5Y4/1) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり φ1mmの炭化物少量混じる 粘性強い しまりあり</p>	<p>SD15</p> <p>1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト 2 灰色 (7.5Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 粘性強い しまりあり φ1~3mmの炭化物少量混じる</p>	<p>SD17</p> <p>1 黒褐色 (2.5Y3/2) シルト φ1~2mmの炭化物混じる 2 灰色 (7.5Y4/1) 砂質シルト φ1~2mmの炭化物混じる</p> <p>粘性強い しまりあり 灰黄色砂質土がブロック状に混じる 粘性強い しまりあり 黄褐色粒子混じる</p>	<p>SD18</p> <p>1 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト 2 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり φ1~3mmの炭化物少量混じる 粘性強い しまりあり 暗灰色シルトがブロック状に混じる</p>	<p>Pit7</p> <p>1 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト 2 灰色 (5Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 茶褐色粒子混じる 粘性あり しまりやあり φ1mmの炭化物少量混じる</p>	<p>Pit8</p> <p>1 灰色 (5Y5/1) シルト 2 灰色 (5Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 黒灰色シルトがブロック状に混じる 粘性強い しまりあり</p>	<p>Pit9</p> <p>1 灰色 (10Y4/1) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 灰色砂質土がブロック状に混じる</p>	<p>Pit14</p> <p>1 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト 2 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 黄色粒子混じる 粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物混じる</p>	<p>Pit21</p> <p>1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト</p> <p>粘性あり しまりあり 灰色シルトがブロック状に混じる</p>	<p>Pit22</p> <p>1 灰色 (10Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 黒灰色シルトがブロック状に混じる</p>	<p>Pit23</p> <p>1 黄灰色 (2.5Y4/1) 砂質シルト</p> <p>粘性強い しまりあり φ1~2mmの炭化物少量混じる</p>	<p>Pit24</p> <p>1 灰色 (7.5Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり</p>	<p>Pit25</p> <p>1 黄灰色 (2.5Y4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり 黄色粒子混じる</p>	<p>Pit26</p> <p>1 褐灰色 (10YR4/1) シルト</p> <p>粘性強い しまりあり</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------



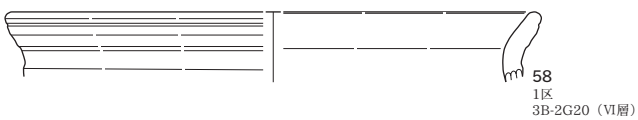
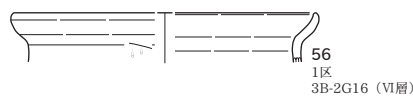
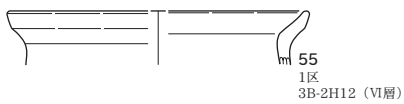
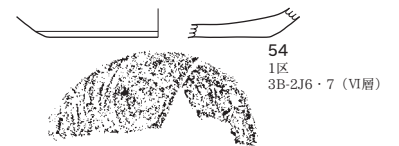
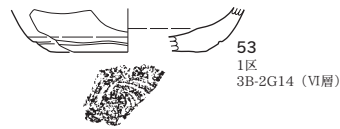
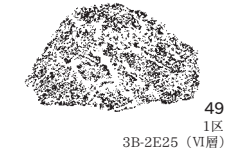
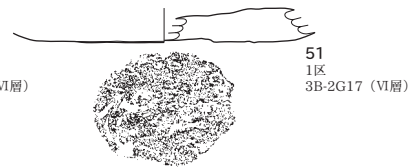
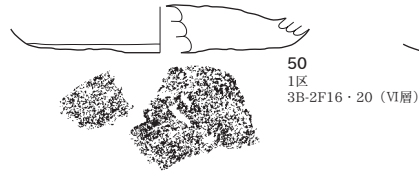
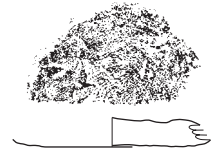
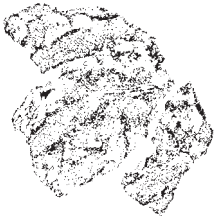
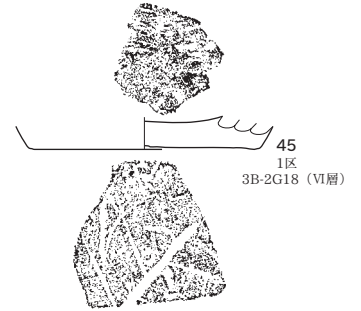
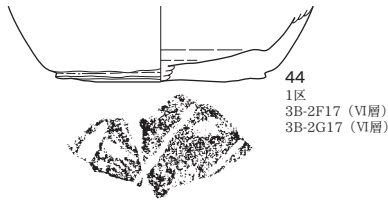
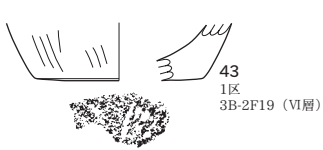
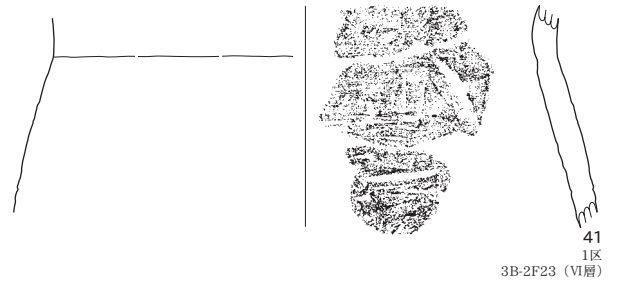
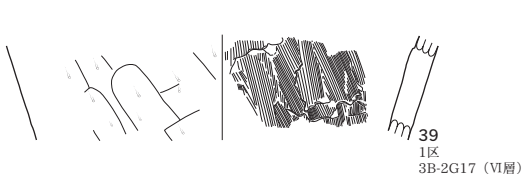
本発掘調査出土土器



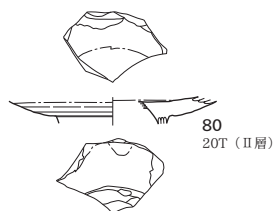
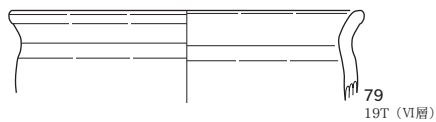
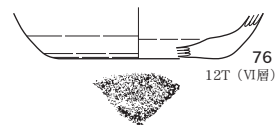
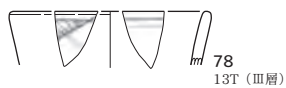
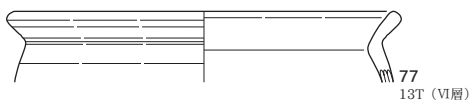
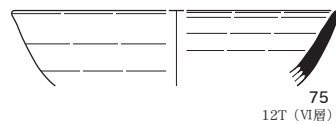
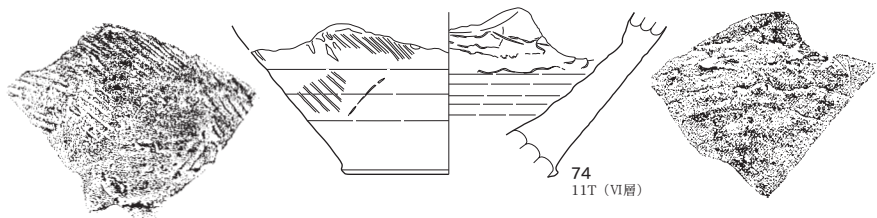
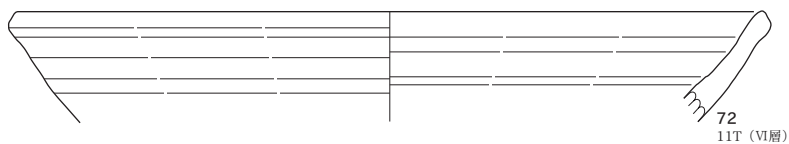
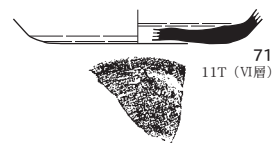
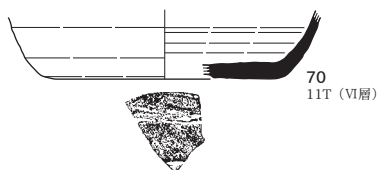
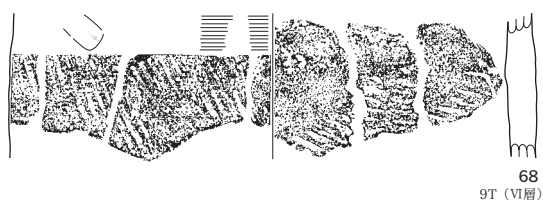
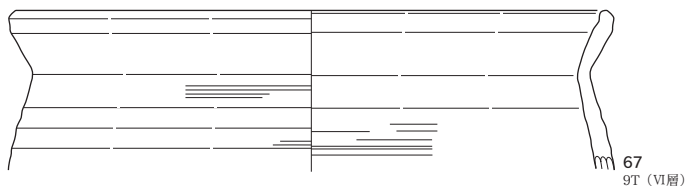
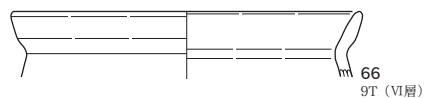
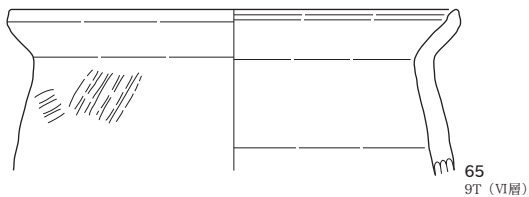
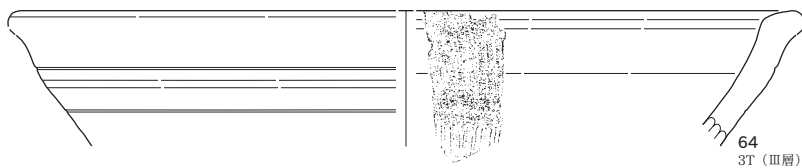
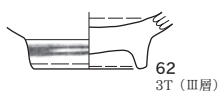
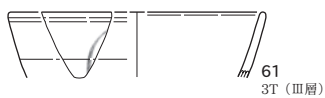


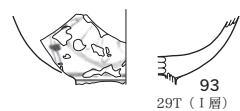
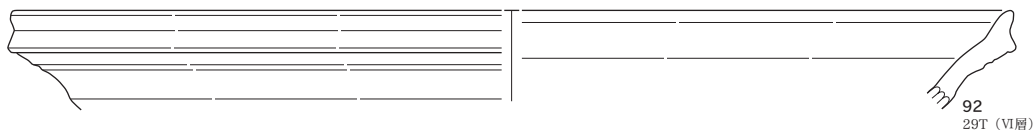
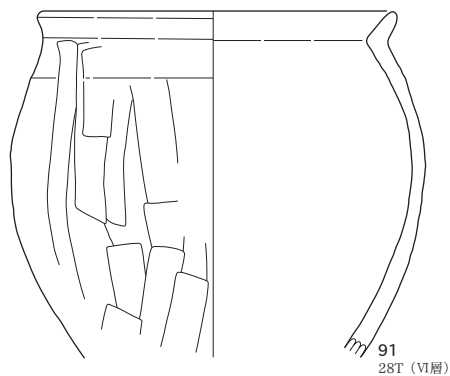
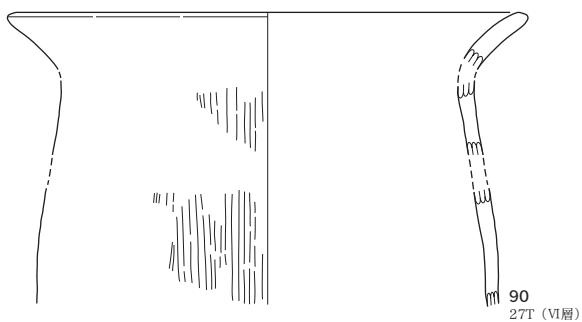
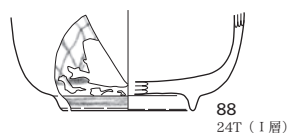
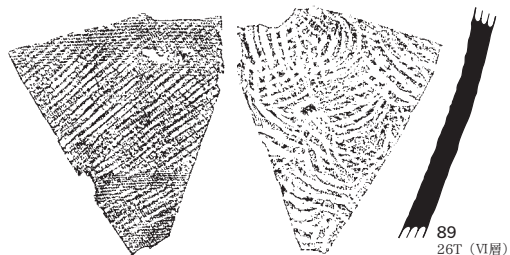
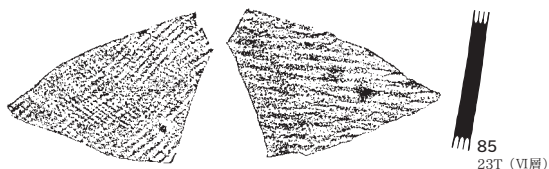
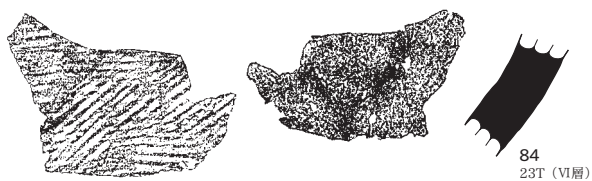
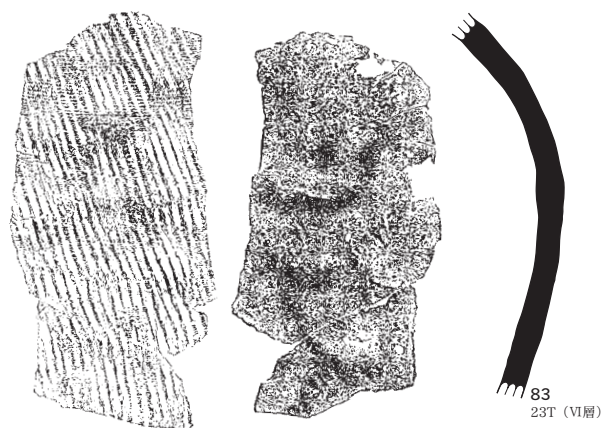
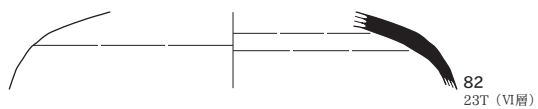
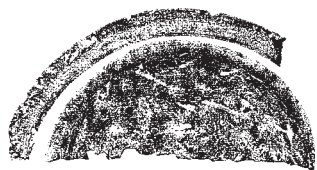
(30) 0 (1:4) 10cm

(その他) 0 (1:3) 10cm

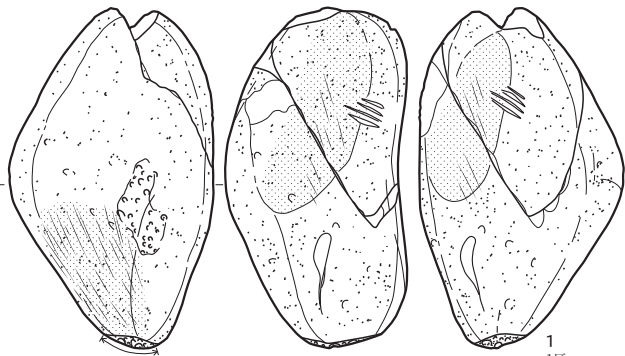


確認調査出土土器

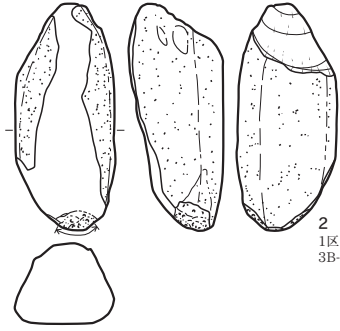




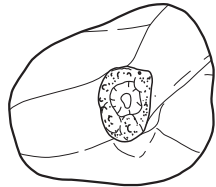
本発掘調査出土石製品



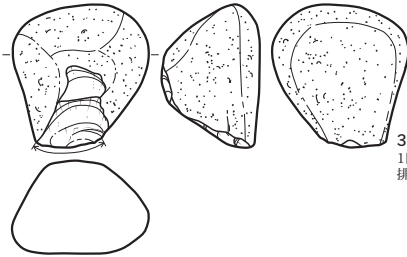
1
1区
3B-2G14 (VI層)



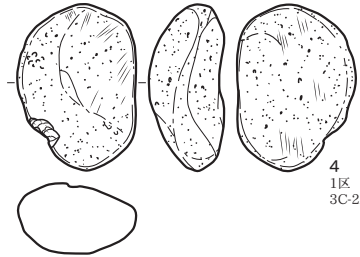
2
1区
3B-2G19 (VI層)



砥面



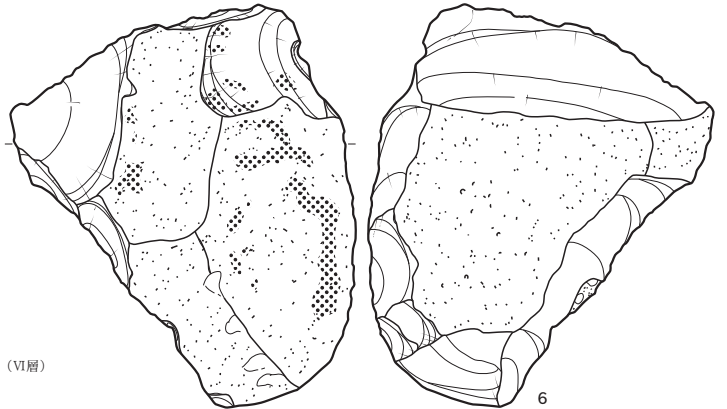
3
1区
排土



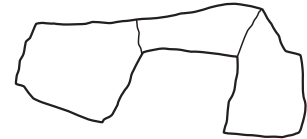
4
1区
3C-2A7 (III層)



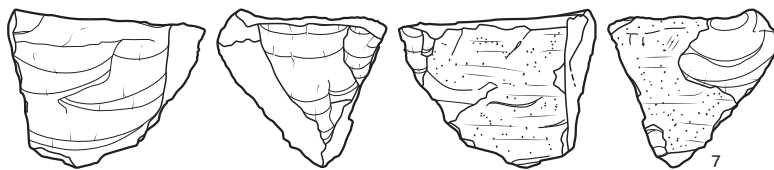
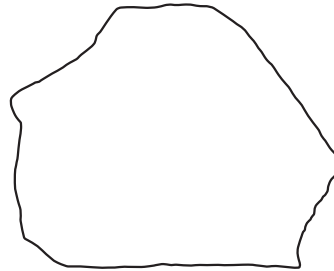
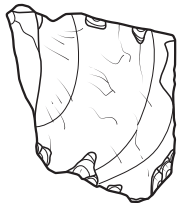
5
1区
3B-2E25 (VI層)



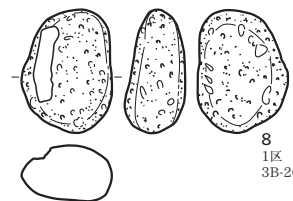
6
1区Pit51
3B-2G12 (1層)



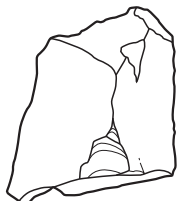
炭化物付着



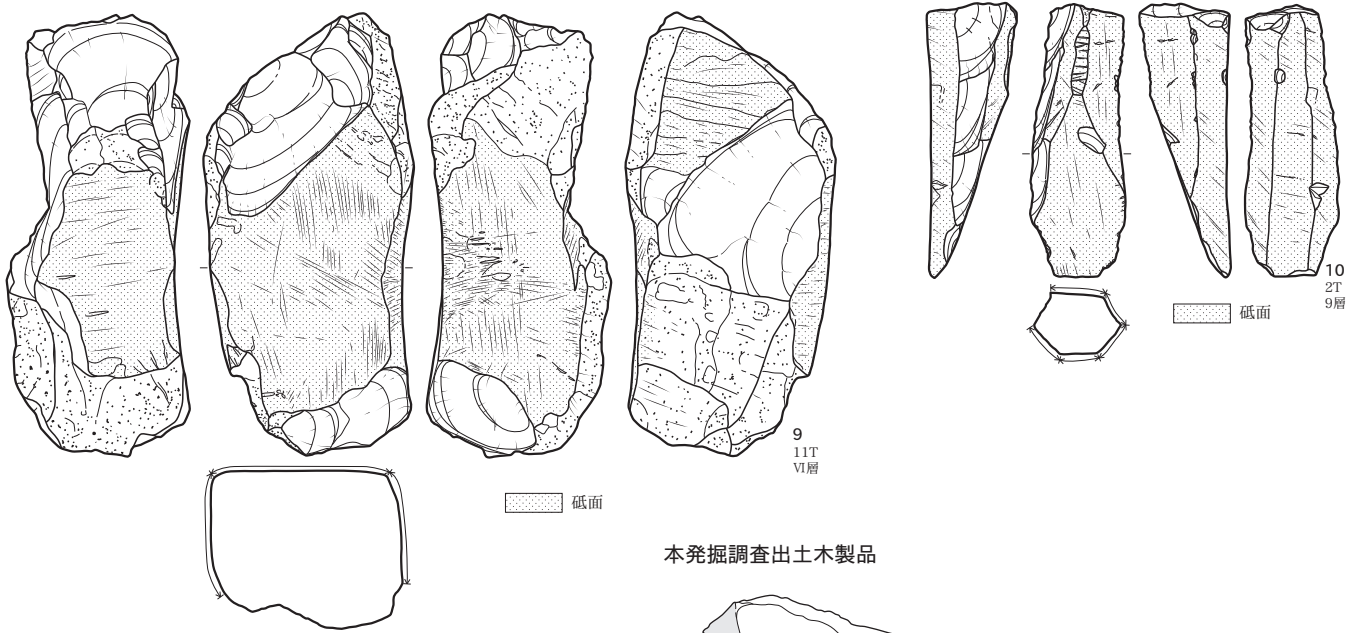
7
1区
3B-2H13 (VI層)



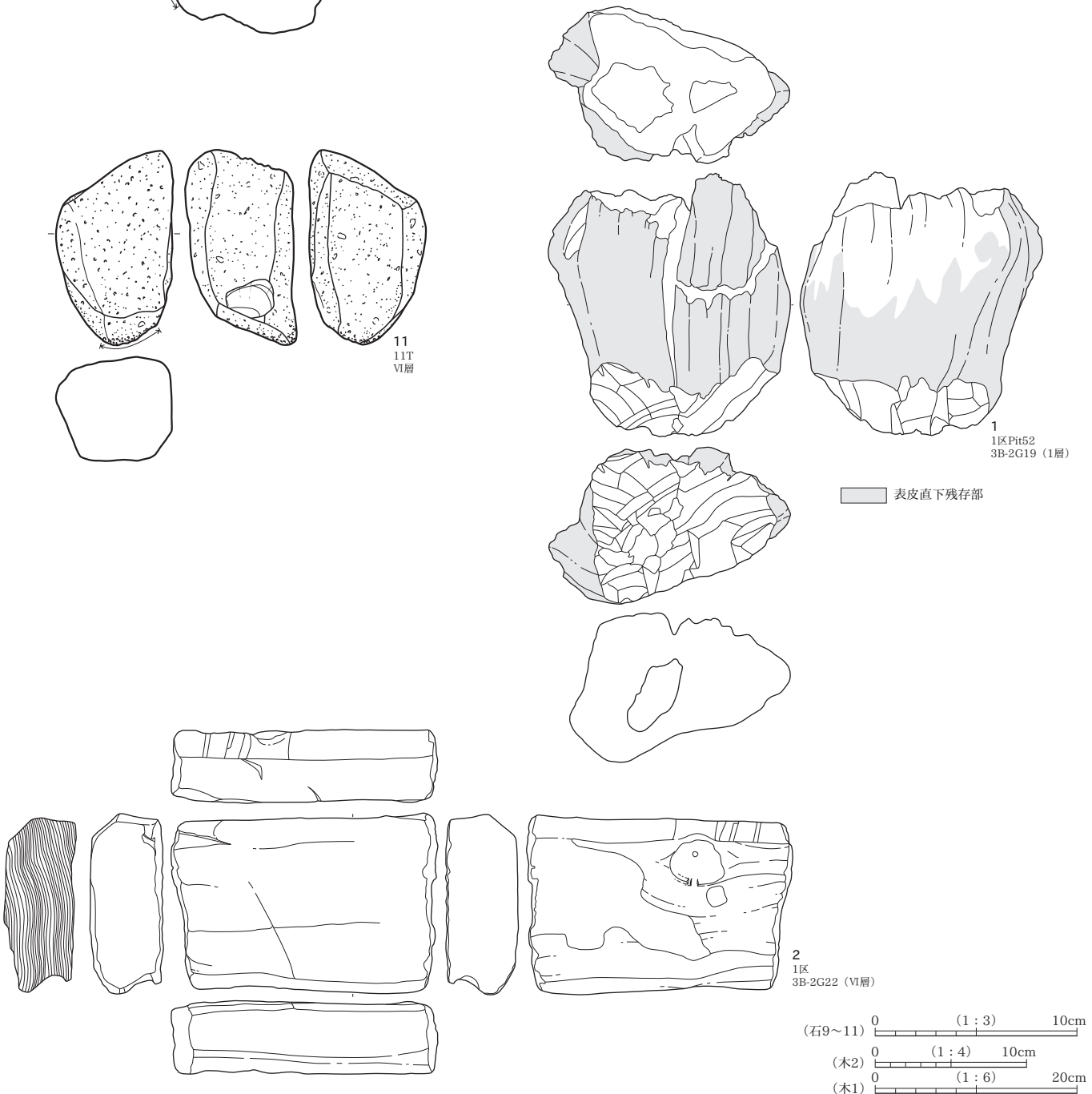
8
1区
3B-2G20 (VI層)



確認調査出土石製品



本発掘調査出土木製品





● 赤縮砂山遺跡



赤縮砂山遺跡遠景（東から）



1・2区 空中写真1（北東から）



1・2区 空中写真2(北西から)



1・2区 空中写真3(南から)



1区 調査前現況(西から)



1区 調査前現況(東から)



1区 基本層序 A(東から)



1区 基本層序 B(南から)



1区 基本層序 C(南から)



1区 基本層序 D(南から)



1区 基本層序 E(南から)



1区 基本層序 F(南から)



1区 基本層序 G (南から)



1区 基本層序 H (南から)



1区 SE1 土層断面 (西から)



1区 SE1 完掘状況 (西から)



1区 SK4 土層断面 (南東から)



1区 SK4・Pit30 完掘状況 (南東から)



1区 SK49 土層断面 (東から)



1区 SK49 完掘状況 (東から)



2区 調査前現況(東から)



2区 調査前現況(西から)



2区 基本層序 A(南から)



2区 基本層序 B(東から)



2区 基本層序 C(西から)



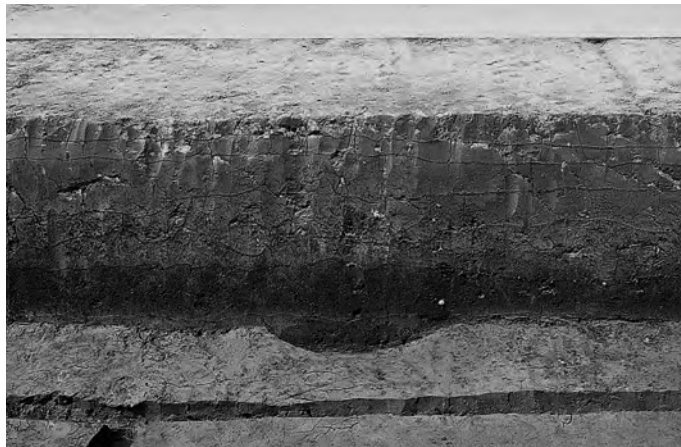
2区 SX1 土層断面(西から)



2区 SX1 土層断面(南から)



2区 SX1 完掘状況(南から)



1区 SK50 土層断面(南から)



1区 SK50 完掘状況(南から)



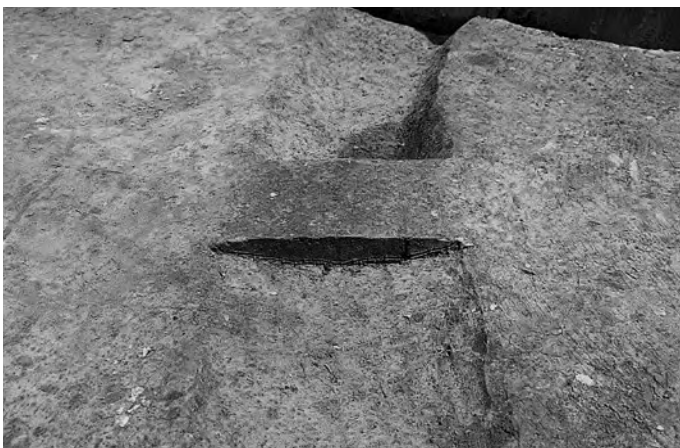
1区 SX2 · Pit20 土層断面(東から)



1区 SX2 · Pit36 土層断面・完掘状況(南から)



1区 SX2 · Pit20 完掘状況(東から)



1区 SD3 土層断面(北西から)



1区 SD16 土層断面(北西から)



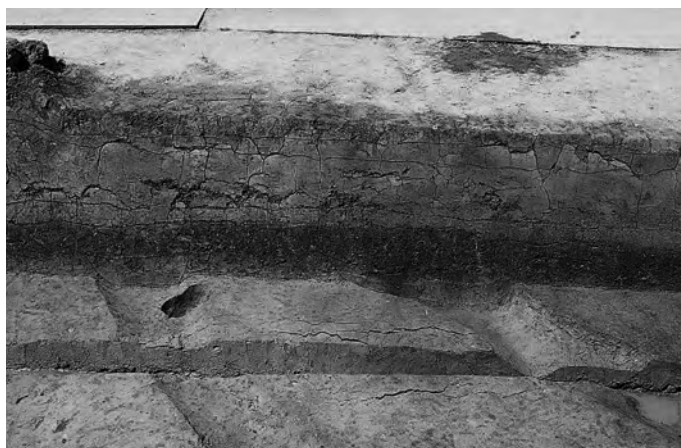
1区 SD5 · 6 土層断面(北西から)



1区 SD5・16 土層断面(南から)



1区 SD11 土層断面(北西から)



1区 SD6・11 土層断面(南から)



1区 SD12 土層断面(北西から)



1区 SD15 土層断面(北西から)



1区 SD12・15 土層断面(南から)



1区 SD17 土層断面(北西から)



1区 SD18 土層断面(北西から)



1区 SD17・18 土層断面(南から)



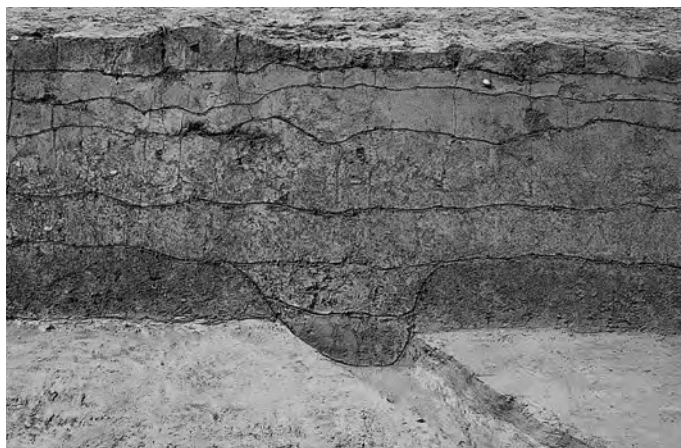
1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況(南西から)



1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況(北西から)



1区 SN55 (SD3・5・6・11・12・15～18) 完掘状況(南から)



1区 SD37 土層断面 A(南から)



1区 SD37 土層断面 B(南東から)



1区 SD37 完掘状況(南東から)



1区 SB56 完掘状況(北東から)



1区 Pit10 (SB56) 完掘状況 (北西から)



1区 Pit13 (SB56) 土層断面 (南東から)



1区 Pit13 (SB56) 完掘状況 (南東から)



1区 Pit19 (SB56) 土層断面 (北西から)



1区 Pit19 (SB56) 完掘状況 (北西から)



1区 Pit30 (SB56) 完掘状況 (南東から)



1区 Pit7 土層断面 (北西から)



1区 Pit7 完掘状況 (北西から)



1区 Pit8 土層断面(北東から)



1区 Pit8 完掘状況(北東から)



1区 Pit9 土層断面(北から)



1区 Pit9 完掘状況(北から)



1区 Pit14 土層断面(西から)



1区 Pit31 土層断面(西から)



1区 Pit32 土層断面(西から)



1区 Pit14・31・32 完掘状況(西から)



1区 Pit21 土層断面(北東から)



1区 Pit21 完掘状況(北東から)



1区 Pit22 土層断面(南東から)



1区 Pit23 土層断面(南東から)



1区 Pit22・23 完掘状況(南から)



1区 Pit24 土層断面(北東から)



1区 Pit24 完掘状況(北東から)



1区 Pit25・26 土層断面(南東から)



1区 Pit25・26 完掘状況(南東から)



1区 Pit27・28 土層断面(南東から)



1区 Pit29 土層断面(南東から)



1区 Pit27～29 完掘状況(南東から)



1区 Pit33 土層断面(西から)



1区 Pit33 完掘状況(西から)



1区 Pit34 土層断面(東から)



1区 Pit34 完掘状況(東から)



1区 Pit35 土層断面(東から)



1区 Pit35 完掘状況(東から)



1区 Pit38 土層断面(東から)



1区 Pit38 完掘状況(東から)



1区 Pit39 土層断面(北から)



1区 Pit39 完掘状況(北から)



1区 Pit40 土層断面(東から)



1区 Pit40 完掘状況(東から)



1区 Pit41 土層断面(東から)



1区 Pit41 完掘状況(東から)



1区 Pit42 土層断面(東から)



1区 Pit42 完掘状況(東から)



1区 Pit43 土層断面(東から)



1区 Pit43 完掘状況(東から)



1区 Pit44・45 土層断面(南東から)



1区 Pit44・45 完掘状況(南東から)



1区 Pit46 土層断面(東から)



1区 Pit46 完掘状況(東から)



1区 Pit47 土層断面・完掘状況(南から)



1区 Pit48 土層断面(南から)



1区 Pit48 完掘状況(南から)



1区 Pit51 土層断面(南から)



1区 Pit51 完掘状況(南から)



1区 Pit52 柱根検出状況(北から)



1区 Pit52 土層断面(北から)



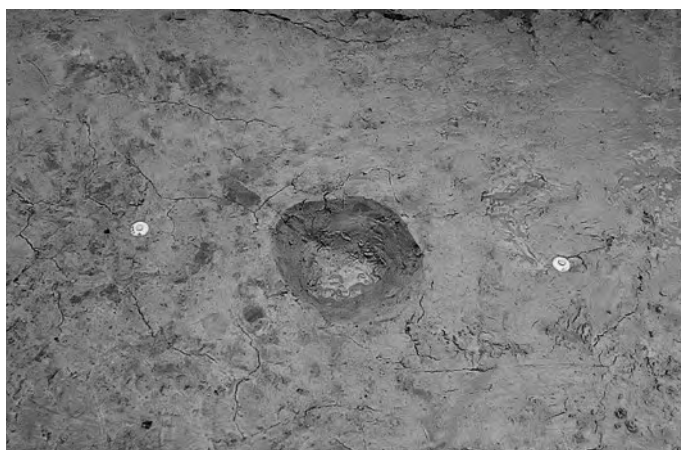
1区 Pit52 完掘状況1(北から)



1区 Pit52 完掘状況2(北から)



1区 Pit53 土層断面(北から)



1区 Pit53 完掘状況(北から)



1区 Pit54 土層断面(南から)



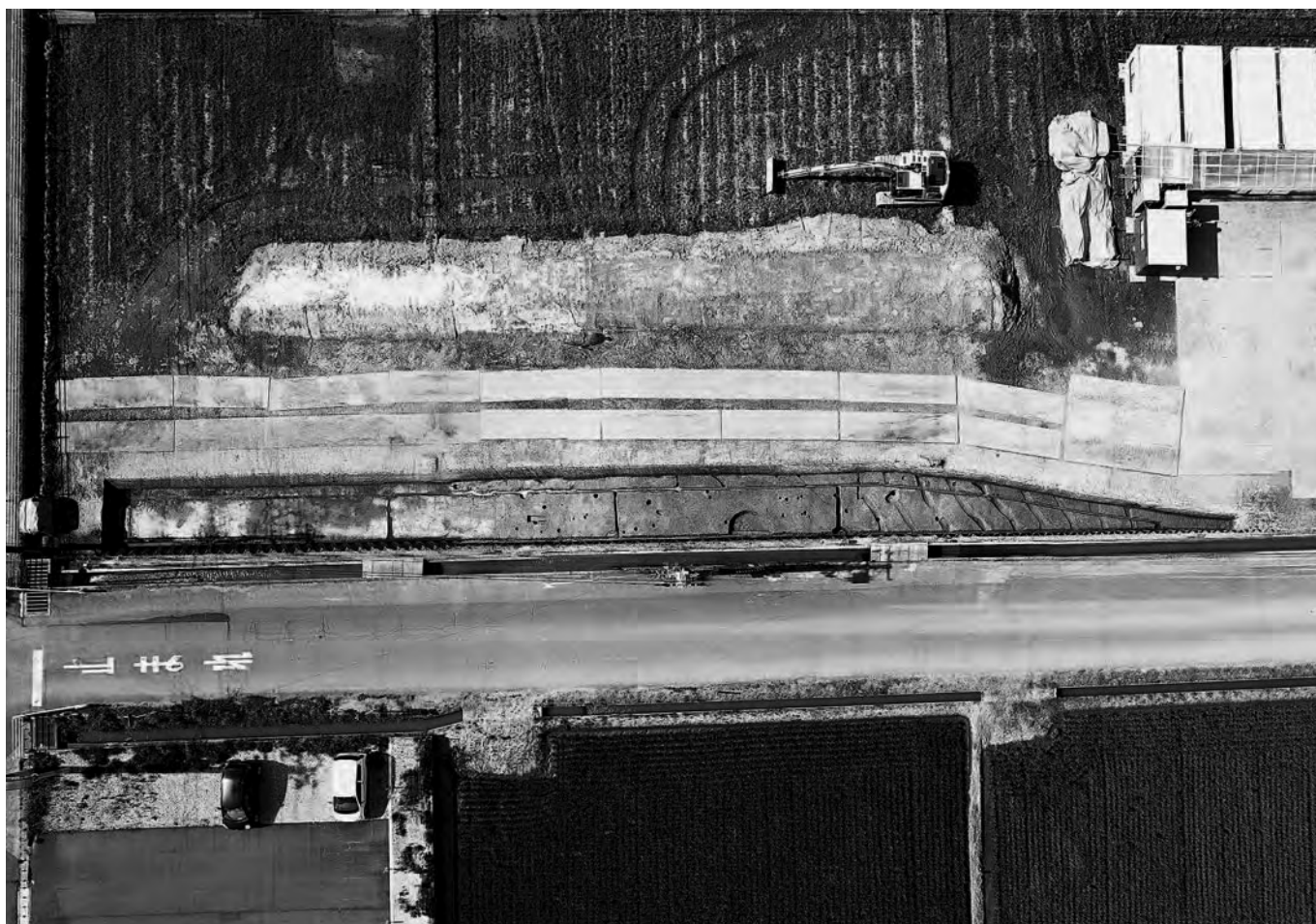
1区 Pit54 完掘状況(南から)



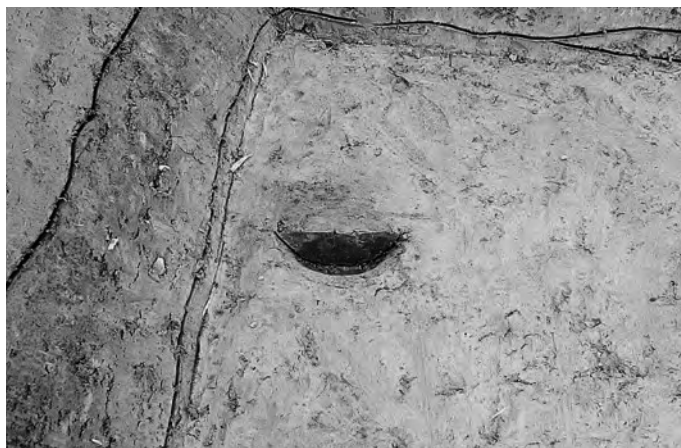
1区 木製品出土状況(北から)



1区 完掘状況(東から)



1区 完掘状況(北が上)



2区 Pit2 土層断面(南から)



2区 Pit2 完掘状況(南から)



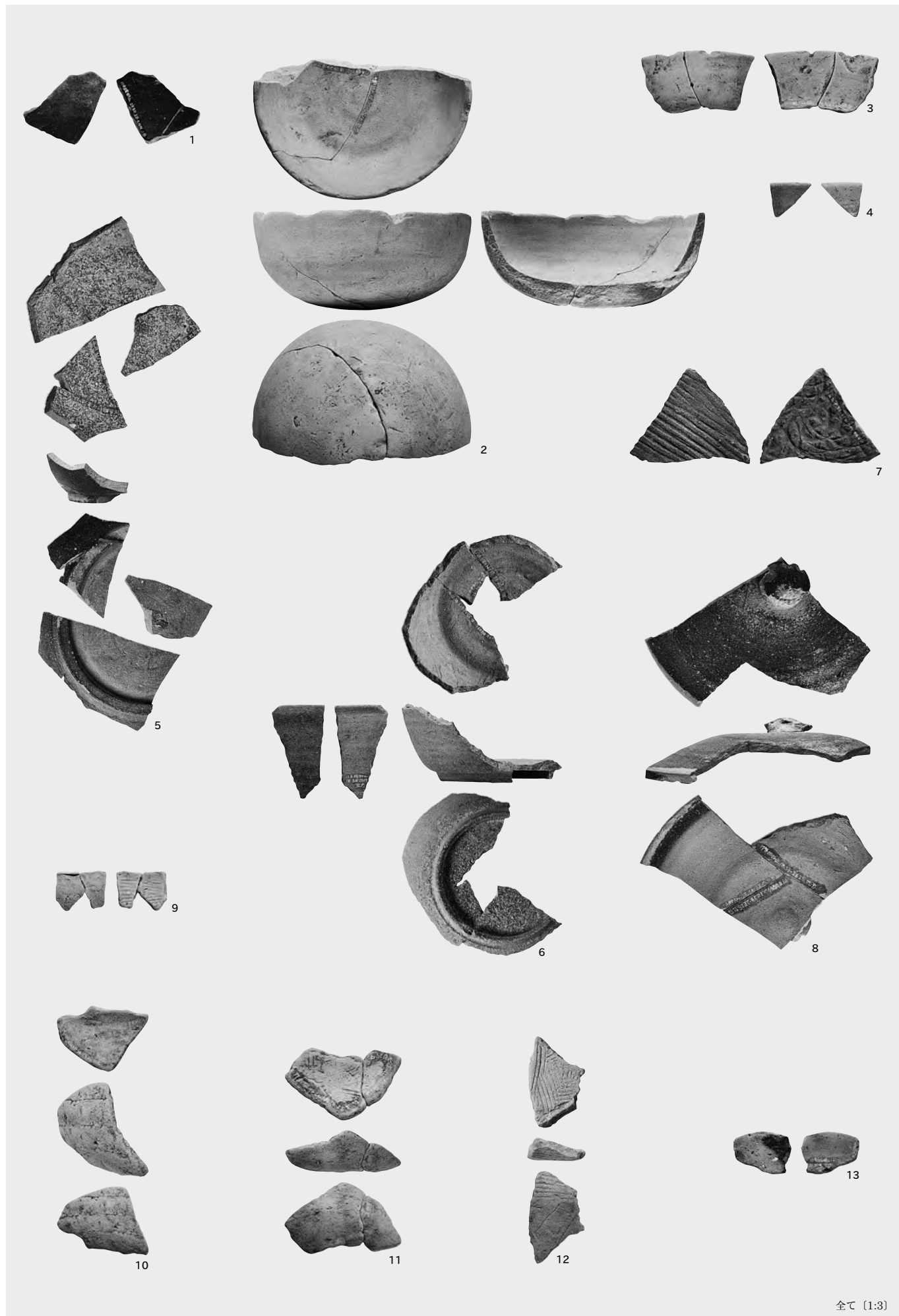
2区 完掘状況(北から)

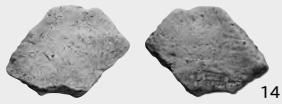


2区 完掘状況(南西から)



2区 完掘状況(西から)





14



15



16



17



18



19



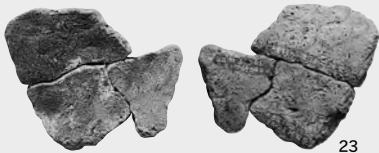
20



21



22



23



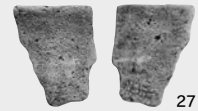
24



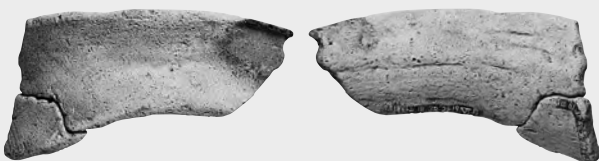
25



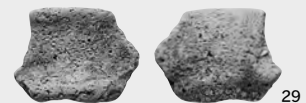
26



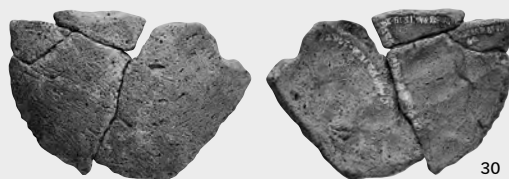
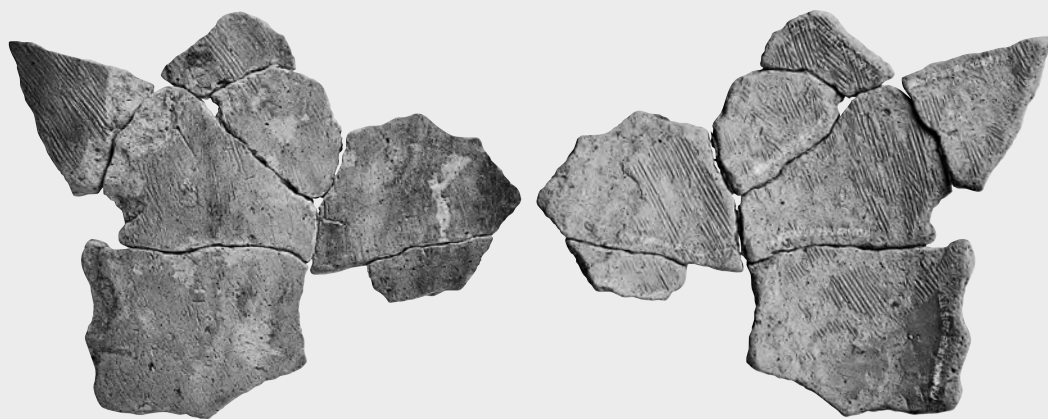
27



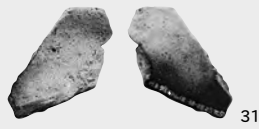
28



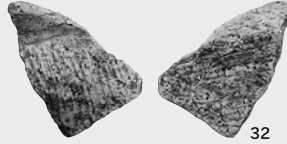
29



30



31



32



33



34



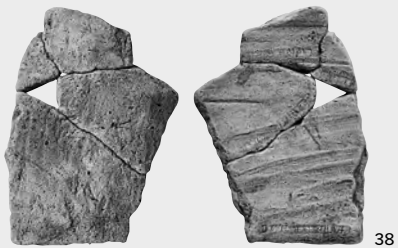
35



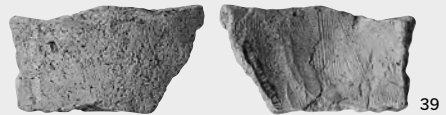
36



37



38



39



40



41



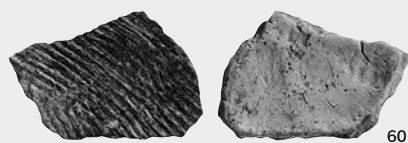
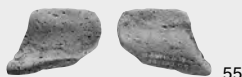
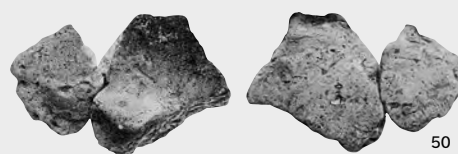
42

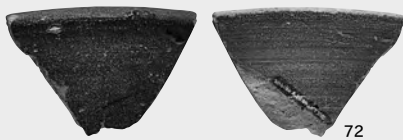
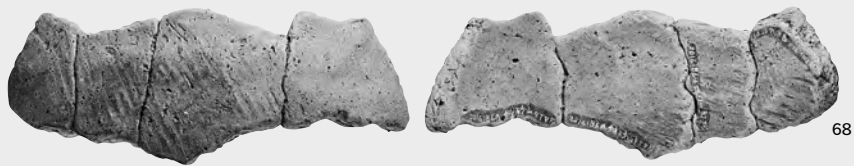
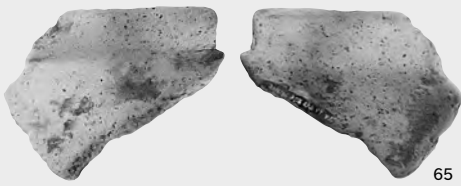
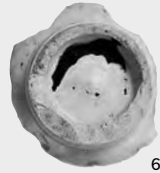
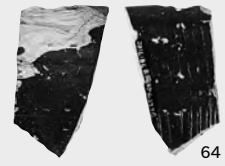
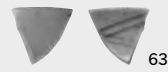


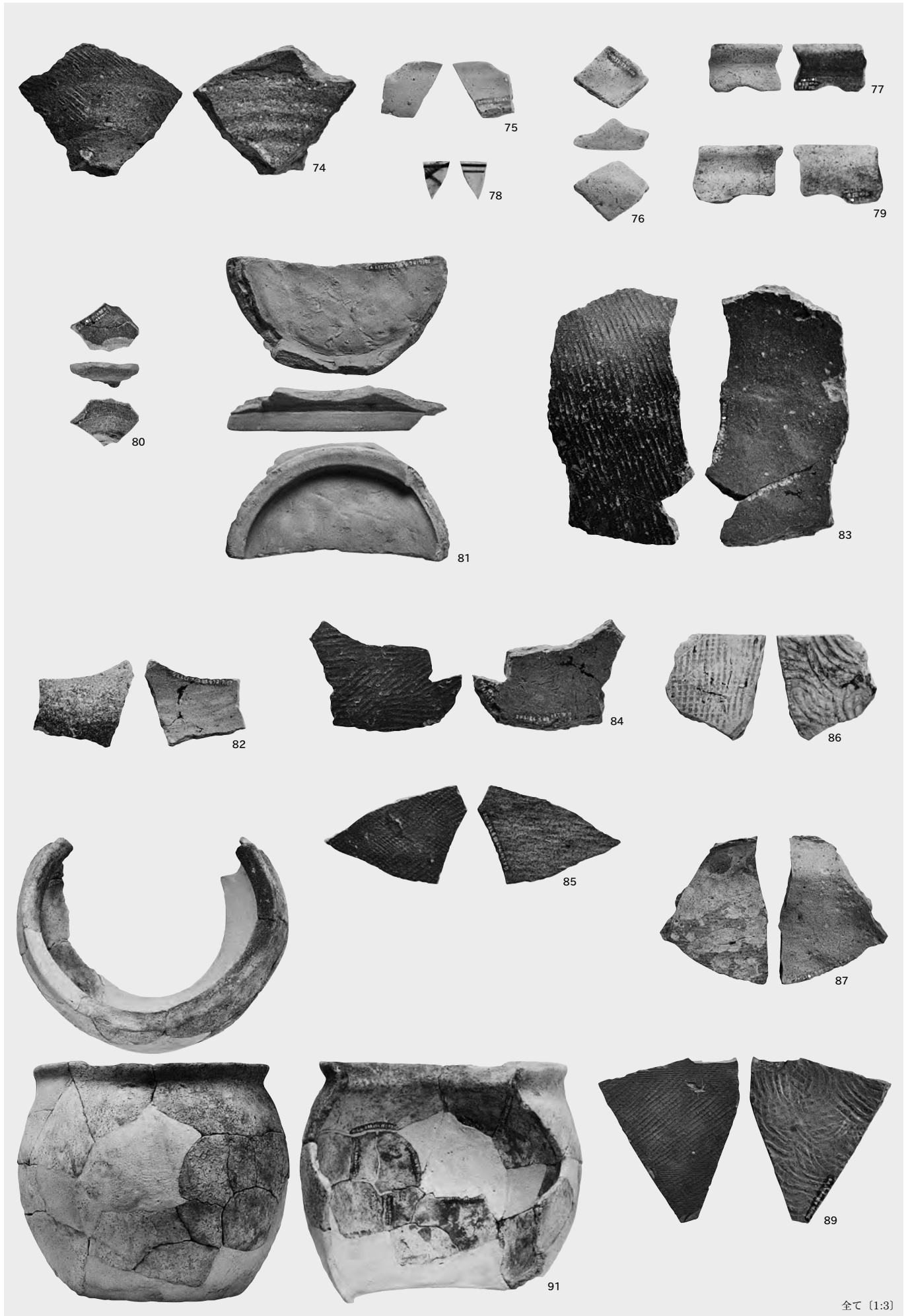
43

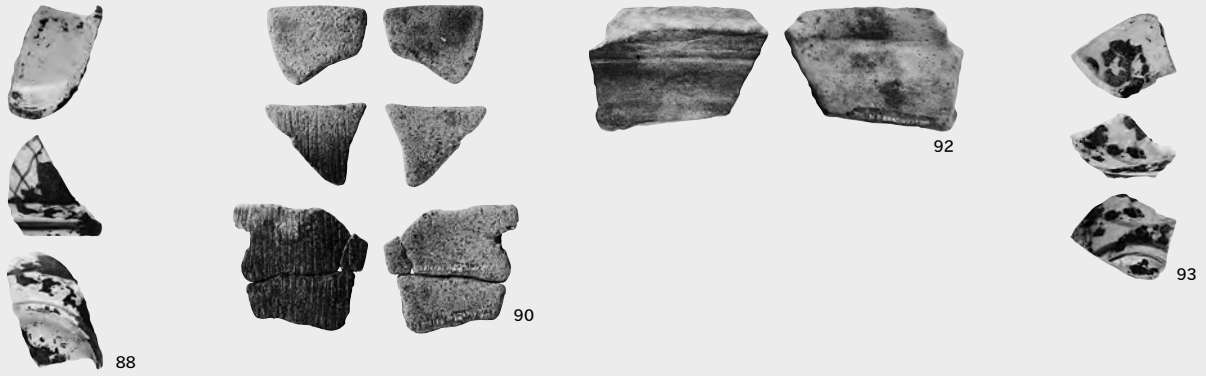


44

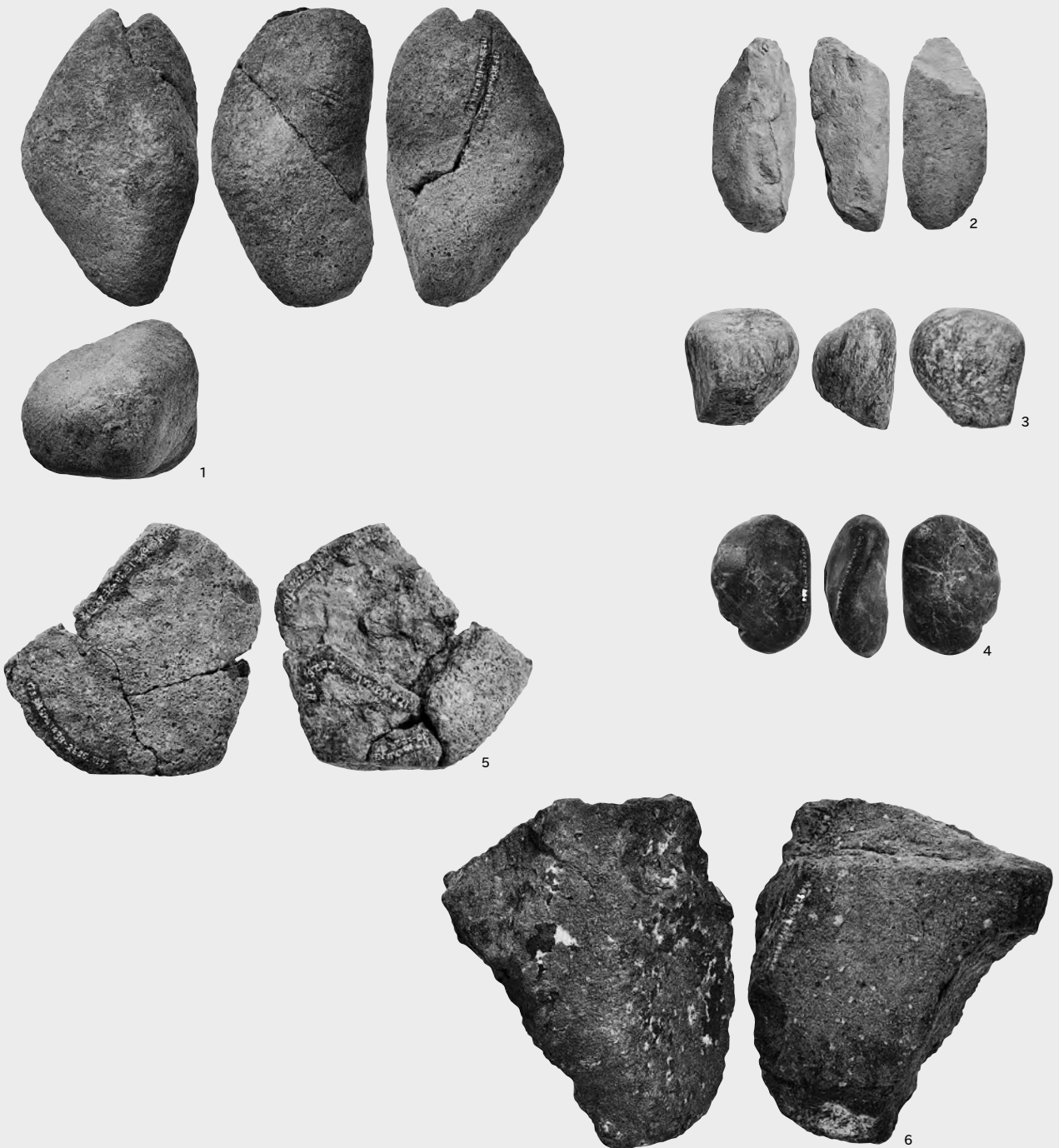








石製品





7



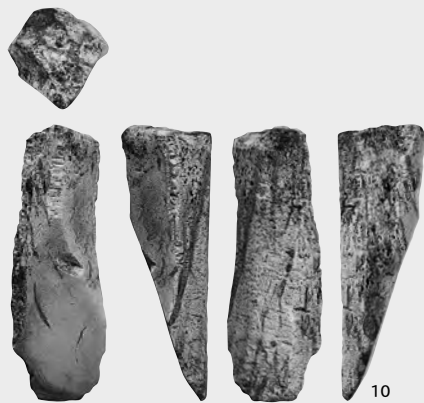
8



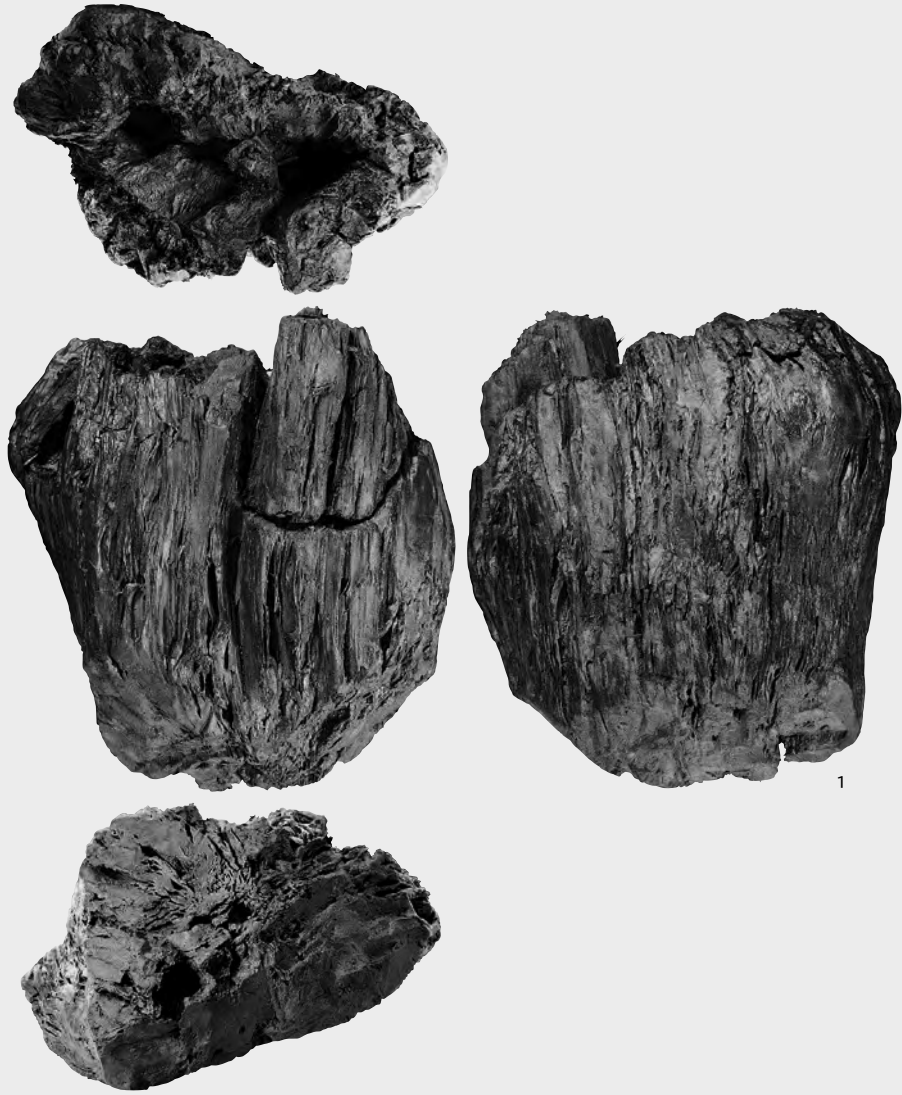
9



11



10



1 [1:4]
2 [1:3]

報告書抄録

ふりがな	あかさびすなやまいせき だいごじちようさ							
書名	赤縮砂山遺跡 第5次調査							
副書名	商業施設建設に伴う赤縮砂山遺跡第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	新潟市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	立木宏明・澤野慶子・奈良佳子(新潟市文化財センター)・株式会社古環境研究所・株式会社加速器分析研究所							
編集機関	新潟市文化スポーツ部歴史文化課文化財センター							
所在地	〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1 TEL.025-378-0480							
発行機関	新潟市教育委員会							
発行年月日	西暦 2019年3月8日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかさびすなやま 赤縮砂山遺跡	新潟県新潟市西蒲区 あかさびすなやま 赤縮字砂山 331-3 番地ほか	15108	778	37° 45' 04"	138° 53' 32"	20170601 ~ 20170815	240.64 m ²	商業施設建設に伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
赤縮砂山遺跡	集落遺跡	飛鳥時代 奈良時代 平安時代	井戸・土坑・性格不明遺構・溝・小土坑・掘立柱建物・畑跡		須恵器・土師器・石製品・木製品			
要約	<p>赤縮砂山遺跡は西川右岸の自然堤防上に立地し、遺跡から約2km北東に「鎧瀧」が1960年代まで広がっていた。現況は水田・畑である。推定遺跡範囲は、南北約100m、東西約250mで、約2.5ha程の広さである。本発掘調査地点は、遺跡範囲南端に位置する。出土遺物の大半は、奈良・平安時代の土師器・須恵器である。土器の時期は、8世紀前葉を前後する時期と9世紀代の概ね2時期に分かれる。1区東側に1間×2間程度の小型掘立柱建物を確認した。建物の廃絶後に畑が形成されている。また、小土坑群周辺に井戸が構築されている。</p> <p>遺跡の性格としては、8世紀前葉前後に平野に進出し、9世紀代まで生活した集落跡の一部と考えられる。また、旧河道などは確認されなかったが、潟湖やそこに流れ込む小河川を利用しての内水面交通の要衝的な性格を帯びた遺跡の可能性もある。</p>							

赤縮砂山遺跡 第5次調査

— 商業施設建設に伴う赤縮砂山遺跡第3次発掘調査報告書 —

2019年3月7日印刷
2019年3月8日発行

編集 新潟市歴史文化課文化財センター
〒950-1122 新潟市西区木場 2748 番地 1
TEL 025 (378) 0480

発行 新潟市教育委員会
〒951-8550 新潟市中央区学校町通一番町 602 番地 1
TEL 025 (228) 1000

印刷・製本 株式会社ハイグラフィック
〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号
TEL 025 (233) 0321

赤縮砂山遺跡 第5次調査
 ー商業施設建設に伴う赤縮砂山遺跡第3次発掘調査報告書ー
 正 誤 表

頁	行等	誤	正
22	下から5行目	[坂井ほか1989a]	[坂井ほか1989]
43	下から8行目	[遠藤・脇本ほか2016]	[遠藤・澤野ほか2016]
43	下から8～9行目	[遠藤ほか2016]	[遠藤・脇本ほか2016]
46	エの3行目に追加	遠藤恭雄・澤野慶子ほか 2016 『沖ノ羽遺跡VI 第19・22・24次調査 ー県営ほ場整備事業(担い手育成型)満日地区に伴う沖ノ羽遺跡第12・15・17次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会	
47	ツの1行目に追加	立木宏明 2014 「細池寺道上遺跡の軽石製石製品について」『細池寺道上遺跡Ⅲ 第26次調査 ー県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う第12次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会	
47	ツの3行目に追加	立木宏明・奈良佳子ほか 2017 『細池寺道上遺跡VI 第44次調査 ー県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第19次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会 立木宏明・奈良佳子ほか 2018 『細池寺道上遺跡Ⅶ 第46次調査 ー県営ほ場整備事業(担い手育成型)両新地区に伴う細池寺道上遺跡第21次発掘調査報告書ー』新潟市教育委員会	
51	別表3 報告No.2～4の「焼成」の欄	酸化	還元
51	別表3 報告No.12の「遺存率・底部」の欄	二	三
図版28	10のキャプション	Ⅸ層	Ⅲ層

2019年3月8日発行 新潟市教育委員会